Fate/Heretical Comet

小糠雨

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

――帚星（ほし）を探しに月へ行く。

――愛を探して帚星（ほし）が来る。

月の聖杯戦争のサーヴァントの原理的に、あそこでならアビゲイルを召喚できるのでは？　と思ったので書きました。

目次

一回戦【The Fool Arrives with a Gal leon.】 ―― 1
二回戦【The Old Knight's Right】 ―― 51
幕間／襲撃【.hacker／／R.R.】 ―― 107

一回戦【The Fool Arrives with a Galleon.】

――無理ゲーじゃねえか、と思った。

だってそうだろう？

こちらの戦力は自分と、人形（ドール）が一体。一方、相手の戦力はこの広間に折り重なるように倒れている〝生徒〟たちと同数の人形。

最初に襲いかかってきた一体は倒した。直後、別の人形が立ち上がり襲いかかってきたので、これも倒した。さらにもう一体が起動したので、かろうじて勝った。

だがそこまでだ。四体目が起き上がって戦闘になったとき、まさかこの場にある人形総（すべ）てが、と考えた。その一瞬、少しだけ指示が遅れた。

こちらの人形は大破。敵はそれだけでは止まらず、自分にも凶刃を向けたのだ。

非力な人間たる自分が丸腰で、シンプルとはいえ戦闘用の人形に勝てる道理は無い。

為す術もなく胸を切り裂かれ、壮麗な細工の施された床を舐めるハメになったのだった。

『……ふむ、君も駄目か。

そろそろ刻限だ。君を最後の候補とし、その落選をもって、今回の予選を終了しよう。

ではご機嫌よう――安らかに消滅したまえ』

神経を逆撫でするような男性の声がする。

――ふざけんな、と思った。

違和感に気付いたのは今日のことだ。

同じ日が何度もループしている――なんて、普通なら馬鹿馬鹿しいと切って捨てるような感覚。

だがそれを覚えた直後から、激しい頭痛に見舞われた。

――違う。これは、違う。
自分は。俺は。
こんなところで、こんな日常を生きてはいなかった。
レオなんて転校生は居なかった。
間桐慎二なんていう友達は居なかった。
ダン・ブラックモアなどという用務員は居なかった。
遠坂凛のような鮮烈な少女は居なかった。
ラニという留学生は居なかった。
葛木なんて教師は居なかった。
俺は。
何か目的があって、外からここに来たはずなのに。
――思い出せない、思い出せない、思い出せない。
酷い頭痛を堪えて、校舎を彷徨っていたときだ。
赤い制服を見た。
レオが――レオナルド・ビスタリオ・ハーウェイが、一階の倉庫に入るのを見た。
根拠があったわけではない。
ただ、自分もあの扉を潜れば、この不快感は消えるのだと、そう思って。
必死になって通り抜けた先で、このザマだ。
――ふざけんな、と思った。
今はまだ思い出せない。
けれど俺は。他の何を蹴落としてでも叶えたい願いを持ってここに来たはずだ。
それを忘れたままここで死ぬなんて、受け入れられるはずがない。
赦せるはずがない。
「いぐな……とぅふるとぅくんが……」
口を衝いて出たのは、覚えの無い、けれど何か大切だった気がする呪文。
そう、たしか――何か約束をしたはずだ。この呪文と一緒に、言葉を交わしたはずだった。

『ああ、ああ――覚えていてくださったのね』
――声が聞こえた。
嬉しそうなような、悲しそうなようなそれは。
俺が求めていたものなのだと、そのために月へ来たのだと、記憶が無くとも確信させた。
『たった一夜の夢だったけれど――私は、終ぞ戻ることは出来なかったけれど。
あなたは信じて、待って、ここへ来てくださった』
遠かったそれはだんだん近づいてきている。
身体に熱が戻ってきている。末端まで力を込めることが出来る。
だから、立ち上がらなくちゃ。
せっかくの再会だ。臥せったままでは格好がつかない。
『さあ、喚んでくださいな。帚星に願いを懸けるように――』
嗚呼――姿を見せてくれ。
俺は、キミにもう一度会うために、ここへ来たんだ――！
『――――』
ガシャン、と。
広間に聳えていたステンドグラスが割れた。
その向こう側から、〝彼女〟が来るのがわかる。靄のかかった記憶の中の〝あの日〟に感じた魔力と同じだ、違えるはずがない。
俺を殺した人形が、今度こそ殺しきるべく腕を振り上げる。
それが振り下ろされることはない。
何故なら。
彗星のごとく飛来した〝彼女〟が、身長程もある鍵で人形を殴り飛ばしたからだ。それはバラバラに砕けて広間の彼方へと飛んでいく。
トン、と、可愛らしい靴が床を叩く。
くるりと回って身体ごと振り向いたのは、きっと俺が追い続けたそのままの姿で。
「大事なことだから、改めて挨拶します。
こんにちは。私、アビゲイル――アビゲイル・ウィリアムズ。
よければアビーって呼んでくださいな、懐かしいお友達」

知っている。知らないはずがない。
蜂蜜色の長い髪も、ツリ目がちな蒼玉の瞳も、白磁の如き華奢な身体も。リボンのたっぷりついた、ゆったりとしたワンピースも。
ここへ来る以前には、忘れたことなど須臾も無いはずだ。だってこんなにも、身体が歓喜に震えているのだから。
「私がサーヴァントで、あなたがマスター。そうでしょう？」
「――うん、俺がマスターだ」
驚くほどするりと出たその言葉にいらえるように、彼女はにこりと微笑んで。
それと同時に、右手の甲に鋭い痛みが奔った。
見ればそこには、流れ星のような三画の紋様が刻まれている。
「再会を喜びたいところだけれど、ちょっと待ってね。すぐに終わらせるから」
周囲に、重なり合うように転がっていた人形たち。それらが一斉に身を起こした。
「今の私はサーヴァント。マスター、指示をくださいな。それに従うのが私の役目よ」
指示を出す。従わせる。求めてやまなかった、目の前の少女に。
それは酷く背徳的で、だからこそ甘美だった。
「……殲滅、だ」
「ええ、やってみる！」
手に持つ鍵を目の前に突き出し、解錠するように捻る。
床に、空間に、無数の穴が開く。
そこから這い出してきたのは――触手。蛸や烏賊のそれのような巨大な触手が、人形を殴り／掴み／締め上げ／投げ飛ばす。
悪夢のような光景だった。見る者が見れば気が狂ってしまうような。
しかしそれは俺を魅了するだけだった。だってそれは彼女が引き起こしたモノなのだ。美しいと思いこそすれ、忌避する理由などありはしない。
きっと俺は――既に狂っているのだから。

「見てくださった？　マスター！」
もちろん、見ていたとも――そう、言いたかったのだが。
彼女に出会えた歓喜や、気合いや、そういった気持ちで保(も)たせていた身体が、そろそろ限界だった。傷は深いぞ、がっかりしろ。
加えて、右手に刻まれた紋様が発する痛みも徐々に強くなっている。
これは不味い。意識が遠退く――。
『君の手に刻まれたそれは令呪(れいじゅ)。サーヴァントの主人となった証だ。
しかしそのサーヴァントは――否(いや)、こうして現界している以上、問題は無いのだろうな』
途絶えかけた意識のすき間に滑り込んできた声は、あの男性のものだった。
『話を戻そう。それは使い方によってはサーヴァントの力を強め、あるいは束縛し、なんとなれば自害をも強制できる、三つの絶対命令権。まあ使い捨ての強化装置とでも思えばいい。
ただし、同時に聖杯戦争本戦への参加資格でもある。令呪を全て失えば、そのマスターは失格――即座に死ぬ。注意する事だ』
こんな朦朧(もうろう)とした状態でそんな重要な説明を聴かせるのか。声の主は随分と性格が悪いらしい。
聖杯戦争――そう、そうだ。俺はそのためにここへ来た。ルールも大まかには事前に知っていたはずだ。今は思い出せないけれど。
令呪は三画だが、使い切れば死ぬ。という事は、使えるのは実質二回のみ。
『まずはおめでとう、帚星へ辿り着いた者よ。とりあえずはゴール、という事になる。
誇りたまえ。君の執念は、運命を打ち負かしたのだから』
低い声から受ける印象は四十歳前後。落ち着いた口調から神父を思わせるが、同時にこんな奴が神父でいいのかという不快感をも覚えさせる。
この声は覚えておこう。会うことがあれば一発殴ってやる――！
『物騒なことだな。私については気にせずとも良い。かつて地上に

在った者を模しただけの、ただの定型文だ』
そろそろ、本当に限界だ。
視界が傾ぐ。アビーが駆け寄ってくるのが見える。その華奢な身体で、しかし軽々と俺を支えて――そこで、認識が途切れた。

――聞くが良い、数多の魔術師よ。
これにて役者は揃った。
己が欲望を絶対とし、他者のそれを鏖殺せんとする罪人たちが。
なれば、ゲームを始めよう。
いかなる時代、いかなる歳月が流れようと。
闘いをもって頂点を決するは人の摂理。
熾天の玉座はたった一人、勝ち残った者のみを迎え入れる。
故に殺し合え。
月に招かれた、電子の世界の魔術師達よ。
汝、自らを以て最強を証明せよ――！

★

――泥濘の日常は燃え尽きた。
――魔術師による生存競争。
――運命の車輪は回る。
――帚星を探した者よ、門を開け。
――己を阻む総てを、領域外へと招くために。

★

「こんばんは！　私、アビゲイル――アビゲイル・ウィリアムズ。
よければアビーって呼んでくださいな。すぐにお友達になれると思うわ！」
――欠けていたモノを、見ているようだ。
一〇年前。まだ俺が一〇歳だった頃。
流星群を見に近所の山に登った俺は、不思議な少女に出会った。
目の前、空中に、突如開いた銀色の穴。そこからポンと飛び出した彼女は、俺の姿を見た途端焦ったような表情になったが、すぐに笑顔になって自己紹介を始めた。
あまりに突然で、しかもあまりに自然体で、さらにあまりにかわいかったものだから、俺は暫し呆けていたと記憶している。
「あ……えっと、夜ノ森彗（よのもりけい）、です。よろしく」
「よろしく、ケイ！　ところで、ここはどこかしら？」
楽しい時間だったと思う。
不可解な現れ方をした、見知らぬ少女。本来ならば警戒して然るべきだが、美しいその少女に魅入られた俺にそんなものは欠片も無かった。
ただ一緒に星を見て、たわいない話を交わしただけだったが、それは俺の心に深く楔を打ち込んだ。
彼女とはその夜の数時間、一緒に居ただけだ。夜明け前に、彼女は現れたときと同じ銀色の穴をくぐって去っていった。
去り際に、彼女は何と言ったのだったか。
「もう二度と会えないと思うわ。けれど、約束しましょう。きっと、また出会う――って」
そして、俺にあの呪文を教えてくれた。
Ｙｇｎａｉｉｈ（父、よ）　ｔｈｆｌｔｈｋｈ（救、た）’ｎｇｈａ（ま、え）――。
「もしかしたら、神（おとうさま）様が叶えてくれるかも知れないでしょう？」

――目を開く。
今のは、そう。俺をこの場所へ連れてきた衝動の源泉。最も大切と

言って良い記憶。
身体を起こして、思考を巡らせる。予選のために差し出していた記憶は、どうやら問題なく返還されているようだ。少しの瑕疵も無く思い出せる。
「あら――目を覚ましたのね、マスター！」
傍らから聞こえた声に、内心を弾ませながら振り返る。
そこには、アビーが居た。あの日、あの時の姿のままの、アビゲイル・ウィリアムズが。
「ケイ、とは呼んでくれないのかい？」
あの夜のように。
「あ、ごめんなさい――でも、これは聖杯戦争で、私はサーヴァント、あなたはマスターだもの。誰の目も耳も無い場所ならともかく、普段はマスターがいいと思うわ。だから、最初にああ言っておいてなんだけれど、マスターも私のことはクラスで……フォーリナーって呼んでくださいな」
なるほど、尤もだ。それがどんなに些細な、取るに足らないものであれ、敵に情報を与えないに越したことはない。呼び方ひとつだって、俺たちの関係が良好か否か等、漏れてしまう情報はあるのだ。
ましてやサーヴァントの真名は秘匿すべき最たる情報。どこそこ構わず気軽にアビーなどと呼んでしまっては不利になるだけだ。
しかし、今、不可解な単語が聞こえたような。
「フォーリナー？　そんなクラスあったっけ？」
この聖杯戦争におけるサーヴァントとは、英霊を七つのクラスという枠に押し込めて召喚した電脳魔、だったはずだ。
剣士（セイバー）
弓兵（アーチャー）
槍兵（ランサー）
騎兵（ライダー）
魔術師（キャスター）
暗殺者（アサシン）
狂戦士（バーサーカー）

以上の七つ。フォーリナーなどというクラスは聞いていない。
「私はエクストラクラスっていって、その七つに当て嵌まらないクラスのサーヴァントなの。降臨者のサーヴァント、フォーリナーよ」
降臨者（フォーリナー）。なんだそのカッコイイ響きは。
まあたしかに、アビーのかわいさは七つのクラスに納まりきるようなものではない。エクストラクラスになるのも当然か。
「それと、……私はサーヴァントだから、その。厳密には、アビゲイル本人ではないわ」
知っている。ここ、霊子虚構世界（りょうし）ＳＥ．ＲＡ．ＰＨにおいて召喚されるサーヴァントとは、言わば再現ＡＩだ。
月――超常の観測機械たるムーンセル・オートマトンが、地球の過去・現在・未来、果ては平行世界をも観測した／予測した／演算したことで貯め込まれた膨大なアーカイブ。
それを基に、聖杯戦争のルールに則って魂レベルで再現された英霊のデータ、それがサーヴァント。目の前の彼女はそれだ。
それが、どうしたというのだろう。
だって、ムーンセルは数多枝分かれする未来や平行世界をも観測しているのだ。
それは、つまり。
「キミは――俺と再会したのかい？」
「……いいえ。あなたと会ったのは事故のようなもので、どうやったらもう一度行けるのかわからなかったの。だから、私は生涯、あなたとは会えなかったわ」
サーヴァントとしての彼女がこう言っている以上、少なくともムーンセルが観測した範囲において、俺がオリジナルの彼女と再会する未来は存在しないのだ。
わかっていたとも。彼女自身が「二度と会えないと思う」と言ったのだから、それはきっとそうなのだ。わかっていたからこそ聖杯に縋ろうとした。
もう二度と会えない彼女が目の前に居て、少なくとも記憶・人格の面では本人と同じに再現されている。

それはもう、本人では？　本人だろう。本人だ。
だから、聖杯を手にした暁には、願うはずだった。ムーンセルが記録しているはずのアビゲイルを再現するように。
だがなんということだ、聖杯に懸けるはずの願いが予選通過段階で既に叶ってしまった。普通の女の子ではないのは知っていたが、まさか彼女がサーヴァントとなれる程の存在だったとは。
まあ、だからといって負けるわけにはいかないのだが。
再会だけで満足できるはずがあろうか。いや、ない。
勝ち抜けば勝ち抜いただけ長く一緒に居られる。
それに、最後まで勝ち抜けば――聖杯を手にすれば、彼女を地上に受肉させることも出来る。地上に帰らずにこのＳＥ．ＲＡ．ＰＨに留まって、霊子生命体として生きていく道だってある。
これが本人であったなら、いつかまた別の世界へと、俺を置いて旅立つかも知れない。言っていたではないか、いつか再び親友や恩人に巡り会うために旅をしているのだと。
しかし今の彼女はそうではない。不謹慎ながら、本人でないのはむしろ望むところと言えた。
けれどそんな未来の展望も、この戦いで負けてしまっては意味が無い。
必ず、勝たなければ。何よりも己が欲望のために。
「だったら、俺にとっては、キミが本人だ」
「……っ！」
一瞬、悲しげな表情になった。次には、安堵したようだった。
オリジナルを蔑ろにするかの如き発言の裏に、見たのだろう。「聖杯を手にしても、オリジナルとの再会を望まない」という意図を。その時がきても、〝このアビゲイル〟は〝不要〟とされないのだと。
歪（いびつ）かもしれないが、俺たちはこれでいい。

俺が寝ていたのは保健室だったらしい。
健康管理ＡＩを名乗る間桐（まとう）桜――藤色の長い髪が美しい少女だっ

た――からバイタルに問題無しとのお墨付きを得て、ついでに携帯端末を支給されて、俺たちは保健室をあとにした。
『マスターったら、あんなに鼻の下をのばして！』
霊体化して姿を消しているアビーがご立腹だ。
「のばしてないって。そういう意図は全く無い」
『ふん、どうかしら！』
いや、本当に無い。
だがそれでも、あれは目で追ってしまうだろう。あんな、ボディラインがわかりにくいはずの制服をも押し上げて存在を主張する胸部なんて。男女問わず、誰だって目が行くはずだ。
そんなことより、さっさと二階の掲示板を見よう。桜の言によれば対戦相手が発表されているはずだ。
『むー……』
いまだむくれている（であろう）アビーを伴って、二階の階段脇にある掲示板を確認しに行く。
――マスター：間桐慎二
――決戦場：一の月想海
貼り出されていたのは知った名だった。
間桐慎二。予選において、俺の親友、そしてあの健康管理ＡＩの兄という役割（ロール）を与えられていた男。
「いやあ、参ったなあ。まさか君が一回戦の相手とはね。なあ夜ノ森？」
非常に癇（かん）に障る声がした。
振り向けばそこには群青色の天然パーマ。同色の瞳は明らかにこちらを見下している。胸元を大きく開いて着崩した制服が相変わらず気障ったらしい。
件（くだん）の対戦相手、間桐慎二だった。
「けどまあ、それも当然かな。この僕の友人に割り当てられるんだから、君も世界有数の魔術師（ウィザード）ってことだ」
「いや、何言ってんだお前」
改めて話してみると非常にイライラする。予選の俺はよくこんな

のと親友なんてやってたなと本気で感心した。
「そういえば君、予選をギリギリで通過したんだって？
いいよねえ凡俗は。お情けで通してもらえるんだからさあ。でも本戦は実力勝負だから、勘違いしたままはよくないぜ？」
「いやお前ほんと何言ってんの？」
聖杯戦争にお情けもクソもあるものか。相手は管理の怪物ムーンセルだ。合格点に一点でも足りなければ容赦なく失格だ。
「まぁいいや。正々堂々戦おうじゃないか。なんだかんだ結構いい勝負になると思うぜ？　君だって選ばれたマスターなんだからねえ？」
「……」
こちらの言葉に一切反応しないまま、言いたいことだけ言って去っていった。
すげえなあいつ。大物だ、逆に感動した。実はＮＰＣなんじゃないのか。
『マスター、知り合いなの？』
「予選でな。友人役だったんだ」
『……戦えるの？』
「もちろん」
何を馬鹿なことを。友人だから何だというんだ。
俺は願いを叶えるためにここに来た。戦えないなどと言ってしまえば、自分の願いが慎二のそれに劣ると宣言するも同じだ。
そんなことは認められない。誰にとってくだらない願いだとしても、俺にとっては至上なのだ。
「君こそ戦えるのかい？　少なくとも決戦の場では、サーヴァントを殺さなきゃ勝ちにならないぜ？」
『それこそ当然よ。私をあの時の小娘と同じとは思わないでくださいな。今の見た目はこんなだけれど、それなりに長く生きたおばあちゃんなのよ、私』
「そりゃよかった、つまり合法ロリってことだな」
『もう、マスター！』
真面目な空気は霧散した。

これでいい。予選での役割（ロール）に引っ張られてシリアスやって、挙げ句負けて死んだりなどしてみろ。馬鹿らしいにも程がある。
「ひとまず、端末に書いてあったアリーナってやつに行ってみよう。今日は慣らし程度でさ」
『ええ、行きましょマスター』

――第一暗号鍵（プライマリトリガー）を生成。第一層にて取得されたし。
端末に連絡があったのは一夜明けてからだった。
昨日はアリーナのほんの入り口あたりで肩慣らしにいくつかの敵性（エネミー）プログラムと戦って、早々に切り上げた。アリーナで何をすべきか特に開示されていなかったからというのもある。
今日からが本番だ。
暗号鍵（トリガー）というのは、アリーナへ向かう途中に居た言峰（ことみね）という神父――聖杯戦争を運営するＮＰＣの統括であり、例の声の主――に聞いたところによると、決戦場への切符のようなものだという。ちなみに言峰に殴りかかったら八極拳で返り討ちにされた。
六日間の猶予期間（モラトリアム）のうちに暗号鍵を二つ取得しなければ、決戦場の扉は開かれない。これを入手することさえできないのなら決戦に臨む資格は無いということだ。
ならばと気合いを入れて、俺たちはアリーナに足を踏み入れた。
隣には実体化したアビーが居る。
アリーナ内ではサーヴァントは強制的に実体化されるのだ。気配遮断スキルや透明化する宝具等を用いない限り、姿を晒して活動することとなる。
「マスター、居るわ」
「慎二か？」
「ええ。正確にはサーヴァントの気配なのだけど、サーヴァントが居るならマスターも居るでしょう？」
なるほど、道理だ。
「じゃあ、試しに一度会ってみようか。あいつのサーヴァントがどん

なだか気になるしな」
「会うの？　てっきり避けるのだと思っていたわ」
「情報を得るチャンスだからね。それに慎二のことだ、たぶんどこか避けようのないところで待ち構えてるよ」
主に俺を見下すために。遅かったじゃないか、僕はもう暗号鍵を手に入れたぜ――とか言うためだけに。
わざわざそんなことに時間を割かなくてもと思うが、彼にとっては重要なんだろう。
敵性プログラムの相手はアビーに任せつつ、一本道の通路を進む。
ほどなく、慎二の姿が見えた。予想通り、広間の入り口に陣取っている。これは避けられない。
「遅かったじゃないか夜ノ森。僕を畏(おそ)れて逃げ出すかとも思ったけど、いや待ってた甲斐があったよ！」
大袈裟な動きでそう言った彼は、制服の胸ポケットからカード状のデータを取り出し、見せ付けるように掲げた。
「お前がモタモタしてるから、僕はもう暗号鍵をゲットしちゃったぜ！」
「そうか。じゃあそれ、くれ」
俺の後ろからアビーが飛び出した。蔦を模した精緻(せいち)なスワールの装飾が施された、巨大な黒い鍵を、慎二の腕目掛けて振り抜く。
「――は？」
彼は反応できていない。
しかし、鍵が腕を捉える直前、彼女はそれを引き戻した。直後、それに何かがぶち当たる甲高い音。あのまま殴ろうとしていれば、それは彼女の心臓を貫いただろう。
大きくバックステップして俺のすぐ目の前まで退がり、身構えるアビー。
慎二の隣には、いつの間にか赤い長髪の女性が立っている。
顔の大きな傷跡と、胸元が大きく開いた赤いコートが特徴的だ。十中八九彼女が慎二のサーヴァント。クラシックな拳銃を携えているから、先の攻撃はこれだろう。

「な、何するんだよ！」
「何って、お前がそんな得意げに見せびらかすからさ。自分で探すよりそれを奪った方が余程手っ取り早い」
明らかに狼狽えている慎二にそう返すと、赤いサーヴァントは大声で笑いだした。
「おい、何がおかしいんだよ！」
「ククク……いやなに、あっちのマスターはよくわかってると思ってねえ。
敵に財宝を見せびらかすなんざ、奪ってくれって言ってるようなもんさ。嫌なら大事に仕舞っとくんだね。それかパァッと使い切りな。アタシは使う方が好みだね」
全くその通りである。
特にこのＳＥ．ＲＡ．ＰＨでは、所持アイテムはゲームと同じように個人のストレージに格納される。実体化させない限り他者が奪うことはできない。使わないときは実体化させずに仕舞っておくのが定石だ。
彼は有名なゲーマーだと聞いたが、そんなことも調べていないのか、はたまた考えが及んでいないのか。
「アンタ、予選じゃこいつの親友だったんだろう？　場合によっちゃ平和的に話し合いでいけるかとも思ったんだがねえ――今のを見る限り無理そうだね」
「もちろん。俺は負けるわけにはいかないからね。まあ、だから、なんだ。なあ慎二」
――悪いが、俺のために死んでくれよ。
「なっ……！」
「ハッハ、こいつぁいい！　願いのために躊躇無く友を殺すかね！　悪役はアタシらだと思ってたが、どっちが悪だかわかったもんじゃないね！
ほらシンジ、負けちゃいられないよ！」
「くそっ、ふざけんなよ！　お前なんかが僕に勝てるわけないだろ！　いけ！　手加減なんかするなよ、絶対倒せよ！」

「はいはい、全く子供だねえ。報酬はたっぷり用意しときなよ！」
相手はやる気十分なようだ。
そういえば、言峰が戦闘について何か言っていたな。
たしか、猶予期間中の私闘は禁止。校内で攻撃を仕掛けた場合はペナルティが課せられ、アリーナで戦闘を行った場合は数手以内にムーンセルが干渉し強制終了する。
しかし逆に言えば。アリーナでの戦闘は時間内に仕留められるなら決戦前に勝敗を決せられるし、時間いっぱい生き延びられるならば相手の情報を得る好機となるということだ。
「やれるか？」
「ええ。ちょっとだけ本気を出しても？」
「構わない。まずは、やられないのが最優先だ」
「それじゃあマスター、魔力を。溢れるくらい、注ぎ込んで……！」
アビゲイルの姿が変わる。魔女を思わせる帽子を被り、ワンピースは解けて露出が増え、身体が宙に浮く。瞳は真紅に色を変え、そして額には伽藍（がらん）の鍵穴が。
同時、持って行かれる魔力量が跳ね上がる。今の俺では長く保っても一時間。一度戦闘するに支障は無くとも、現界を維持するには問題しか無い。故に、普段は魔力消費を抑えるため、ある程度スペックを落としている。
「いあ……いあ……ふふふふ……」
さて、初の対サーヴァント戦だ。
人格はともかく、魔術師としての腕に関しては慎二は侮れない。ましてやサーヴァントは英霊の再現、油断などできるはずがない。
弛（ゆる）まずにいこう。
アリーナに警報音が鳴り響く。どうやら、本格的な戦闘行為に入りそうなことをSE・RA・PHが感知したらしい。しばらくすれば強制的に止められるだろう、どうやるのかは知らないが。
「そおら！」
敵サーヴァントは両手の拳銃をアビーに向け、容赦なく乱射し始めた。

明らかに単発式の拳銃から弾丸が景気良く吐き出される。サーヴァントの武器である以上まともではないとは思っていたが、リロードの必要が無いらしい。
ぶちまけられた弾丸を、アビーは器用に鍵で弾いている。少女に見えてもやはりサーヴァント、人間の基準など軽く超越している。
「ほらほらァ！　弾くだけじゃ勝てないよ！」
「……ああ、鬱陶しいわ。とてもとても、煩わしい」
普段のアビーからは考えられない程の冷めた声音。
これが彼女の本性であることを俺は知っている。
外なる神の依代となった彼女は徐々にその力に引っ張られ、人格を変質させた。そして人間としての良心や理性、純真さを残したまま、邪悪で酷薄で淫蕩な魔女になった。
――と、そんなようなことを昨夜マイルームで、ばつの悪そうな顔を真っ赤にして打ち明けられて、正直めちゃくちゃ興奮した。かわいいが過ぎる。
ああ、ロリコンの誹りは甘んじて受けよう。
彼女は身長一五二センチと、背丈だけなら小柄な成人女性と言っても通る大きさだが、それでも肉体は一二歳のときのそれで現界している。言い逃れはできない。
だが俺は止まらねえからよ。マイルームは自分たちの他に何者も入れない不可侵領域。誰も俺たちを止められない。
そう――例え俺がアビーの魅力にやられて理性を吹っ飛ばしたとしても、彼女が拒絶しない限りそれは何の問題も無いのだ！　最高かよ！　というか最高だったよ！
……ああ、いや。今はそんな場合じゃなかった。
「これでどう？」
空間に数多の穴が開く。
俺やアビーの目の前と。そして――敵サーヴァントの背後に。
「ほら、返すわ」
眼前の穴に入った弾丸が。
一拍置いて、敵サーヴァントの背後の穴から飛び出した。

「ちィッ！」
敵サーヴァントは驚異的な反射で床を転がり射線を離脱。弾丸は数発が彼女を掠ったようだったが、ほとんどがそのまま直進して再び俺たちの前の穴に飛び込んでいく。
それとほぼ時を同じくして、アリーナの警報が一際強く一度鳴り。
敵サーヴァントの拳銃、アビーの鍵、開いていた穴も。その全てが消え去った。なるほど、これがＳＥ．ＲＡ．ＰＨの強制終了か。
「何やってんだよ！　倒せって言っただろ！」
「アンタこそ何言ってんだいシンジ。今の見てなかったのかい。
こいつらとは相性が悪いよ。宝具も無しで、こんな短時間で倒せる相手なもんか」
「チッ……もういい！　どうせもう戦闘は無理だしね！
おい夜ノ森！　お前、見たとこ結構レアなサーヴァントを引いたみたいだけど、ハッカーとしての腕は僕の方が上なんだ！　今回ちょっと善戦できたからって調子に乗るなよな！」
喚くだけ喚き散らして、シンジはその場から一瞬で消失した。何かのコードキャストでアリーナ内のどこかへ転移したか、あるいはリターンクリスタルというアイテムで校舎に帰還したか。暗号鍵は取得しているから後者だろう。
「お疲れ、フォーリナー」
元の低燃費形態に戻ったアビーに声をかける。
「ええ、マスターも。怪我はない？」
「おかげさまでな。そっちは？」
「私も全然へっちゃらよ」
えへん、と胸を張るアビーにほっこりしつつ、意識を今後のことへ切り替える。
ひとまず、アリーナのこの階層を制覇しよう。余すところなくマッピングして、暗号鍵のみならず拾えるものは何でも拾っていかなければ。
今回の戦闘でわかったことは、俺自身のスペックの低さだ。
なんとも情けない話だが、アビーが本気を出したら俺は魔術を使う

余裕は無さそうだ。使えば使うほど彼女に回せる魔力が減り、継戦能力は激減する。
かといって、アバターをより良くカスタマイズするには、俺の手腕ではリソースが足りない。
いや、外見は別にいい。顔も体格も現実の俺のそれだ、問題無い。服装は予選で生徒になっていた月海原学園の制服だが、これに頓着する余裕は無い。
問題は、このアバターは魔力の総量が少ないことにある。
魔術回路が生み出した魔力を、十全に通すことができない。結果ロスが生じ、実際に精製した魔力と使える魔力に差ができてしまう。
これを解決するには、リソースを掻き集めてアバターを造り替えるしかない。
つまり、敵性プログラムを倒し、経験値を得て、レベルアップする必要があるということだ。
――と、いうわけで。
「よし、行くぞ！　狩りの時間だ！」
「おー！」
ＲＰＧの経験値マラソンみたいなものだ。
この階層の敵性プログラムを狩り尽くす勢いでいくぞ！

★

暗号鍵を手に入れ、アリーナを隅から隅まで歩き尽くし、Ｍｏｂ（エネミー）を狩りまくって、俺たちはマイルームへと帰還した。
マイルームは、聖杯戦争に参加するマスター一人につきひとつ与えられた拠点だ。支給されている端末に認証コードが登録されており、それを特定の教室の扉に転写することで転送される。その性質上、他者は絶対に入って来られない。
内装は普通に教室だったので、出来る範囲で模様替えしている。

机を四つくっつけてテーブル替わりに。机を二〇個程くっつけて、アビーと一緒に眠れる大きめのベッドに。布団は、今日アリーナで集めたリソースをいくらか使って購買で買ってきた。何故購買に布団があるのかは甚だ疑問だが。昨日はカタい机で寝るハメになったが、今日からは快適だろう。

そして黒板は作戦会議に使う。

余った机や椅子は部屋の隅に積み上げてある。

「ところでケイ。あの、シンジ……だったかしら？　っていう人のサーヴァントのことなのだけど」

「ん？　なんだい？」

「飛び道具を使っていたから、クラスはアーチャーなんじゃないかなって思って」

「なるほど」

ベッドに腰掛けて脚をプラプラさせているアビーに癒やされつつ、思考を回す。

アーチャー。確かに、飛び道具を使うクラスとなれば妥当なところだ。余程特殊な事情でも無い限りには、少なくともセイバーやランサーではないだろう。

だが、彼女が得物としていた拳銃。見たところ最初期の、それこそ拳銃が世に生まれた直後くらいの時期のものだ。その頃の拳銃は連射が出来ないうえ精度も低く、生前に主力とするには頼り無い。剣や槍がメインだが銃も持って現界した、という可能性も無いとは言えず、ミスリードを狙ってのことだったかも知れない。

今出せる結論としては――

「可能性は高いけど、今は情報が少なすぎて何とも言えないな」

「そう……そうよね」

自信があったのだろう。否定とまではいかないものの肯定もされず、少しシュンとしてしまった。

「ああもうアビーはかわいいなあ！」

「きゃあっ!?」

急に抱きしめたからだろう、素っ頓狂な声をあげたアビーは、しか

し拒絶することなく、されるがままだ。
「もう……ケイは悪い人だわ。
昨日もそうだったけれど、あなたってあれだわ、ちょっと私のことが好きすぎるんじゃないかしら」
「そりゃあもう。だって俺の初恋で――ずっと忘れられなくて、二度と会えないなんて認めたくなくて、こうして月まで来ちまったんだぜ」
「そう……そうよね。
ねえ、ケイ。あなたってとっても背が伸びたのね。こうして私がすっぽり収まってしまうくらいに」
確かに、俺はあの夜と比べてずいぶんデカくなった。アビーよりも低かった身長が、今では一八〇センチだ。
「アビーは変わらないな」
「だって私はサーヴァントだもの。全盛期の姿で召喚されるわ。それがこれっていうのは少し不満なのだけど。きっとケイに影響されたのね」
それから、彼女はしばらく無言でいた。俺も、彼女を抱きしめたままではあったが、何も言わなかった。
「……ねえ。私は、アビゲイルなのよね？　あなたにとって、私は、アビゲイルでいいのよね？」
声が震えている。
「もちろん。君はアビゲイル・ウィリアムズ。俺の、世界で一番大切な人だ」
頭を撫でて、背中を軽く叩いて、そのままベッドに横になる。
「痛いほど手を握って。それだけでいいの」
「アビーが望むのなら、いくらでも」
寝付くまでの間、アビーはずっと震えていた。

翌日。俺たちは図書室へ向かっていた。
慎二のサーヴァントについて調べるためだ。あまり手掛かりは無

いが、拳銃黎明期(れいめい)――だいたい一六世紀あたりの英霊を調べてみれば何かわかる可能性はある。
そう思ってマイルームを出、同じ二階にある図書室へと歩を進めていたのだが。
見知った後ろ姿を見つけた。慎二だ。図書室の真ん前に陣取って、誰かと話している。
これは好機。幸い、あいつはこちらに背を向けている。図書室は階段のすぐ近くだし、階段に身を隠せば会話が聞こえるだろう。
『ふふ、なんだかいけないことをしているみたいだわ』
アビーはなんだか楽しげにしている。霊体化しているので見えないが、きっと悪戯っぽく笑っていることだろう。くっそ、見たかった！
これほど多大な犠牲を払ったんだ、相当重要な情報をくれなきゃ承知しねえぞ慎二ィ！
「いや洒落てるよ。海ってのはなかなかいいテーマだ。あんまり期待してなかったけど、このゲーム、わりと凝った作りをしてる」
「へえ、ご機嫌ね？　その分じゃ結構いいサーヴァントを引いたみたいじゃない。アジア圏有数のクラッカー、マトウシンジ君？」
「当然さ。キミには何度か煮え湯を飲まされたけど、今回は僕の勝ちだよ、トオサカリン！」
トオサカリン……遠坂凛？　予選で学園のマドンナやってた遠坂凛か？
そっと顔を出してみる。慎二は相変わらず背中しか見えないが、奥の人物はここからならよく見える。
黒髪をツーサイドアップにした、赤い服に黒いミニスカートの女性。間違いない、あの遠坂凛だ。
何度か煮え湯を飲まされた、ということは、あの二人は地上で何か因縁でもあるんだろうか。
そういえば、遠坂凛という名には覚えがある。西欧財閥に敵対する、国際指名手配中の霊子ハッカーがそんな名前だったはずだ。天才的な腕を持つ魔術師(ウィザード)だとかなんとか。

「僕はもちろん、彼女の艦隊だってまさに無敵。いくらキミだって、逆立ちしても勝てやしないさ！」
……おいおい。マジか慎二。
「ふぅん？　サーヴァントの情報をペラペラ喋っちゃうなんて、マトウ君ったら余裕なのね？」
遠坂の視線が一瞬こちらを刺した。
そりゃそうだ、慎二と違って彼女はこっちを向いているのだから、気付かれて当然だ。
「うっ……そ、そうさ！　あんまり余裕だとクソゲーになっちゃうからね、ハンデってやつだよ！
あ、で、でも、あんまり信じすぎるのもどうだろうね？　ほら、ブラフってこともあるし？」
下手くそか――！
いくら何でも誤魔化すのが下手すぎるだろ。あの狼狽えっぷりが演技だったらアカデミー賞ものだ。
「そうね。さっきの迂闊な発言からじゃ、真名はあくまで推測の域を出ない。それでも艦隊を操るならクラスはわかったようなものだし……どうせ攻撃も艦なんでしょ？　艦砲射撃だとか、艦で体当たりとか？
まあ今の私に出来ることって言ったら、物理障壁をしこたま用意しておくくらいかしらね」
「なっ……いや……」
「あ、一つ忠告しておくけど。私の推測が正しいなら、〝無敵艦隊〟はどうなのかしらね。それはむしろ敵側の渾名だし？　せっかくのサーヴァントが気を悪くしても知らないわよ」
なんと。遠坂はどうやら、本当にとても優秀らしい。今のやり取りで真名に行き着いたようだ。
無敵艦隊。これは重要なワードだろう。図書室に行ったら早速調べるべきだ。
「ふ、ふん！　まあ、だからって今のキミにはどうしようもないさ、僕とキミが当たるとも限らないんだしね！」

……それは「あなたの推測は全て正解です」と言っているようなものではなかろうか。
内心呆れていると、彼は捨て台詞を吐いて振り返った。
まあ、俺は頭を引っ込めていなかったので、当然目が合う。
「お、おま、夜ノ森!? お前まさか、ずっとそこで聞いてたのか!?」
「当たり前だろ。俺だけじゃない、ほら」
ちょっと悪戯心がわいたので、俺は廊下に出て軽く周囲を見回してやった。
二階の廊下に居る全員が、こちらを見ている。
「――――っ！」
慎二は顔を青くして絶句した。
「なんだよ、面白い顔して。当然だろ？ 俺たちは何回戦で誰と戦うかわからないんだ。敵になるかも知れない奴が大声で情報吐いてるんだから、そりゃ聞き逃さないさ」
「あ……う……」
口をパクパクさせて数歩後退った慎二は、次の瞬間には顔を真っ赤にして喚きだした。
「う、うるさい！ お前、ちょっとレアなサーヴァントを引き当てたからって偉そうに！
こっちだってお前たちの情報は集めてるんだ！ 例えばそう、お前のサーヴァントのクラス！ 妙な魔術を使いやがって、どうせキャスターだろ！ ええ!? どうなんだよ！」
おや。どうやら彼はアビーのクラスを勘違いしているようだ。
いやまあ、フォーリナーなんてクラスはたぶん意図的に調べないと出ないだろうから、あの戦闘を見て推測するならキャスターは妥当だろうが。
「えーまじでーやっぱーいなんでわかったのー？」
「お前ふざけてんのか!? くそっ、くそっ！ 馬鹿にしやがってぇ!!」
馬鹿にはしていない。ただ、大声でキャスターと叫んだところで違うのだ。周知されて問題は無く、むしろ都合が良い。
「言っとくけど！ 最弱のクラスであるキャスターで僕に勝とうなん

て思わないことだね！　お情けで予選通過したクズがさあ！」
「――嗚呼、ダメよ。それは聞き捨てならないわ」
　気付けばアビーが実体化し、例の鍵をピッタリと慎二の首に当てている。腕を引けばそれだけで、先端のブレードが後頭部を殴打するだろう。
　姿こそ低燃費モードのままだが、彼女の声は酷く冷たい。
　彼女は俺と慎二の間に立っている。こちらに背を向けているので表情はわからない。
「酷いことを言う悪い人。あなたの予想は大外れ。滑稽ね、あれだけ大声で喚き立てておいて……ふふふ、ふふふふふ……！」
　えっ、それ言っちゃうんすかアビーさん。
「このっ……笑うな！　笑うなァ！　なんだお前！　何なんだこのクソガキィ！」
　――あ？　クソガキだ？
「フォーリナー、そこまでだ」
「はぁい、ごめんなさいマスター」
　一転して明るい声になって、素直に霊体化して消えた。
　それにしても、ごめんなさい、とはね。どうやら単に激してのことではなく、何か意図があってバラしたらしい。まあ、だいたい予想はつくけど。
「フォー、リナー……？」
　アビーのクラスを聞いた慎二は呆けたような顔になって、彼女が消えた辺りをじっと見ている。
「フォーリナー……今のサーヴァントのクラスかしら。七つのクラスのどれでもない、エクストラクラスってやつね。実際に引き当てる奴がいるとは思わなかったけど」
「その通り。どうだ慎二、羨ましいだろう？　お前の〝ライダー〟なんて目じゃない、ちょっとレアどころか激レアサーヴァントだ」
　遠坂のセリフを肯定しつつ、これまでのお返しとばかりに煽ってやる。しばらく事態を飲み込めなかった様子だが、すぐに真っ赤になってギャーギャー言いだした。

「は、はぁっ!?　なん、な、なんでお前なんかがそんなの引いてんだよ！　有り得ないだろ！　凡俗は凡俗らしくキャスターでも引いてろよ！　だいたい――」
「うるっせえな……」
キャスターキャスターキャスター、お前それしか言うことねえのか。だいたいキャスターだって強いのは居るだろ、たぶん。
ああ、だが俺が言いたいのはそんなことじゃあない。
騒ぐ慎二の胸倉を掴みあげてやると、ピタッと黙った。なんだよ、喚けよほら。
「お前は殺す。必ず殺す。せいぜい決戦までに洒落た遺言でも考えとけ」
突き飛ばす勢いで手を放す。
「……っ！　くそっ！」
悪態ひとつを置き去りにして、慎二は一階へ走って行った。
「……何キレてんの、アンタたち」
一部始終を見ていた遠坂は心底呆れたといった様子だ。
「いやあ、あの野郎が地雷を踏み抜いたもんだからつい」
「……まあいいけど。
それにしても、良かったの？　キャスターだと思わせといた方が有利でしょうに」
「おや、信じるのかい？　口から出任せのブラフかも知れないぜ？」
「マトウ君と違って堂々とそれを口にするのね。でもそれ、態度の問題じゃなくて、本人が言うと意味ないってわかってる？」
「まあな。バレないに越したことはないけど、バレたっていいんだよ。
だいたいさ、ほら、フォーリナーって言われても該当しそうな英霊にもクラス特性にも心当たり無いだろ？」
「それはまあ、確かにそうだけど。
フォーリナー……異邦者、来訪者、ってとこかしら。だとしたらジョン・タイターやサン・ジェルマン伯爵なんかは該当しそうだけど……マトウ君のサーヴァントの例があるとはいえ、いくらなんでもあんな少女じゃあないでしょうしね。

ムーンセルのデータベースにアクセスすればわかるかも知れないけど、私たちが閲覧できるのはこの図書室にある分だけだし」
ああ、そういえば。エクストラクラスについての資料なんかは図書室に置いてあるんだろうか。さっきはそんなことに思い至りすらしなかったが、あるとしたらさすがに困る。
「え？　いえ、無いんじゃない？　そういう基本ルールみたいなものは端末で見られる範囲だけのはずよ」
「へえ、そうなのか。
あ、俺は夜ノ森彗っていうんだ。よろしく遠坂」
「敵とよろしくしてどうするのよ。まあでも、覚えといてあげるわ。あの調子じゃマトウ君は負けそうだしね」
そして遠坂もまた去っていった。
さて、端末……端末ねぇ。一応見てみるか。

結論から言えば、端末で確認できるのは基本の七クラスの情報だけだった。
これから先、例えば慎二がアビーについて情報を集めてマトリクスを解放していったならば彼だけは詳細が見られるだろう。それは、俺がアビーのマトリクスを参照したらかなり詳細に表示されたことからの推測だ。
しかし、今日アビーがフォーリナーであると知っただけのマスターたちはそうではない。彼らの端末で彼女のマトリクスを表示したところで「フォーリナー」と書かれているだけだろう。
さて、不安がある程度解消されたところで、当初の予定通り図書室で調べ物だ。先の盗み聞きで得た情報も活用すべきだろう。
『ごめんなさい、マスター』
「いいって。ちょっと面白かったしな、慎二のリアクション」
アビーがあんなことをしたのは、俺をクズ呼ばわりされた仕返しだ。
プライドの高いあいつのことだ、見下している俺のサーヴァントに

馬鹿にされたうえ、そのサーヴァントがレアなエクストラクラスだと知れば発狂するだろうことは想像に難くなかった。事実、そうなったし。

「俺の方だって、君を激レアサーヴァントなんて、物みたいな言い方しちゃって悪かったな」

『それは別にいいの。あの人すごい顔になってて、とってもおかしかったもの』

「うん。だからお相子(あいこ)ってことでこの話はおしまいにしよう。

さあ、調べるぞー！」

本は結構な数あるが、それでも所詮は〝図書室〟だ。ジャンルで絞り込んで探せば、確認する本の数も自ずと絞られる。

調べ始めてだいたい三〇分程だろうか。それらしいものを見つけた。

――無敵艦隊。

大航海時代におけるスペイン海軍の異名。一〇〇〇トン級以上の大型艦一〇〇余隻を主軸とする、合計六五〇〇〇人からなる英国征服艦隊。

スペインが「太陽の沈まぬ王国」と謳われた所以(ゆえん)たる無敵の艦隊である。

大航海時代とは、大雑把に一五世紀から一七世紀頃、植民地主義に基づく海外進出が盛んだった時代の事だ。拳銃黎明期はここに含まれる。

遠坂は無敵艦隊を「敵側の渾名」だと言っていた。

となると、スペインと戦った側――英国の英雄か。

慎二の口ぶりからすれば、あのサーヴァントの宝具は艦隊だ。そして艦隊を宝具として持って来られる以上、彼女はいち船員などではなく、艦隊を率いた人物。クラスはライダーで確定だろう。

この時代の英国で艦隊を率いる英雄。そんな女性が居ただろうか？

……いや、待て。さっき遠坂は何と言ったのだったか？

――だとしたらジョン・タイターやサン・ジェルマン伯爵なんかは

該当しそうだけど……マトウ君のサーヴァントの例があるとはいえ、いくらなんでもあんな少女じゃあないでしょうしね。
それは、つまり。
あのライダーは、遠坂の推測が正しければ、史実では男性とされている――ということか。
ならば。確実な証拠はまだ無いが、有力な候補が一人居る。「太陽の沈まぬ王国」の無敵艦隊を打ち破った――「太陽を墜とした男」が。
そうとなれば彼についての資料を探そう。彼が彼女であるならば、それは非常に重要な意味を持つ。
――しかし。
「……無いな」
『こっちもよマスター』
彼についての資料は一切見つからなかった。
ただし。それがありそうな棚には本が抜かれた形跡があった。
なんという僥倖か。
「決まり、だな」
『ええ。それにしてもあの人、やっぱりお馬鹿さんなのかしら』
まったくだ。馬鹿だ馬鹿だと思ってはいたが、ここまでとは。
資料を隠しておくならば他の情報も徹底して隠さなければ、逆に正解を教えているようなものだというに。
ともあれ、知りたいことは知れた。アリーナに行こう。まだ次の暗号鍵が生成されてないから、今日はひたすらＭｏｂ狩りだ。
そうして一階に降りた俺たちは、玄関ホールで〝彼〟に出会うことになった。
金髪碧眼、男としては少しだけ小柄で華奢な体格は、非常に整った顔貌（がんぼう）と相俟って少女のようでもある。
赤い制服を身に纏う彼の名は、レオナルド・ビスタリオ・ハーウェイ。西欧財閥次期当主と目され、聖杯戦争の優勝候補筆頭とも言われる少年。
そして、傍らに立つ騎士。重厚でありながら動きを一切妨げないであろう、一縷（いちる）の無駄も無い白銀の鎧を身に着けている。

主と同じ金の髪。涼やかな表情で、その実、青い眼だけは鋭く周囲を見ている。主を害する者があれば速やかに排除するだろう。
王と騎士。そんな形容がこの世の誰より似合うであろう主従が、そこに居た。
「おや、あなたは……やはり、あなたも本戦に来たんですね」
レオの言葉は、俺が予選を越えると最初から知っていたかのようだ。
「やはり、とは？」
「予選に参加した魔術師のうち幾人かは、目が違っていました。その中の一人が、あなたです」
レオは俺の目を真っ直ぐに見つめている。
俺はといえば、不思議とそこから目を逸らせないでいた。
「あなたは、予選のために押し付けられた役割（ロール）に自我を封じられてなお、その目に確かな光を宿していた。自身の願いを至上とし、何としてでも聖杯を獲る――そんな決意の光です。
そういう方は強い。魔術師（ウィザード）としての腕に関係なく、必ず予選を突破する」
「……それはそれは。ずいぶん高く買ってくれてるみたいだ」
「ええ。そしてそういう方は、西欧財閥が管理する世界にとっては邪魔になる。ミス遠坂のようにね」
「考えすぎだよ。俺の目的は西欧財閥には何の関係も無い。わざわざ敵対する意志も無い。
けどそうは言っても――俺が聖杯を獲るということは、レオがどこかで敗退するということでもある。そうなったら西欧財閥は大打撃だろうな」
「ふふ、そうですね」
俺とレオはしばらく笑顔で見つめ合っていた。
それから、本当に今まで完全に忘れていたという風に、レオが傍らの騎士を一瞥（いちべつ）する。
「――っと、失念していました。ガウェイン、挨拶を」
王の命に従い、騎士は一歩前に出る。

「従者のガウェインと申します。以後、お見知りおきを。どうか、あなたが我が主の好敵手であらん事を」
ガウェインと名乗る騎士は、涼やかな笑顔と共に頭を下げた。
清廉なる騎士の姿は、レオという王に相応しい。
――ガウェイン卿。
アーサー王伝説において円卓に名を連ねる騎士。
アーサー王のエクスカリバーの姉妹剣だと言われる聖剣を手にし、その手腕は王をも凌ぐとされる。
彼ほど剣士のクラスを冠するに相応しいサーヴァントもそうは居るまい。それこそアーサー王くらいなものだ。
彼の事を調べるのは苦労しないだろう。彼ほど高名な英雄ならば、図書室の本でもかなり詳細な情報が得られるはずだ。そうとなれば弱点を探すことだって容易い。
それをレオが分かっていないわけがない。
これは、自信の表れ。
霊体化さえさせずに連れているのがその証拠だ。つまり、常に姿を晒すことで「ガウェインという名乗り」が嘘ではないのだと示している。こちらには隠すべきことなど無く、騙す必要もまた無いのだと。
明かすものは全て明かし、その上で勝利する。それが、レオが生まれた時から繰り返した日常であり、義務なのだ。
「それでは、失礼しますね。再会を祈っています。どうか、悔いのない戦いを」
すべき事は終わった。そう言わんばかりに、レオは去っていく。
――ああ、あれは強敵だ。
なにせ生まれながらの王と、最優の騎士。この聖杯戦争において彼らが優勝候補筆頭と言われるのは、それに足る実力と風格を備えているからだ。俺のような凡百の魔術師（ウィザード）とは桁が違う。ガウェインのスペックは、およそサーヴァントとしての彼に許される最高のそれを発揮しているはずだ。
――ああ、けれど。
俺には俺の願いがある。

停滞を維持するために聖杯を欲する王になど。絶対に、負けてやるものか――！

★

――時は飛んで、七日目。

あれから今日まで、特に大きな出来事は無かった。

アリーナに本を隠したと慎二がドヤ顔していたのをスルーして暗号鍵取得に精を出したり。アリーナ探索のついでにＭｏｂを狩ったり。一日余ったので慎二が隠した本を探してみれば、そもそもが持ち出し禁止のプロテクトがかかっていたのを無理矢理持ち出したせいで破損が酷く、船の名前しか読み取れなかったり。

だいたいそんなところだ。あとはマイルームでアビーといちゃいちゃしていたくらいか。

ああ、あと、これまでのＭｏｂ狩りで貯まったリソースでアバターを改造した結果、魔力の効率が上がった。これなら一度くらいは宝具を開帳できるだろう。

さて、猶予期間は終わった。では――戦争の時間だ。

「ようこそ決戦の地へ。まだ身支度を整える程度の猶予は遺されているが――必要かね？」

玄関ホールに、今までは無かった扉が出現している。これが決戦場の入口。

そして扉の前では言峰に出迎えられた。最悪の気分だ。

「必要無い。全て済ませてある」

「それは結構。

では覚悟は？　扉はひとつ、再び生きてここへ戻るのは一組。死合う覚悟はできているかね？」

「もちろん完了している」

「ならば闘技場への扉を開くがいい。異端なる闘士よ、存分に殺し合

いたまえ」
言峰にはアビーの正体がわかっているらしい。
まあ当然か。彼は運営サイドのＮＰＣ、その統括だ。参加サーヴァントの情報は総て把握している必要があるのだろう。だからといって彼から情報を聞き出すことはできないし、ＮＰＣである以上、慎二のように口を滑らせることもないが。
ふたつの暗号鍵を扉にセットする。
ゆっくりと扉が開き――その向こうは暗闇だった。アリーナのように、この校舎とは別の空間に繋がっているのだ。
「行こうか」
『ええ』
ただそれだけ言葉を交わして、俺たちは扉をくぐった。
開いたときと同じように、ゆっくりと扉が閉まっていく。完全に閉じた後、浮遊感――どうやらエレベーターのように降りているらしい。
数秒後、暗闇だったそこが、パッと明るくなった。急だったので少し目が眩む。
目が慣れてしっかり見えるようになったとき、目の前の人物にようやく気付いた。慎二とそのサーヴァントだ。隣を見れば、いつの間にかアビーも実体化している。
この場で攻撃できないようにだろう、俺たちと彼らの間には半透明の壁があった。
「結局逃げずにちゃんと来たんだ。馬鹿だねえキミも。本当に勝てると思っちゃってるわけ？」
彼はいつものようにこちらを見下してくる。
「誰が逃げるか。言ったろ。お前は絶対に殺す、ってな」
「……予選のときから思ってたけど、ほんと空気読めないよね。
もう一度言うけど、キミじゃ僕には勝てないよ。凡俗が天才に勝てるなんて、そんなこと有り得ないだろう？　どうせ負けるんだから、さっさと棄権すればいいのに」
「何言ってんだお前。聖杯戦争のルールに棄権なんて無いぞ」

最後に残った一人を除いて、一切の敗者は死亡する。不戦敗が棄権といえば棄権にあたるかも知れないが、不戦〝敗〟である以上、待つのは死。
俺たち全員、月に来た時点でもう死んでいるようなものだ。戦わなければ生を証明できない。
「だったら決戦場に来なければいいじゃないか。まったく、腕だけじゃなく頭も悪いとはね」
不必要に大きな動作でやれやれと頭を振ってみせる慎二。
「勝敗がわかっているのに戦うなんて、クソゲーここに極まるね。そういう不公平は嫌いなんだけど――まあ関係ないか。
僕が優勝するに決まってるんだから、誰と戦おうが不公平に変わりはないんだ。なにせ僕とエル――ライダーは無敵なんだから」
こいつの自信はどこからくるんだ、いやマジで。
それにしても、こいつは今も自分のサーヴァントの正体が割れていないと思っているらしい。
丁度良い。精神攻撃は基本だ。揺さぶってやるとしよう。
「慎二はこう言ってるが――提督はどう思います？　やはり自分たちは最強だとお思いで？」
慎二の顔が面白い。ぽかんとしている。
一方、ライダーはと言えば、実に楽しそうに俺を見ていた。
「ああ、やっぱりわかっちまったかい？」
「そりゃもう。慎二の情報管理はガバガバでしたからね。せめて〝艦隊〟は隠すべきキーワードだったろうに」
「それに関しちゃ同意見だよ。実際、それが無けりゃ確信はしなかっただろ？」
「ええ。まずあなたの拳銃は一六世紀頃の代物だ。まずはそこで年代がわかります。そして艦隊、これで少なくとも一六世紀頃に艦隊を率いた人物だとわかる。
あとはまあ、図書室前で遠坂が言っていた『無敵艦隊は敵側』という台詞。これを慎二は否定しなかった。よってあなたは一六世紀の英国で艦隊を率いた人物と推察できる。

それで真名にアタリをつけて、その資料を探せば――なんとピンポイントにそれだけが無いときた。それも最初から無いのではなく、本が抜かれた形跡がある。

だから確信しましたよ。あなたの真名は、太陽を墜(テメロッソ・エル・ドラゴ)とした嵐の悪魔――フランシス・ドレイク」

肩を震わせて聞いていた彼女は、その瞬間、豪快に笑いだした。

「な、何笑ってんだよ！　真名がバレたんだぞ!?　こっちはあのサーヴァントのことほとんどわからなかったってのに！」

あ、やっぱりわからなかったのか。良いこと聞いた。

まあ、当然だろうな。彼女は、史実通りなら英霊になどなれない。何ら特別な力を持たず、ただ狂気の引鉄(ひきがね)を引いただけの少女としての記録しか無い。フォーリナーというクラスに当て嵌まる逸話は何ひとつとして残っていないのだから。

「ハハハ！　それそれ、そういうとこだよシンジ！　なんでわざわざわからなかったってバラすんだい、アッハハハハ！」

「ぐっ……笑うなって言ってるだろ！」

「まあいいじゃないか。いくら情報がバレたって、倒して奪い返しちまえばそれでチャラってもんだ！」

ライダー――ドレイクは真名がバレたことを気にしてはいないようだ。

しかし慎二はそうではない。このまま黙るのはプライドが許さないようだ。

「くそっ……でも僕だって、全く情報が手に入らなかったわけじゃない！　あの図書室には、参加する全サーヴァントに関連するデータが集められているわけだからね！」

ほう。それは初耳だが、まあ考えてみればそりゃそうか。無敵艦隊の資料はあるのにセイレム魔女裁判の資料は無い、では情報面で格差が生まれる。

ムーンセルから提供されるモノは常に公平だ。それは情報であっても例外ではない。

「あら、じゃあ私についてどんなことがわかったの？」

決戦を目前にして昂ぶっているのか、少し攻撃的な笑顔で、アビーが問う。
「お前が持ってるその鍵！　それでイカの足みたいなの出してただろ。つまりお前は喚起魔術に関連のある英霊だ。
あの足が悪魔のだとすれば、その鍵は《ソロモンの小さな鍵》と関連付けられた魔術礼装――だと思ったのに、そういう英霊の情報は全然出てこない！　だいたいフォーリナーって何だよ！　ホント何なんだお前！」
待て待て待て待ていろいろ待て。図書室にそんな資料があったってことは、何、ソロモンでも居んのかこの聖杯戦争。
……ああ、いや。よく考えたら、参加サーヴァント以外の英霊に関する情報も無いとおかしいか。でないと真名看破の難易度が下がりすぎる。ダミーはあって然るべきだ。
あとお前の予想全然ハズレだよ、悲しいね、慎二。
「うふふ、相変わらず全然的外れだわ。あなた、劇団で道化師でもやったらどうかしら。とっても似合うと思うわ」
「お前馬鹿にしてんのか?!」
「まあ、それ以外に何があると思うの？　おかしなことを言うのね、やっぱり才能があると思うわ！」
大袈裟に驚いて煽るアビーさん。さすがセイレムの魔女、表情がとても邪悪だ。写真撮って端末の壁紙にしたい。支給された端末にそんな機能無いけどなチクショウ。
慎二を煽るのはなかなか楽しいが、いつまでもそうして話してはいられない。エレベーターは待ってはくれない。
乗っていた時間はどれくらいだっただろう、やがて、エレベーターが停止した。お互いの背後の扉が開き、決戦場への道ができる。
「……ふん。素直に降参すれば、恥もかかずに済んだものを。
いいさ、お前らがその気なら、遠慮なく叩き潰すまでさ。僕のエル・ドラゴは最強なんだから！　素寒貧にされて泣き喚くんだね！」
肩をいからせて、慎二は歩いていく。
こちらも行こう。

「いよいよだ」
「頑張りましょうね、マスター」

決戦場は海底だった。
そこかしこに沈んだ船の残骸が見える。それでいて、俺たちが今立っているここはほぼ円形の広場になっていた。広さも戦うに申し分ない。
「まったく腹の立つ……凡人が調子に乗りやがって……！」
慎二は相変わらず悪態を吐いている。
「ただ勝つだけじゃダメだぞライダー！　生きているのが耐えられないような赤っ恥をかかせてやれ！」
「おや、勝つだけじゃなく、恥までかかせると？
強欲だねぇシンジ。いいよ、ロープの準備をしておこう。マストに吊り下げるなり、好きにするといい」
ライダーは拳銃を二丁召喚し、身構える。
一方、アビーもまた、低燃費状態から変身し宙に浮いた。
「我は門を知れり。汝、見ること能(あた)わず。
マストに吊すだなんて非道(ひど)い人。首吊りは嫌よ――吊らせるのは得意だけれど」
それは自虐ネタかいアビーさんや。お兄さんそういうのよくないと思います。
「間違っても手を抜くなよエル・ドラゴ。この僕に歯向かったんだ、情け容赦なく叩き潰せ」
「はっ、情けなんざ持ち合わせてないっての。アタシにあるのは愉(たの)しみだけさね。出し惜しむのは幸運だけ。命も弾も、ありったけ使うから愉しいのさ！
ましてやこいつは大詰め、正念場って奴だ。さあ破産する覚悟はいいかい？　一切合財、派手に散らそうじゃないか！」
――Ｓｗｏｒｄ，ｏｒ　Ｄｅａｔｈ．(死にたくなければ剣を執れ)
銃声が開戦を告げる。

一切合財との台詞に偽り無し。アリーナで出会(でくわ)したときよりもさらに激しく、ライダーは拳銃を乱射してくる。

アビーは、手にした鍵を豪奢なそれからシンプルな二本に切り替えた。二刀流の要領で弾幕を捌き、あるいは避けている。反撃はしていないあたり様子見といったところか。

しかし彼女は敏捷がそれほど高いわけではない。ライダーを下回っている。今より弾幕を厚くするようであれば捌ききれないだろう。

「ｌｏｓｓ(幸)＿ｌｃｋ(運)（３２(低)）(下)！」

慎二が術式を組み上げ、魔力を通す。それはアビーへと過たず飛んでいき、その身体に潜り込んだ。

「これは……きゃっ!?」

アビーが弾いた弾丸が妙な跳ね方をして、脚を掠めた。白い肌に赤い線が刻まれる。

なるほど幸運低下。時間が経てば戻るだろうが、何らかの対策をしなければ、致命的な不運に見舞われないとも限らない。

まして相手は太陽を墜とし、世界で初めて生きたまま世界一周を成した女傑。幸運値は相当なものだ。

「ｓｈｏｃｋ(衝)（３２(撃)）(弾)」

「おっと！」

こちらもコードキャストを使用し、魔力弾をライダーに撃ち込んだが、回避された。それはまあ、アビーは攻撃してはいないわけだから、こちらを気にする余裕もあっただろうし仕方ない。

しかし回避するために攻撃が止まった。この隙は逃せない。

「ａｄｄ(自)＿ｒｅｇｅｎ(動)（８(回)）(復)」

持続的な回復効果をもたらすコードキャスト。

本当なら幸運を上昇させるか、バッドステータスを打ち消すかするコードキャストを使いたいところだが、持ち合わせていない。今取れる手段としてはこれが限界だ。

「フォーリナー！」

「ええ、いいわ」

あまり撃たせていると危険かも知れない。様子見は終わりだ。
「苦しめ」
手にした鍵を前へ突き出し、捻る。
ライダーの足元から、蛸足のような触手が飛び出した。
それがライダーを打ち据えんとするが、彼女は大きくステップしてそれを躱す。しかし跳んだ先の空間に穴が開き、再び触手が現れ、今度こそライダーを殴り飛ばす。
「っ……ちぃっ！　なんなんだいこのイカみたいなのは！　こんなの使う英霊なんて聞いたことないよ！」
だが相手も然(さ)るもの、ただでは転ばない。体勢を崩しながらもライダーはアビーへと何度か発砲する。
射線上に穴が現れ、弾丸はその中へ消えていった。
しかし敵の幸運の高さとこちらが受けた幸運低下(デバフ)の影響だろう。いくつかの弾丸は絶妙に穴を逸れ、そしてアビーの手脚に当たる。
不幸中の幸いと言うべきか。深刻な傷には至らず、それらは自動回復(バフ)の効果で消えていった。
「あぁ、痛かった。
それじゃあ私も――苦痛をあげる」
アビーが鍵を振る。その軌跡から無数の黒い蝶が現れ、ライダーへと殺到する。
「ええい、本当に、相性が悪いったらないね！」
蝶を一頭ずつ、時には複数巻き込みながら撃ち落としていくが、拳銃二丁では連射力が足りていない。追い付かなかった分がライダーに殺到し、傷つけていく。
ライダー自身が言うとおり、今回は相性が悪かった。
慎二のサーヴァントがセイバーやランサーなど、近接戦闘主体の英霊であれば、アビーは苦戦しただろう。
サーヴァントとして筋力や反応速度が跳ね上がっているとはいえ、彼女は本来戦闘とは無縁の少女。戦場を駆けた英雄に生身の戦闘技量で及ぶことは決して無い。あの触手や蝶を突破されてしまえば厳しい戦いとなる。

ライダーが艦隊戦をメインとする英雄であったこと。そして主に銃で攻撃すること。それはアビーにとって幸運であったと言える。
「何やってんだよライダー！」
慎二の叫びに応えるように、ライダーは頭上に艦砲を召喚し、自身の足元に向けて撃った。
地面が激しく舞い上がる。確かに蝶は殲滅できよう、だがあれでは自分もタダでは済まないはず――
「魔力をまわしなシンジィ！　一気に決めなきゃ不利だよ！」
土煙の中からライダーの声。
いったいどうして、と思ったが、すぐに思い至る。開示されたマトリクスによって得た情報に。
あらゆる難行を〝不可能なまま〟〝実現可能とする〟スキル、《星の開拓者ＥＸ》。そして彼女自身の、評価規格外（ＥＸランク）の幸運ステータス。
彼女は引き当てたのだ。先の砲撃で〝蝶だけがダメージを受ける〟という、本来ならばゼロであろう確率を。
「わかったよ、くそっ！　でもお前わかってんだろうな！　絶対仕留めろよ！」
「当たり前さね、アタシを誰だと思ってんだい！」
土煙の向こうで魔力が高まっていくのを感じる。
「マスター。こっちも」
「ああ、あれを放置はさすがに不味い」
こちらもできる限りアビーに魔力を注ぐ。
――アビーの姿がまた変わった。
蜂蜜色だった髪は白銀に。ただでさえ白かった肌はさらに青白く。服はさらに解けて、もはや身体を隠す布は下着くらいしかない。しかも尋常じゃないローライズ。たまらん。
そして――そして、額の鍵穴から――何かの眼が、こちらを覗く。
なんて美しい姿だろうか。いあ……いあ……！
「我は禁断の秘鑰（ひやく）――導く者也」
先程までよりも、いっそう邪悪に嗤って、アビーは魔力を高めていく。

手にしていた鍵は銀の粒子となって消えた。
「ヤロウども、時間だよ！　嵐の王、亡霊の群れ、嵐の夜の始まりだ！」
土煙を割って、ガレオン船――旗艦《黄金の鹿号》が飛び出した。
それだけではない。黄金の鹿の後ろから、続々と艦が現れる。それは宙を駆け、上空で隊列を組む。
「Ｙｇｎａｉｉｈ…　ｙｇｎａｉｉｈ　ｔｈｆｌｔｈｋｈ，ｎｇｈａ…
我が手に銀の鍵在り。虚無より顕れ、その指先で触れ給う」
アビーの背後に銀の門が開く。ここと違う、領域外と繋がる巨大な門が。
「砲撃用ォ意――」
全艦の砲が一斉に動き、アビーを狙う。
「我が父なる神よ、我、その神髄を宿す現身とならん。薔薇の眠りを越え、いざ窮極の門へと至らん――」
門を越え、悼ましき触手の群れが顕現する。それは本来の彼女が父と呼び崇めたはずの神とは別の、冒涜的なるモノの化身。先に呼び出したものと比較するのも馬鹿らしい程に巨大な触手の波濤。
慎二がそれを見て顔を青くしている。無理もない、アビーのスキル《正気喪失Ｂ》も相俟って、これはそれだけ正気を揺さぶる。
「黄金鹿と嵐の夜――！」
「光殻湛えし虚樹――！」
全砲門、発射。
これを受けるのが移乗攻撃を主体とした艦隊であったなら、その火力と射程に絶望しただろう。遠くから、自軍の艦を沈められる攻撃が飛んでくるのだから。
而して。今、これを見舞われているのは艦ではない。
外なる神の一端をその身に宿し、生ける銀の鍵としての力を存分に揮う、副王の巫女――セイレムの魔女である。
触手の群れが砲弾を叩き落とす／受け止める／絡め取る／壁となり遮る。

いくつかがダメージに耐えきれず千切れたり潰れたりしたところで関係ない。銀の門からは代わりが次々這い出してくる。
やがて全ての砲弾が無力化されると、触手たちは次に艦へと襲いかかった。
伝説に謳われるクラーケンのごとき触手が艦を絡め取り、門の向こうへと消えていく。ああ、あの向こうは領域外、あの艦たちは二度と戻るまい。
そんな触手の猛攻を交い潜ってアビーに迫る一隻があった。フランシス・ドレイク自らが駆る黄金の鹿号だ。やはり幸運ＥＸは伊達ではないか。
「まだァ！　まだアタシにはこいつがある！」
「いいえ、終わりよ船長さん」
ライダーの周囲をほぼ半球状に囲んで、小さな門が数多（あまた）開く。
その総てから、〝ライダー自身の〟銃弾が吐き出され。
彼女の総身を蹂躙した。

ここに勝敗は決した。
艦も触手も既に無く。
アビーは低燃費状態に戻り。
全身を穴だらけにしたライダーは地に臥して。
そして、俺たちと彼らの間には、半透明の赤い障壁が聳（そび）えている。
「……最後のは、何だい」
「あなたが二日目に乱射した弾丸よ」
アビーの力は門を開く力。
それは平行世界や、外宇宙のような領域外、そして――過去や未来にさえ繋がる。その力で、二日目、ＳＥ．ＲＡ．ＰＨが介入して戦闘が止まる直前にあの穴に飛び込んでいた弾丸を呼び出した。
もちろん相応の魔力は使うが。おかげで俺はもう空っけつだ。アリーナで拾った、魔力をブーストするアイテムも使い切った。
「そりゃあ……まったく無茶苦茶だねえ……」

星の開拓者に言われたかない。
まあ、その《星の開拓者》があったからこそ、この手は宝具《光殻湛えし虚樹》を開帳してからしか使えなかったのだが。
この宝具は、ただ単にでかい触手の群れを喚ぶだけのものではない。
邪悪の樹（クリフォト）より生い添う地下茎の力の具現。人類とは相容れない異質な世界に通じる〝門〟を開くそれは、そこに在るだけで対象の身体と精神に深刻な歪（ひず）みを生じさせる。
サーヴァントとしての身体と精神、それを歪めるということは則ち霊基をも歪め、スキルの効果もまた十全たり得ない。そこを狙ってでないと、当たったとしても致命傷は避けられてしまう可能性があった。現に黄金の鹿号は触手を避けまくっていたし。
「な、なんでだよ……？　なんで……僕のサーヴァントが負けるんだよ!?」
アビーの宝具の影響で蒼白になっていた慎二が、我を取り戻したのか、悲痛に叫んだ。
何かコードキャストを使おうとしているが、発動しない。この赤い壁が出現した今、勝敗は既に決している。いまさら何をしても覆りはしない。
慎二は――ここで死ぬ。
「どう考えたって僕の方が優れている！　天才のこの僕が！　それなのに――こんな最初の試合で負けるだって！　赦されるかよそんなこと！」
どうあっても発動しないことを理解したのか、頭を掻きむしり取り乱し始める。
「おいエル・ドラゴ！　立てよ！　立って、こんな壁ぶっ壊してあいつらを倒せ！」
「あー……そりゃ無理だ。この壁はどんなことをしたって壊せない。それにアタシ、心臓……霊核撃ち抜かれてるし？　あと少ししたら消えるっぽいよ？」
ライダーは立ち上がることさえできない。どうにか仰向けには

なったが、それだけだ。
「なんだよそれ！　一人で勝手に消えるってのか!?　お前のせいで負けたってのに！」
「……うん、まあ、アタシのせいかもねぇ。実力、天運、はたまた執念、こっちの油断。負けた原因はいくらでも口にできるけど……ま、なんでもいいさね。
　人生の勝ち負けに、真の意味での偶然なんてありゃしない。敗者は敗れるべくして敗れる。今回は相手が勝つのが必然だった。いくらこっちが強かろうが、優れていようが、何かが劣っていたのさ。これはそれだけのことさね」
「なに他人事みたいに言ってんだよ！　僕は完璧なんだ、誰にも――ましてや、こんな奴になんて劣っていない！」
　慎二は俺を指差し、なおも喚く。
　その間にも、ライダーの身体は末端から消滅していった。
「くそっ！　この僕が負けるなんて！　こんなゲームつまらない、つまらない！
　なあおい夜ノ森！　お前、僕に勝ちを譲れよ！」
「はあ？」
　この期に及んで何を言っているんだこいつは。
「だってほら、考えてもみろよ！　お前は偶然勝ちを拾っただけだろう？　二回戦じゃ絶対に負ける。だけど僕なら勝つことができる！
　ほら、僕たち友達じゃないか！　二回戦で二人とも終わるより、どちらかが勝ち残った方が賢いだろ？　それで賞金は山分けだ、それでどうだい!?」
「……」
　こいつ、まさか。今までの言動は冗談でも何でもなく。
　本当に、聖杯戦争をただのゲームだと思って参加したのか。
「勝ちは譲れない。俺には叶える願いがある」
「ちっ……そうかよ。お前、本気で願いが叶うなんて信じてるんだ？
　馬鹿だねえ！
　こんなゲームで勝ったからって調子に乗るなよな！　リアルなら

僕の方が何倍も優れてるんだ、地上に戻ってお前がどこの誰かハッキリしたら――」
慎二の声が止まった。
ゆっくりと視線を下げて、自身の身体を見る。
「なっ……なんっ、なんだよ、これっ!? 僕の、僕の身体が、消えていく!? 知らないぞこんな退場(アウト)の仕方!?」
彼の身体が黒いノイズに浸食され。そして末端から消えていく。
丁度傍らのライダーのように。
「敗れた、あるいは失格となった者は死ぬ。……シンジ、アンタもマスターとして、それだけは聞いてた筈だよな?」
「は!? 死ぬって、そんなの良くある脅しじゃないのか!? 電脳死なんて、そんなの本当なわけ……」
「そりゃ死ぬだろ、普通。戦争なんだから。ナメんじゃないよ、戦争で負けるってのはそういうコトだ」
取り乱す慎二にライダーは滔々(とうとう)と語る。
「大体、ここに入った時点でお前ら全員死んでるようなもんだ。生きて帰れるのはホントに一人だけなのさ」
穴だらけの、半分以上消滅している身体を、ライダーは全く苦にしていないかのように。
「な……やだよ、今更そんな事言ってんなよ……ゲームだろ? これゲームなんだろ!? なぁ!?
くそ、くそっ! 何とかしてくれよ、サーヴァントはマスターを助けてくれるんだろ!?」
「無理。アタシは消えかけだって、見りゃわかるだろ。SE・RA・PHで現界した以上、ルールには逆らえないしね。
けどまあ、別段文句言うような事じゃないだろ? 善人も悪党も最後にはみんなあの世行きなんだからさ」
「何言ってるんだお前! 悔しくないのかよ!?」
「そりゃ反吐が出るほど悔しいさ。だけど契約した時言っただろ?
覚悟しとけよ、勝とうが負けようが、悪党の最期ってのは笑っちまうほど惨めなもんだ――ってね」

そしてライダーは俺たちにも視線を向けた。もうほとんど身体が動かないので目だけを動かして、出来る範囲で、だが。
「まあでも、前にも言った気がするけど。あんたらの方がよっぽど悪役っぽかったね。自分の願いのためなら何でもする、友を殺すのも躊躇(ためら)わない――まさに物語の悪役だ」
けれど。彼女は俺たちを、悪党とは呼ばなかった。
「さて、そろそろ限界かね。
楽しかったよお嬢ちゃん。アタシは世界を一周したが、クラーケンには終ぞ会わなかった。一度戦ってみたいと思ってたんだ。倒せなかったのはちと残念だけどね」
「……ええ、船長さん。私もとっても楽しかったわ。あんなにたくさんの船と戦うなんて、まるでセイレムで夢見た冒険譚のよう。
さようなら。もしまた会えたら、あなたの航海のお話を聞かせてくださいな」
「そのとき敵じゃなかったらね。いくらでも聞かせてやるよ」
そしてライダーは目を閉じる。
「月の開拓ってのも興味あったんだけどねえ……ま、仕方ないか」
未到の地に思いを馳せて、星の開拓者は完全に消滅した。
「お、おい！　何勝手に消えてんだよ！　助けろよ、助けろって！　そんなのってないだろ!?」
彼女が消えて、万事が休したと悟ったか。慎二の声に必死さが増した。
だが、俺にも――アビーにも、どうすることもできない。この壁の向こうは、アビーの力を以てしても届かない。彼女が、ＳＥ．ＲＡ．ＰＨで現界したサーヴァントである限り。
「あ、あ、消える――消えていく！　なんで、おかしいぞこれ！　なんでリアルの僕まで死ぬって分かるんだ!?　無くなっていく、僕が無くなっていく！
うそだ、うそだ、こんなはずじゃ……！　くそっ、助けろよ、助けてよお！　僕はまだ八歳なんだぞ!?
嫌だ、嫌だ！　まだ何も残してないのに！　こんなところで、まだ

死にたくな――」
　言い切る前に、彼は消えた。
「八歳って、マジか……」
　そりゃアバターが現実と同じ姿とは限らないけれど、そんなに幼かったとは。それならあの迂闊な言動も腑に落ちる。
　その歳であの腕。こんなところに来なければ、将来は大成しただろうに。
　だからといって同情はしない。後悔も無い。そして、彼が死んだ以上、彼への怒りももはや無い。
　だって俺は、心底から彼を殺すつもりでこの決戦に臨んだのだから。それらは全て、彼への侮辱だ。
　ただ、その。お前、アビーのことクソガキ呼ばわりした割に自分は八歳だったんだな――と、妙な脱力感にも似た感情は過ぎったが。
「帰ろうか、フォーリナー」
「はい、マスター。戻ったらうんと甘えたいわ」
　こうして。俺たちは、一回戦を突破した。

　決戦場から出ると、そこには遠坂が立っていた。どうやら彼女は先に一回戦を終えていたらしい。
「あら。あなたが出てきたってことは、マトウ君は負けたのね。
　まあ当然か。あれだけボロボロと情報をこぼしてたんじゃ、誰だって対策くらい取れるもの。アジア屈指のゲームチャンプも形無しっていうか……まあ所詮はゲームチャンプ、命のやり取りは初めてだったろうし。
　で、どうだった？　彼の死に様、みっともなかった？」
「遠坂。あまり死者を馬鹿にするもんじゃないと思うよ」
「あら意外。あなたあれだけ怒ってたのに、いったいどういうご心境かしら？」
「俺は殺意を以て慎二を手に掛けた。だから慎二に関する全てはそこで終わり。死者にまで怒りをぶつけるのは停滞だよ」

「へえ……ドライなのね。だからこそ、ある意味めちゃくちゃ残酷だけれど」
その通りだ。俺の言説はつまるところ、「死後にまでそいつに感情のリソースを割くほど、そいつを重要視していない」ということなのだから。
「そうそう、これは単純な興味なんだけど」
「なんだ？」
「あなたが聖杯に懸ける願いは、何？
マトウ君を、私を、レオを、数多のマスターを殺してまで叶えたい願いは何かしら？」
「――ああ、言ってなかったっけ？」
まあ遠坂と会話したのなんて数回程度だしな。言ってないなら言ってないんだろう。
俺は彼女の横をすり抜け、階段へと歩きながら、言った。
「幾久しく、我がサーヴァント、フォーリナーと共に在ること。
それが俺の願いさ」

マイルームに戻ってきた。
窓から見える電子の空は既に夜だ。ムーンセルによって、その時間帯に帰還させられた。
机を繋げたテーブルに向かい合って座り、俺とアビーは祝勝会と洒落込んでいた。楽しいこと、目出度いことは何度あっても良い。これからも勝ち上がる度にやっていこう。
「そういえばケイ、お酒って飲んだことあるかしら？」
「酒？　ああ、うん、あるよ。つってもまあ、安酒だけど」
「そう……身体に悪いから、きっと美味しいのね。いいなあ……いいなあ……」
そうは言っても、今の時代、西欧財閥の支配地域以外――世界の七割はほぼ無法地帯、あるいは戦場だ。俺もガキの頃は西欧財閥のお膝元、欧州で安全に暮らしていたが、ここ数年は訳あって両親の祖国・

日本で生活している。
二〇世紀末の大災害で国家が破綻した日本は、今では当時からある企業のいくつかが独自に治めてはいて、それぞれの支配地域があの狭い島国に点在している。その地域内ではまあ文化的な生活ができるが、外は例によって無法地帯。ヒャッハァー。
西欧財閥は列島に旨味は無いと判断しているので、口を出してこないかわりに直接的な支援も無い。
で、そんな日本に上等な酒が数多くあるはずもなく。俺みたいなのがありつけるのはアルコールが強く味は最悪という地獄のような酒だけだ。悪酔いしたので一度しか飲んでいないのだが。
まあ、お酒というものに夢を見ているアビーにわざわざ言う必要もあるまい。
「ところで、アビーはパンケーキが好きなのかい？　購買に無くて落ちこんでたけど」
祝勝会で食べるものを調達しに行ったとき、それはそれは凹んでいた。なんで無いんだよパンケーキ。むしろ購買にありそうなもん筆頭だろパンケーキ。
今はかわりにボロネーゼを食べている。ちなみに俺はフライドチキン、飲み物は二人ともコーラだ。この絵に描いたような「ぼくのかんがえたごちそう」感がたまらない。
「うん、よくぞ聞いてくださいました！　パンケーキは大好きよ！　ふわっふわのパンケーキにとろっとろのバター！　カリッカリに焼いたベーコンを載せていただくとたまらないわ！」
尋常ならざる情熱（パッション）……！
どうやら本当にパンケーキが好きらしい。どうにか食べさせてやりたいが、購買に無いからには、作るしかあるまいか。作り方はともかく、材料がなあ……。
「あ、それと熱々のグレイビーソースをかけたマッシュポテト！　これも断然外せないわ、ええ！」
なん……だと……!?
マッシュポテトはまあいいとして、グレイビーソースって何だ……

!? どこの世界の食べ物だ……!?
くそっ、だが俺も男だ。好きな女の子に好物のひとつや二つや三つや四つ、食べさせてあげられないで何とする！ グレイビーソース何するものぞ！ 鍋（スイッチオン・アビートラム）を摂れ、銀の鍵！
「じゃあ、二回戦からはそこら辺の材料も探してみようか」
「まあ、いいのマスター!? もしかして作ってくださるの!?」
「まっ……まっかせろーい！」
……と、図書室にレシピ本とか、ねえかな？ あるいは、知り合いのマスター――まあ遠坂しか居ないけど――のサーヴァントが都合良く執事（バトラー）や料理人（リョーリナー）のクラスだったりしねえだろうか。しねえよな！
知ってた！
「ありがとう、ケイ！」
アビーが立ち上がり、満面の笑みでこちらへトコトコと歩み寄り。
俺の頬に、かわいらしい唇が落とされた。
「……っ！ アビー！」
「きゃあっ！ もー……」
アビーを抱え上げて膝に座らせる。身長差のおかげですっぽりとおさまり、身長のわりに軽い体重が膝に心地良い。
「二回戦、頑張ろうな、フォーリナー」
「ええ、マスター。私があなたの鍵となるわ。次も、その次も、その次も――敵には苦痛（Pain）を、苦痛（Pain）を、苦痛（Pain）を！ ふふふふ……！」
テンションが上がっていらっしゃる。服装こそ変わらないが、瞳は赤くなっているだろう。
「だからケイ、ずっと一緒に居てね。そのためなら私、何だって――」
「ああ、俺だってそうさ。だからもう俺の前から居なくならないでくれよ」
七日目の夜は更けゆく。
待ってろ、まだ見ぬ対戦相手たち。
お前を攫いに、門が開く――。

二回戦【The Old Knight's Right】

――（覆(くつがえ)された宝石）のような目覚め。
――門の向こうより何人(なんびと)か囁く。
――それはキミの生誕の日。

★

――二回戦が始まった。清々しい朝だ。
「……あ。おはよう、ケイ」
瞼(まぶた)を開くと、隣に臥(ふ)すアビーと目が合った。先に起きていたらしい。
「おはよう、アビー。起こしてくれればよかったのに」
「今日はじっくり寝顔を見たい気分だったの。
それに、ケイは昨日頑張ったんだもの。ゆっくり眠って疲れを取らないと」
「頑張ったのはアビーの方だろう？　俺の代わりに傷ついて、俺の代わりに敵を斃(たお)してくれたじゃないか」
「ふふ、褒めてくださってもいいのよ？」
「よーしおいでー」
寝転んだままアビーを腕の中へ収め、頭を撫でる。額にキスを落とし、さらに唇に――。
――と、そこで。端末がけたたましく着信音を叫びだした。
二人してビクリと肩を震わせ、数秒硬直したのち、億劫だが端末を取り出して確認する。
――二階掲示板にて、次の対戦相手を発表する。確認されたし。

この野郎、空気読みやがれよ。今ちょっとイイ雰囲気だったろうが。
言峰の笑顔が目に浮かぶようだ。いや、このメッセージを送っているのがあのクソ神父なのかどうかは知らないが。
「……行くか」
「……そうね」
確認しなければ始まらないのも事実。仕方ない、行くとしよう。
今日からまた猶予期間（モラトリアム）だ。暗号鍵（トリガー）の取得が成らなければ俺たちに未来は無い。
休息は必要だが、怠惰が許される状況ではないのだ。

掲示板前には既に何人かのマスターが居た。
皆対戦相手を見て一喜一憂している。
なお、いかなる仕組みが働いているのか、この掲示板は見る者によって内容が変わる。自分の対戦相手の名前しか表示されない。
さて、それで俺たちはっと。
――マスター：ダン・ブラックモア
――決戦場：二の月想海
聞き覚えがある名だ。予選で用務員の役割（ロール）を与えられていた老人だったような。
「夜ノ森彗、というのは君で合っているかな？」
隣にやって来た老紳士が俺に声をかけてきた。
ああ、そうだそうだ。この顔にはやはり憶えがある。
綺麗に撫でつけられた白髪、豊かな口髭。そして老人とは思えないほど鍛えられていることが見て取れる、背筋のピンと伸びた身体。
間違いなくあの用務員だ。いや、用務員という風貌では決してないが。それでも役割（ロール）的には用務員だ、うん。
「そう言うあなたはダン・ブラックモアですね？」
俺の言葉に反応して、周囲が無音になった。
なんだ？　何か変なこと言ったか？

「いかにも。
しかし――若いな、君は。実戦の経験も、あって数回程度といったところか」
「いやなに、現代社会が生んだもやしっ子でしてね。まだ親元から巣立ったばかりのペーペーですよ」
「ほう？　しかしその割には儂に臆する様子が無い。それにその眼――君には迷いも、人を死に至らしめた葛藤も無いようだ」
「まあね。俺は絶対に願いを叶えるって決めてるんで」
くどいようだが、俺にとってはアビーと一緒に居られることこそが重要なのだ。
俺は自分の腕は理解しているつもりだ。ゆえにこそ、些事に惑わされては聖杯を獲るなぞ夢のまた夢。
ましてや〝敵〟を屠るのに、迷いも葛藤も抱きようがない。この聖杯戦争に於いて、〝敵〟とはそれ則ち聖杯への道を阻む者――アビーとの幸せを阻む者だ。むしろ嬉々として排除してやる。
「なるほど、純粋に願いだけを見据えるか。だがそれでいて、どこか濁っている。
君は、なんというか――歪だな」
「自覚はありますよ。悪いね、俺みたいなのが相手で」
「いや。とても戦り甲斐がある。
良い勝負をできると期待しているよ」
そして、ダン・ブラックモアは去っていった。
同時、彼のプレッシャーから解放されてか、周囲のマスターたちが一斉にざわつきだす。
「あれがダン・ブラックモア……」「あんな大物まで参加してたなんて……」「ただでさえレオやら遠坂やら居てヤバいってのに」「つーかあの対戦相手、例のエクストラクラス連れてる奴じゃね？」「ああ、間桐と戦ったっていう……」「間桐も腕は一流だったんだ。それに勝ったってことはあいつ、もしかしてかなりできるのか？」「どうだか。エクストラクラスのサーヴァントってやつが強力だっただけじゃねぇーの？」「だとしても流石にダン・ブラックモアが相手じゃ無理だ

ろ、気の毒に……」
何だ何だ、仲いいなお前ら。敵同士だろ、いいのかそれで。
……いや、俺も他人のことは言えないが。
特別親しくしているつもりもないが、遠坂とはそれなりに友好的に接していると思う。とはいえ、遠坂との対戦が組まれたとしたら、互いに容赦なく殺しにいくが。
まあ要するに。いざというときに鈍らないのであれば、仲良くするのも悪いことではない。有益なことも多かろうというものだ。
――と、いうわけで。
「教えて遠坂ちゃん☆」
屋上に遠坂が居たので尋ねてみることにした。だって俺、あの爺さんのこと知らないし。
「キモっ」
失敬な。ダークでシリアスなセイントカップウォーをライトなスマイルでライド切るためのウィットに富んだ気ユーズだというのに。
まあ確かに？　二〇歳の男が声を弾ませ、しなを作ってウィンクするとか狂気の沙汰なのは認めるけども？
じゃあ仕方ない。とっておきを出そう。
「フォーリナー」
指パッチンに応えて実体化したアビーは、顔を赤くしてもじもじしている。
「うう……ほ、ほんとにやるの……？」
「もちろん。これも聖杯戦争に勝つためだ」
そう、仕方ないことなんだ。情報を得ることは自身の生存に直結する。決して、決して俺が見たいからやらせるわけじゃないんだ。決して！
だから俺があからさまに遠坂の隣に移動して真っ正面からアビーを見ているのも決して疚しいことなど欠片も無いのだ。決して、決して!!
そしてアビーは緩慢な動作で、袖に隠れた両手を口元へ持っていき、上目遣いで遠坂を見て――おい遠坂ちょっとそこ代われ――小さ

く首を傾げて、ウィンクいっぱつ、
「お、お……〜〜〜〜！
——教えて遠坂ちゃん☆」
——天使だった。
——我が人生に一片の悔い無し。
「ねえ、あなた今最高にキモいっていう自覚ある？」
「うるせえ、何とでも言え。ああカメラが、カメラさえあれば……！
遠坂お前持ってねえの？」
「あるわけないでしょそんな無駄な荷物」
「ハァー……つっかえねえ……」
ダメだこの女……役割を理解していない……。
「喧嘩売ってんの？　教えてあげないわよ」
「ちょっとマスター！　ここまでして拒否されたら私、いたたまれなさでどうにかなってしまうわ！」
「はい」
真面目にやります。
「……はあ。そんな浮ついてちゃ負けるわよ。ダン・ブラックモアはね、名のある軍人なんだから」
「軍人？　今のご時世、正規の戦争屋が個人で有名だなんて珍しいな」
現代の戦争は個人の武勇の価値が極端に低い。
そもそも、何百キロも離れた位置からお互いに飛行機やらミサイルやら飛ばしてぶち込むのが主流の今、兵士とはすなわちそれらの機器の専門家的な側面が強い場合がほとんどだ。
そして所謂〝イメージ通りの軍人〟たる歩兵においてもそれはあまり変わらない。規格化された装備を、規格化されたマニュアル通りに、規格化された部隊の中で扱う。人間も装備もいくらでも数が揃えられ、しかも代替可能であることこそが要諦のはずだ。
そんな時代に、個人が名声を得るとは。それだけで彼が凄まじい兵士であることが窺える。
「彼は狙撃手でね。匍匐前進で一キロ移動して敵指揮官を射貫くとか、ターゲットが現れるまで何日も身を潜めているとか、そういうの

が日常茶飯事っていう人間なのよ。しかも公式には任務を失敗したことが無いって話よ」
「そりゃすごい」
そういうことができるのなら名が売れるのも納得できる。
「ま、一回戦のあいつが赤ん坊に見えるくらい、今回の相手は強敵ってことよ。ご愁傷様、と言っておくわ」
赤ん坊とまでは言わないがマジで子供だったけどな、あいつ。
しかし、ふむ。たしかに今回の相手は先とは勝手が違うだろう。あれほど容易に情報が手に入ったりはするまい。
「あなたのフォーリナーの宝具がどれほど強力かは知らないけれど、今言ったように彼は狙撃兵。決戦前に仕留めるくらいやってのけるでしょう。せいぜい気をつけるのね」
「ご忠告傷(いた)み入るよ。情報ありがとう」
ひらひらと手を振って屋上を辞し、階段を下りながら考える。
相手は狙撃兵。無策でアリーナへ行ってはアッサリとやられる可能性がある。
どこか落ち着いて考えられる場所は無いだろうか。やはりマイルームか？
『マスターマスター。中庭なんてどうかしら』
ああ、そういやあったなそんなん。噴水やら花壇やらあってなかなか落ち着いた場所だった気がする。あそこなら良い考えも浮かぶかも知れない。

★

アビーの提案にノって中庭へとやってきた俺は、なんとも言えないモノに遭遇した。
「……」
死人のような表情(かお)で、ものすごく悲愴な空気を纏い、虚ろな瞳で花

を見つめる少女。制服からしておそらくはマスター。アバターの外見は、毛先が緩くウェーブした焦げ茶色のロングヘアーで、アビーより少しばかり背が高く、年の頃は遠坂と同じくらい――だいたい一〇代後半あたりか。

アビーには及ばないまでも顔立ちは整っている。愛想さえ良ければ予選の遠坂のように学園一だのなんだのと持て囃されそうではあるが、悲しいかな今は表情がそれを台無しどころか卓袱台返ししている。あれでは奇跡的な善戦を演じたとしてもクラスで三番目止まりだろう。

それにしても、何だあいつ。何がどうしたら聖杯戦争中にあんな自殺寸前みたいな状態になるんだか。

『……マスター、ごめんなさい。私ちょっと行ってくる』

「え？」

止める間もあらばこそ、アビーは実体化して彼女のもとへ走って行った。

「……」

どうしよう。アビーを一人で他のマスターのところへ行かせるなんて心配どころの話ではないが、あんな状態の人間と関わりたくもない。正直言って令呪を使ってでも止めたい。

だが……ある意味好都合ではあるかも知れない。

彼女は自分が〝アビゲイル・ウィリアムズの再現〟であるというどうにも的外れなことについて、しかし真剣に悩んでいるようだった。聖杯戦争というタスクを熟しながらでさえ考えてしまうというのなら、追加で今回のことに思考を割けば、少なくともその間は考えずに済むかも知れない。

ていうかまあ、よく考えたら、彼女のしたいことを止めるなんて選択肢を俺がとれるはずがなかった。

しかしやはり一人で行かせるのはまずい。俺もついていくとしよう。

「こんにちは！」
彗を置いて少女のもとへ駆け寄ったアビゲイルは、初対面の相手にはたいていの場合そうしているように、元気よく挨拶した。
「……え」
少女は顔を上げ、アビゲイルを見る。
途端、目を見開き、震えだし、ややあって言葉を絞り出した。
「あ、あ……、……あな、た、も、マスター、なの？」
見るからに尋常の様子ではない。目の前のアビゲイルの存在が信じられないような、あるいは存在を否定したいかのような、激しい感情がその瞳に爛々としている。
「いいえ、マスター。この童女はサーヴァントです」
そんな、ある種幽鬼（ゆうき）の如き様相の少女の傍らに現れたのは、白い少女だった。
「ア……キャス、ター……」
真っ白な髪は腰までストンと落ち、白い和服を身に纏い、緑の帯を締めている。
アビゲイルとそう変わらない体格にも関わらず、その雰囲気は決して童女のそれではない。見た目の年齢も、高くても十代中頃と思えるが、雰囲気は老練ですらある。
「気をしっかり持ってくださいマスター。目の前のそれは、見た目は子供でも中身は違います。先の敵とは何もかも違う」
キャスターであるらしいそのサーヴァントは警戒を隠しもしない。
「何用（なによう）か、異国の童女。次第によってはこの場で事を構えるか」
「……？　恐い顔ねお姉さん。私、別に戦いに来たわけではないわ？
ペナルティなんてごめんですもの」
「では何を。此度（こたび）の対戦相手でもない私たちに接触しても、得することなど無いでしょう」
「何って言われても……だってその人、とてもつらそうなのだもの。放っておけないじゃない」
「……は？」
その応えは予想していなかった。そう言わんばかりの呆け顔を、

キャスターは晒した。
「……あなた、サーヴァント……ですよね？」
「ええ。こう見えてけっこうお婆ちゃんよ、私」
つまり、キャスターが自らの主に忠言したように、見た目通りの童女というわけではない。
だというのに、振る舞いは全く童女のそれ。彼女が困惑するのも無理からぬことではあった。
「……ええと。本当に、特に目的は無い、と？」
「全然。少しお話しようと思っただけよ？」
小首を傾げるアビゲイルを見て、キャスターは考え込む。
嘘を吐いている様子は無い。しかし、マスターを伴わずサーヴァントだけで現れたことが警戒心を繋ぎ止める。
彼女に裏が無いのだとしてもマスターはどうかわからない。少なくともこの目でその人物を見るまでは。
と、そこへ――
「フォーリナー」
彼女のマスターが。夜ノ森彗が現れた。
「あ、マスター」
「一人で行くなよ危ないから。別に止めやしないんだからさ」
「あう、ごめんなさい……」
見るからに普通の青年だ。凡庸を絵に描いたかのような。
しかし、童女へ向ける優しい眼差しからは奇妙な色が見て取れる。盲信、偏愛、劣情、あるいは狂気。男性があの年頃の娘に向けるにはおよそ不似合いな感情がごった煮になったような。
キャスターとしては非常に判断に困る人物だった。
主一人のときならばいざ知らず、自身がついている今、主に危害を加えられるような強者には見えない。ならば、特に警戒する必要は無いのかも知れない。
ただ、主は今、精神的に不安定だ。
あの男の目を見る限り、人格に問題がありそうではある。そんな人間を、果たして今、主と関わらせて良いものか。

それに、だ。どうにも認識がブレる。
あの男は人畜無害なようにも、悪逆非道の輩のようにも、人の理(ことわり)を冒涜する狂人のようにも思えてしまう。そしてそれらの印象は目まぐるしく入れ替わっていくのだ。
智略に長け、数多の敵を手玉に取ってきたキャスター。その彼女をして、どうにも対応を決めかねる男。
そいつはひとしきり童女の頭を撫でた後、キャスターの主に目を向けて、ひどくつまらなそうに言った。
「……で？　あんたはなんでそんな今にも自害しそうなツラしてるわけ？」
「……え、あ」
問われた少女は最初自分に言われているとは思わなかったようで、少し遅れて応えた。
「……一回戦の、対戦相手。小さな、子供、だった。子供だったの。わた、私、あんな小さな子を、こ、ころ、ろ、した……殺、した！　自分が死ぬのが嫌だから！　記憶も願いも無いくせに死ぬのだけは嫌だったから！　生きたかったから!!　あの子たちを殺したの!!!!」
絶叫。
目を見開き、頭を抱え、髪を振り乱して、少女は激情を吐き出す。
問われたとはいえ、見ず知らずの男に易々と打ち明けたのは、懺悔の如く誰かに聞いて欲しかったからか。
――それを。
「あほくさ」
夜ノ森彗は一言で切って捨てた。
「――は」
少女の動きが一瞬止まる。
「……あほ、くさい？」
「だってそうじゃん？　子供だろうと何だろうと、殺(や)れなきゃ死ぬのが聖杯戦争だ。
そしてあんたは生きたい。じゃあもう殺すしかない。うじうじ悩むなんてあほくさいにも程がある」

「そんな、だって、あの子はわかってなかった！　これが聖杯戦争だって、殺し合いだって、知らなかった！　明日したいことだって、来週したいことだってあったのに！　未来があったのに！」
「じゃああんたが死ねばよかったじゃん？」
心の底から面倒くさそうに、彗は言う。
アビゲイルがそれを視線で咎めたが、彼は頭を撫でて誤魔化した。
「わかってなかった！　そりゃたしかにかわいそうではあるがな。そもそも最後の一人になれなきゃみんな死んじまうんだ。
俺も、あんたも、その子供とやらも。ここに居る時点で九割九分二厘死んでんの。だから戦う。だから最後の一人を目指す。
未来があった？　その未来とやらのために死んでやることを、あんたは善しとしなかったんだろ？　だから戦って、勝って、生きた。何の問題がある？」
「でも、私には、あの子を殺すほどの願いが無い！」
「何言ってんだあんた。あるだろ、願い。《生きたい》んだろ？」
「そんなことで――！」
「そんなこと？　違うね、全然違う。それは誇って掲げるべき願いだ。
例え対戦相手の願いが《世界征服》だとしても、《一攫千金》だとしても、《恒久的世界平和》だとしても、《不治の病の治癒》だとしても。他でもないあんただけはそんなもの自分の願いの足下にも及びはしないと胸を張る――そうすべきものだ」
両腕を大袈裟にひろげて、彼は言う。
「生きたいのだと誇れ。死にたくないのだと胸を張れ。殺しに来る者は容赦なく殺せ。
子供を殺したと嘆くなら、殺した意味があったのだと証明しろ」
「そ、んな……。私に、これ以上殺せって言うの……？　キャスターに、殺せって命令しろって!?」
「出来ないなら死ぬだけだ。あんたの願いは叶わない。あんたが殺した子供は無駄死にだったな。
ここじゃあ、死にたくないけど殺したくない、なんてのは通らない」
「……」

俯き、唇を噛んで、拳を握って、少女は黙り込む。
「……行こう、フォーリナー。時間の無駄だ」
「あ、うん――」
「待ちなさい」
立ち去ろうとした彗を呼び止めたのは、キャスター。
「名は、何と」
「夜ノ森彗だ。そちらのマスターさんは？」
「岸波白野」
「オーケイ、じゃあ機会があったらまた会おうぜ、はくのんとキャスター殿」
ひらひらと手を振って彗は校舎へ戻っていく。アビゲイルもまた、霊体化して後を追った。
その背を、白野は呆然と見送る。キャスターは、彼らが完全に見えなくなってようやく息をついた。
「……殺した、意味。
ねえ、……キャスター」
「はい」
「……私たちが、負けたら、あの子たちは」
「……奴の、言う通りかと」
「……そう、なの」
俯き、唇を噛み締める。
胸の中は、未だ晴れない。
『もう、マスター。ああいうのは私どうかと思うわ』
「そうか？　キミの目的は達せたんじゃないかと思うけど」
『五分五分じゃないかしら。あんな荒療治するつもりじゃなかったのに……本当にどうかと思うわ』
「わぁーかったわかった。じゃあアレだ、はくのんが潰れちまってたら何でも言うこと聞くからさ」
『本当に？　それなら、まあ……』
瞬間、彗の背筋を悪寒が走り抜ける。
はやまったか？　と思いつつ、しかし元々アビーの言うことなら余

程のことでない限り何でも聞く気でいるのだから同じ事かと気を取り直した。
もしアビゲイルが霊体化していなければ、一二歳とは思えぬ程に妖しく淫靡な表情(かお)になった彼女を見られただろう。

さて、中庭で対策を考えるという当初の目的は達成されず、無難にマイルームでアビーと頭を突き合わせたのだが。結局のところ、現状俺や彼女に出来る範囲で狙撃や奇襲、罠(トラップ)の類いに対応する手段はあまり無い――という結論に至った。
しかし無いからアリーナには行きませんとはいかない。
そこで半ば博打的ではあるが暗号鍵を探索すべくアリーナへ向かった俺たちはしかし、いつか慎二にそうしたように、曲がり角で息を潜めることとなった。
入り口付近から話し声がする。この声は先程聞いたばかりだ。早速何か情報が得られるかも知れない。
「二回戦の相手を確認した。まだ若いマスターだが、抱く覚悟は相当のものと心得よ。一回戦を勝ち残った相手だ、油断はするな」
そっと覗いてみると、ダンと向かい合う緑色の男が一人。あれは……彼のサーヴァントか。
「へーへー分かってますって。どんな相手だろうとシンプルに殺しますよ」
茶髪に緑の外套。受け答えが随分軽いが、あれであの老人とやっていけるのだろうか。どう考えても気が合わなそうだ。
「まあたしかに？　あちらさんも一人殺しちゃってるワケですし？　精神的に一回戦の連中より幾分マシなのはわかりますがね。それでも若造だってんなら、付け入る隙は多そうなもんですが」
「弛(ゆる)むな。この戦いは連携が肝だ。私の指示に従え。一回戦の様な独断は二度と無きよう」
「あーはいはいわぁーかった分かりましたよ。ったく、口うるさい爺さんだこと」

やはりというか、あの二人はあまり仲がよろしくないらしい。
あれが弱点となるかどうか、というところか。ときどき居る〝仲が悪いからこそ上手く噛み合う〟タイプでなければいいが。
「……あれ、は」
ボソリとこぼしたアビーを振り返ると、彼女は知らぬ間に実体化し、信じられないという表情で緑のサーヴァントを見ていた。
「フォーリナー？　どうかしたかい？」
「え……。あ、ごめんなさいマスター……。その、あの……」
顔色が悪い。あのサーヴァントがどうしたというのだろう。
アビーは狼狽(うろた)えた様子のまま再び霊体化した。そして俺にしか聞こえなくなった声で話し始める。
『……あのとき、話したと思うの。恩人と親友にもう一度巡り会うために、旅をしてるって』
「ああ、覚えてるよ」
俺がアビーの言葉を忘れるわけがない。一言一句全て覚えている。
『その恩人の一人が、あの人。生前の私は、別の世界でサーヴァントとして召喚された彼に会ったことがあるわ』
……マジで？
「……戦えないかい？」
『……わからない。
けれど、私が戦わないとケイが死んでしまうわ。それはダメよ……私はもう死んでいるけれど、ケイは違うもの。
――そうよ、殺す、殺さなきゃ、ケイのために、ころ、殺す、あの人を殺、す、だから、でも、だって……！』
「……」
これは良くない。かなり不安定になっている。
「……今日はアリーナに入るのはやめよう。マイルームに戻って、暖かいミルクを飲んで、ゆっくり眠ろうか」
たしか購買に牛乳があったはずだ。マイルームの設備は普通に教室のそれであるため調理場は無いが、いくら俺が凡百の魔術師(ウィザード)とはいえ牛乳をホットミルクに改竄するくらいなら簡単に出来る。

『ごめんなさい……ごめんなさいマスター……何だってするって言ったのに、いけない子だわ、私、いけない子だわ……！』
「大丈夫だから。ほら、今は帰ろう。何も考えなくて良いから」
それにしてもあの緑の人。存在そのものが精神攻撃になるとはさすがに本人も予想外だろうな。何か対策が必要だ。
俺であれば恩人だろうが友人だろうが、なんなら両親が対戦相手だったって、問答無用で殺しにかかれる。その自信はあるし、覚悟だってできているつもりだ。
だがアビーは違う。それを彼女にまで求めるのは違う。
しかし、だからといって、戦わないというのは絶対に無理だ。
俺だけが志半ばで潰えるならば良い。けれど聖杯戦争では、マスターとサーヴァントは命運を共にする。俺が不戦敗となれば、アビーもまた俺と共に消滅する。
サーヴァントは記録の模倣とはいえ、魂レベルで再現されたそれはもはや一個の生命だ。俺にとっては〝この〟アビーこそがアビゲイル・ウィリアムズ。俺が死んだせいでアビゲイル・ウィリアムズが死ぬなんてことはあってはならない。
最悪、どうにかして俺だけの力でダンを倒す必要が出てくるか。
サーヴァントの護りを交い潜ってマスターだけを狙えればどうにかなるだろうか。難易度がとんでもないが、やらなければアビーが死んでしまう。
厄介なことになったな……。

★

――翌日。
アビーは完全とは言えないまでも、昨日よりは持ち直した。彼女自身の提案で、昨日断念したアリーナ探索を実行すべく倉庫へ向かう。
「無理はするなよ？」

『……大丈夫。行きましょう、マスター。暗号鍵を取らないと』
やはり声が少し震えている。マイルームでもそうだったが、今も顔が青いのだろう。昨夜なんて帰ってから感情が飽和したのか泣きじゃくっていたし、そう簡単には割り切れまい。
それでも、彼女が行くと言うのだからそうする。ここで反対するのは逆効果だろうし、第二暗号鍵（セカンダリトリガー）も取得しなければならないことを考えると実際あまり猶予は無いのだ。
ゆっくりと、しかし着実に。アリーナの入口を目指していく。
――その途中で、レオとダンの会話が聞こえてきた。
「はじめまして、サー・ダン・ブラックモア。高名なる騎士にお目にかかれて光栄です」
レオの傍らには当然のようにガウェインが控えている。相変わらずのイケメンコンビっぷりだ。空気がキラキラして見えるぜ。
「こちらこそ。ハーウェイの次期当主殿にこのような場所でお会いするとは」
「そう驚くことではないでしょう。僕は我々の物を回収するために来た。至極自然なことです。
いまだ戦場を知らぬ若輩者ですが、一族で協議したところ適任者は僕でしたので。あなたを前にしては恥ずかしい話ですが」
恥など欠片も感じていないくせによく言う。そこに白々しさを覚えさせないあたりは流石だと思うが。
「ふむ、聖杯はあなたの物であると？」
「ええ。あれは我々が管理すべき物です。所有権が空席なら尚のこと、誰かの手に余る奇跡、聖杯。
人の手に渡るのは危険すぎる」
それを人が手にしたとき、世は否応なしに乱れる。その意図が無くとも壊されてしまう。ゆえに、それは人ではなく、より上位の存在が管理すべきだ――例えば王のような。
それがレオの、ひいては西欧財閥の考えというわけだ。
「聖杯戦争という手続きは面倒ではありますが。これを経ねば所有権を得られないとあれば仕方ありません。今はまだ、我々よりも月の方

が上位なのですからね」
「――ふむ。西欧財閥（ハーウェイ）は本気ということですな」
ダンは瞑目し、得心がいったという風に頷いた。
「これはいよいよ聖杯も真実味を帯びてきた。正直なところ、儂は半信半疑でしたが……いや年甲斐もなく楽しくなってきた。まさかこの歳になって聖杯探索に関われるとは」
「あなたの国にとって聖杯は特別なのでしたね。
そしてそれこそが、聖杯が真実だという証明でしょう。少なくとも女王陛下にとっては」
「陛下は最初から確信しておったと？」
ダンの疑問に、レオは大きく頷いた。
「サー・ダン。軍属でありながら、女王陛下より騎士勲章を賜ったほどの戦士。
聖杯探索という、誉れ高き騎士の道行きをあなたに任せる程に、陛下は本気だということです」
「何を仰るのだ、若き王よ。儂は見ての通りの老兵です。生還の保証のない戦いと知り、老い先短い儂に声がかかっただけの話でしょう」
「陛下の懐刀であるあなたが？　風聞ですが、陛下は現在の同盟体制に一言あると聞きました」
「さて、女王の意向は分かりかねますな。
騎士だなんだと持て囃されても、所詮は一（いち）軍人。儂は命（めい）に従うのみです」
「――あぁ、なるほど。これは失礼しました。では僕はこれで。御武運を」
言葉による殴り合いは終わったようだ。
まったく、上流階級ってやつはコレだから。もっとわかりやすく喧嘩すればいいものを。
「……おや。お久しぶりです、ヨノモリさん」
レオはこちらへ、ダンは反対方向へとそれぞれわかれたので、当然俺はレオとかち合うことになる。俺の存在を認めた王サマは足を止め、にこやかに挨拶をかましてきた。

「おう」
気安い友人にそうするように、片手を挙げて応えると、彼はいやに満足そうな顔になった。そんな挨拶をされることなどないのだろう。
「一回戦突破、おめでとうございます。聞きましたよ、次の相手はサー・ダン・ブラックモアだとか。
彼は強敵ですよ、と言いたいところですが――どうなんでしょうね。
黒騎士は槍を手放しているようだ。いえ、槍で剣を拵えたのでしょうか？
槍術は超一流であっても、剣術もそうとは限らない。ともすれば、あなたの方が何枚も上手かも知れませんね」
言いたいことだけ言って、レオは去ってしまった。
あちらは教室がある方向だ。マイルームにでも帰るのだろう。彼のことだから、既に暗号鍵は手に入れているに違いない。
「……行こう、フォーリナー」
『……ええ』
ま、レオはレオ、俺は俺だ。アビーの調子も良くないし、自分たちのペースを崩さずやっていこう。

アリーナに入った途端、嫌な空気を感じた。これは……。
「……見られてる、わ」
「そうだな、どこからかはわからないけど」
殺気すら乗った視線が全身に刺さる。凡人の俺にすらわかる程の濃密なそれは、質量を持っているかのようだ。
「……気をつけて、マスター。彼の真名はロビンフッド――罠や奇襲のスペシャリスト、とても優秀な狩人よ。こんなにわかりやすいっていうことは……」
「なるほど、意図的なものってことか」
ていうかあのサーヴァント、ロビンフッドだったのか。なるほど、緑の衣装は確かに森に潜むにうってつけだ。少なくとも外見はロビ

ンフッドという英雄のイメージ通りだな。クラスはアサシンか、あるいはアーチャーか。
そうなると、どこに罠が仕掛けてあるかわかったもんじゃない。例の視線のこともあるし正直あまり進みたくない。しかし暗号鍵を探さないわけにはいかない。
精神をガリガリ削ってくる状況ではあるが、進むしかないだろう。
敵襲を警戒しながら奥を目指す。途中、M(エネミー)obとの戦闘が何度かあったが、特に仕掛けてくることは無かった。
何事も起こらず、しかし敵の影は常に見える状態。これほどストレスを感じる状況もそうそう無い。
だから、と言うと言い訳になってしまうが。
「よし、暗号鍵ゲットだ」
アイテムフォルダから暗号鍵を取り出した瞬間。俺たちは確かに、気を抜いてしまった。開けるときに何も無かったからといって、開けた後に何も無いとは限らないのに。
「……っ！　マスター！」
「え？」
――足下から、矢が飛び出して。俺の腹部に突き立った。
「ぐっ……！　罠(トラップ)、か……！」
油断した。まったく以て油断した。
人間は目的を達成した瞬間が最も気が抜ける。精神的に重圧を感じる状況ならば尚のこと。いくらあの殺気が意図的なものだとわかっていても、こればかりはどうしようもない。
だからこそ俺はこうして矢を受けているし、敵はこのアイテムフォルダの下に罠を仕込んだのだ。
「ケイ！　ケイ!!」
予選のときのように、倒れ込みそうになった俺の身体をアビーが支えた。そのまま揺すられるが、毒でも塗ってあったのか、だんだんと身体が動かせなくなっていく。
吐き気がする。最悪の気分だ。呼吸の仕方を忘れたように息苦しい。世界がぐるぐると廻っている。

何かの音がする。俺としたことが、もはやアビーの声さえまともに聞き取れない。
死ぬ――それを否応なく理解する。毒には詳しくないが、敵の目的を考えれば致死性のものであろうことは疑いない。
ダメだ、それは。俺が死んでは、アビーまで死んでしまう。そんなことは認められない。
校舎へ戻る。俺が生き延びるには、それしかない。
「校しゃ、ぃ、もど……う。……ぁ、そこ、ら……ひとまず、死……は、しな……」
ああ、でも。
アビーの腕の中で死ねるなら、それは望外の幸せだ――。

気付かなかった。
気が抜けたのは認めよう。自分は罠の類いには詳しくないと言い訳もできる。
それでも。せめてこの場を離れるまでは警戒しておくべきだったと、アビゲイルは酷く後悔し、強く動揺し、深く絶望し、
――激しく憎悪した。
「アーチャー!!!!!」
激情に任せて叫ぶ。彼がどこに潜んでいようと聞こえるように。
「ほーう、俺のクラスを見抜いたか。アサシンあたりと間違えてくれりゃ、ありがたかったんだが」
いまだ敵は姿を見せない。
それでも、わかる。奴はどこか、いつでもこちらを攻撃できる位置に潜んでいる。姿を消して矢を番(つが)え、こちらを狙っている。
「今なら魔力も満足に回せねーだろ。これで詰みだ。いやー、楽な仕事で助かるねホント」
言葉の終わりに矢が飛来する。
敵の姿は見えずとも、放たれた矢にまで隠蔽効果は及ばないらしい。虚空より顕(あらわ)れたそれを、アビゲイルは彗を抱えたまま、手にした

大鍵で弾き飛ばす。
戦闘行為を感知したか、アリーナにけたたましいサイレンが響きだした。
さらに追撃の矢が、別の方向から飛んでくる。今度は門を開き、飛び込んだ矢をそのまま返したが、手応えは無かった。撃った瞬間には移動しているのだろう。
「ありゃ。ガキに見えてもサーヴァントってか。いや大したもんだ。でも、そいつ放っといていいんですかい？　そのうち呼吸もできなくなるぜ」
「――！　ケイ！　しっかり、ケイ！」
既に彼女の声は聞こえていないのだろう。常ならばある種過剰なまでに何かしらの反応を示す彼が、今はピクリともしない。目は虚ろで、息がしづらいのか喉がヒューヒューと鳴っている。
そうして声をかけている間にも、アーチャーは矢を放ってくる。毒だけに頼らず、確実に仕留めるつもりだ。
「校しゃ、い、もど……う」
矢を弾いて凌ぐアビゲイルの耳に、腕の中から、か細い声が届いた。
「ケイ？」
「……あ、そこ、ら……ひとまず、死……は、しな……」
――校舎に戻ろう。あそこならひとまず死にはしない。
そうだった。動揺からか思い至っていなかったが、校舎はマスターにとっては絶対的に生存が保障された場所だ。毒を受けた場合や、怪我でリソースが流出し続けている場合であっても、校舎に入れば進行は止まる。そうすれば治療も出来る。
だが。今、その場で矢を防ぐだけでもいっぱいいっぱいなのだ。動けない彗を抱えて、アリーナ最奥のここから入口まで辿り着くのは至難だった。
実のところ、手は無いことはない。だが、それには彗から魔力を吸い上げる必要がある。今の彼からそれをして、無事に済むかは賭けになる。
加えて。この手を実行した結果、彗の身体は無事だったとしても、

精神(こころ)がダメージを受ける可能性が高い。下手をすれば二度と戻ってこられない程に。
「なかなかしぶといなアンタら。もう諦めろよ。楽になれって」
「……」
アーチャーの言葉を無視して、彗の顔を見る。
ただそれだけで、迷いは吹き飛んだ。だって、このままでは彼はどのみち死ぬのだ。それも確実に。
ならば。危険は承知で、やるしかない。
「ごめんなさいマスター。でも、もしダメだったら、私もすぐに行くから。向こうでずっと一緒よ。だから赦して、くださいな」
地面に鍵を刺し、捻る。
アビゲイルたちの周囲に触手が顕れ、二人を囲む壁となる。
「な、んじゃこりゃ。防壁――いや、目隠しか」
だが――と、アーチャーは冷静に分析する。
今更目隠しなどして何になる？　あの壁の中に籠もったところで、結局は毒で死に至る。根本的な解決にはまるでならず、つまりただあの触手が消えるまで見届けていればいい。それで自分は――あの騎士は三回戦へ上がれる。
正々堂々なんてクソ食らえだ。
例えそれが老兵の信頼を裏切るのだとしても。こんなロクデナシを一時(ひととき)でも信頼してくれたあの騎士が勝ち上がれるのなら、それで良い。
一方、触手の壁の中で、アビゲイルはさらに鍵を捻る。足下が揺らぎ、虹色の泡を伴って銀の門へと変化する。
「神様(おとうさま)……どうか……！」
二人の身体が沈んでいく。
アビゲイルの、門を開く力。これを他者に使う場合、避けては通れない欠点があった。
実のところ、サーヴァントとして現界した彼女は、オリジナルと違って門をそれほど自由には開けない。
彼女がその身に宿す〝神(父)〟の力は限定的で、開(ひら)けるのは〝領域外〟

に繋がる門だけだ。その〝領域外〟があらゆる時間・空間に接しているからこそ、彼女は過去や未来、平行世界に至るまで、好きな場所に門を開ける。
翻って。この門を使って移動するには、一度〝領域外〟へ行く必要があるのだ。
この宇宙とは相容れないそこへ踏み入れたとき、生命は自らの常識との差異に苛まれる。それは意識を失っていても関係ない。〝そこに在る〟というただそれだけで、精神も肉体も歪む。
だから、これはまさに最後の手段と言えた。
これに彗が耐えられたなら、彼の心身は領域外の生命に近づく。今後は門を使う移動も問題なく可能だろう。
しかし耐えられなかったなら。彼は正気を失い、《夜ノ森彗》という人格は消し飛ぶに違いなかった。
「……お？」
警報が止まった。アーチャーの視線の先で、触手が門へと戻っていく。
露わになった肉壁の向こうには、何も無かった。
「死んだか？　……いや」
もし死んだのなら、あの触手は門へ戻らず、あの二人と共に消滅するはずだ。そして警報が止まった理由は時間切れではない。時間切れならばやはり触手は消滅するはずなのだ。
ならば。
「ヤロウ、校舎に戻りやがったか。いったいどうやって……いや、ンなこたあどうだっていい。生きのこったんなら、次の手を考えないとな」
ひとまず、校舎に帰還する。あの老騎士は既にアーチャーが居ないことに気付いているだろう。独断専行して失敗した今、どんな叱責を受けるかわかったものではないのが憂鬱だが。
「まったく、余計なことしてくれたもんだ……」
姿を消したまま、アーチャーもまたこの場を去る。長居は無用だ。
あとには何も残らず、アリーナは静寂を取り戻したのだった。

★

彗がアーチャーの矢を受けてから、二晩が経過した。
彼はまだ目を覚まさない。保健室のベッドで眠り続けている。
桜の治療により徐々に回復してはいる。毒の種類も彼女が特定した。
彼が目を覚まさないのは門を潜(くぐ)った影響の方が強い。
アビゲイルはベッドの傍らに座り、彼の顔を眺め、思考に没頭する。
アーチャーの顔が頭から離れない。
生前の――今もどこかの世界を旅しているであろう、オリジナルのアビゲイルにとって、それは恩人であり、頼れるお兄さんであり、愉快な劇団員だった。
まったく、反吐が出る。
ルール違反でないことは理解している。戦略として有効であることも。なんなら自分だって、対戦相手のサーヴァントが強力で勝てないとなれば敵マスターを狙うだろう。
――そんな理屈で抑えられるほど軽いならば、そもそも私は彼の召喚に応じていない。
これはトーナメント形式とはいえ戦争だ。
だから、謝れとも気に病めとも思わない。なんて有効な手を打ってくるのだと賞賛もしよう。
だがそれはそれとして。マスターを直接攻撃し、毒で苦しめたことを、赦すかどうかは別の話で。
「失礼する」
突然の来客が、思考を中断させた。
現れたのは、敵。ダン・ブラックモア。そして、実体化したアーチャー。
「……まだ目を覚まさないのだな」

「……」
アビゲイルは老兵に一瞥(いちべつ)くれて、しかし特に反応を示さずに視線を彗へと戻した。
「イチイの矢の元になった宝具を破却した。これが消滅した時点で毒は消え去るだろう。身勝手な言い分だが、これを謝罪とさせてほしい」
言って、ダンは深く頭を下げた。
――まったく以て巫山戯ている。
なんだそれは。何故謝罪などする。それではまるで、ケイの――！
一分経っても二分経ってもアビゲイルが反応しないでいると、彼は頭を上げ、今度はアーチャーへ顔を向けた。
「……そして失望したぞアーチャー。許可無く仕掛けたばかりか、毒まで用いるとは。
この戦場は公正なルールが敷かれている。それを破ることは、人としての誇りを貶めることだ。
儂は言ったな。貴君にも誇りを持って戦ってもらう、と」
「……ええ覚えてますよ。だがね、オレだって言ったはずだ。誇りで勝てるほど俺ャ強くねえってな。畜生は騎士にゃなれねえんですよ」
強靭な意志を込められた老兵の双眸を、緑の弓兵は真っ向からは受けず、おどけた様子で反論する。
嘆息したダンは手袋を取り、令呪を晒した。
「アーチャー。ダン・ブラックモアが令呪を以て命ずる」
それはマスターに三度のみ与えられた強権の使用。
「決戦場以外での、宝具の使用を永久に禁ずる」
弓を模した三画の紋様。その一画が、強い光を放ち消滅した。
「は、……はあっ!? 旦那、正気かよ!? 負けられない戦いだっつってたじゃねえか！」
「無論だ。儂は自身に、何より祖国に懸けて負けられぬし、当然の様に勝つ。その覚悟で月へ参った」
令呪が消費された以上、命令は受理されている。今後この戦争が終わるまで、アーチャーは決戦場でしか宝具による攻撃ができない。

「だがアーチャーよ。貴君にまでそれを強制するつもりはない。儂の戦いとお前の戦いは別物だ。
何をしても勝て、とは言わぬ。儂にとって負けられぬ戦いでも、貴君にとってはそうではない。だからこそ、畜生に堕ちる必要は――」
「――ねえ。その茶番劇、まだ終わらないのかしら？」
今まで無関心を貫いていたアビゲイルが、ダンの言葉を遮った。
少女姿の英霊から飛び出した辛辣な言葉に驚いて、ダンは彼女へ視線を向ける。
「まったく、人の病室まで来て何をするのかと思ったら、酷くくだらない三文芝居！
ねえアーチャー、あなたどうしてしまったの？　昔はあんなに素晴らしい劇を見せてくださったのに、今ではこんなに零落（おちぶ）れて……なんて、言っても意味は無いのよね。どうせあなたは知らないのだもの――ねえ、ロビンフッドさん？」
二人の表情が如実に強張（こわば）る。
「……何の話かね？」
「とぼけたって意味は無いのよ、おじい様。だって私は知っているのだもの。生前にはそれはそれはお世話になりました」
驚いてアーチャーを振り返るダン。それを受けたアーチャーはしかし、首をぶんぶんと横に振る。
知らない。本当に知らないのだ。緑の弓兵は生前、こんな少女に会ったことなど無い。晩年の彼女に会ったのだとしても、目の前の少女と共通する人物の心当たりも無い。
だが事実として。彼女は彼の真名を言い当てた。
「私ね、初日にあなたの姿を見て、とてもとてもショックだったの。生前の恩人と殺し合わなきゃいけないなんて、なんて残酷なのかしら――って。
でもね、私わかってしまったわ。いいえ、わかっていたつもりだったけれど、きっと覚悟が出来ていなかったのね。
私たちはサーヴァント。あの日の私たちと、今の私たちは同じだけれど別人。あなたとあの人は違う。

だからロビンさん――いいえロビンフッド。死んでくださらない？　そうすれば私、きっとあなたを赦せるわ。

死は明日への希望なりって（La mort est l'espoir）、あなたもあの人も仰（おっしゃ）っていたもの。苦痛（Pain）の中で、死んでくださる？」

それは。ある意味において、あの優しい処刑人を愚弄するが如き言葉。

死によって贖罪は果たされる。死することで罪人の全ては精算され、ゆえに苦痛は必要ない。あの処刑人は、禁忌の園で確かにそれを体現して見せた。

そう、確かに。死は赦しだ。

だが。例え苦痛無き死によって、世界中の人間が赦したとしても。何よりも《私》が、被害者が、遺族が――苦痛無くしては赦さぬと言うのに、何が精算されたというのだ。

〝赦し〟とはすなわち、〝納得〟なのだ。

謝ったのなら。金銭を支払ったのなら。刑務所に入ったのなら。電流に灼かれたのなら。首を吊ったのなら。銃殺されたのなら。

そうであるならば妥当（だ）だという納得。それこそが〝赦し〟であり。

シャルル＝アンリ・サンソンが死にそれを見出したように。セイレムの魔女が〝苦痛を得る〟ことを妥当としたように。アビゲイル・ウィリアムズが死を赦しとして旅立ったように。

セイレムの魔女アビゲイル・ウィリアムズの影法師は目の前の主従に対して、苦痛の末の死をこそ妥当と判じたのだ。

「面白い顔ねおじい様。私たちの目の前でロビンフッドを糾弾して、令呪まで使って宝具を封じて――そうすれば赦されるとでも思ったの？

なんて浅ましい。騎士が聞いて呆れるわ。

帰ってくださる？　そもそもどうあっても私たちは敵同士。赦すと赦すまいとに関わらず。なら、今の茶番劇も無駄だとは思わなくて？」

呆気にとられる老騎士に出口を示し、魔女の影法師は嗤（わら）う。

「次に会うのは決戦場かしら？　それともアリーナ？　もしかしたら

そこの駒鳥さんは、今度は校内で仕掛けるつもりがおありかしら？
ともあれ、出て行ってくださいな。ここは病室なの。陳腐な劇をしたいなら、相応しい芝居小屋があるでしょう？」
そして彼女はストンと無表情になり、再び彗の顔を見つめ始める。この場にダンとアーチャーは居ないとばかりに、彼女は視線どころか身体をピクリとさえ動かさない。
「……失礼する」
もはや自分たちを認識すらしないであろうと悟ったか。入ってきたときと同じ言葉を残して、ダンは保健室を退出した。アーチャーは扉の前で一度振り返り、しかし何をすることもなく霊体化して消えた。

★

――会えて嬉しいわラヴィニア。ラヴィニア・ウェイトリー。私の親友。帚星の年の子供。相変わらず綺麗ね、星の妖精のよう。
――それはそうよ。私とあなたは初対面だもの。けれど私はあなたを知っているわ。ずいぶん大きくなって……子供も居るのね？まあ、なんて可愛らしいのかしら。
――ＸＸじゃった。仕方Ｘいわよね、ラヴィニアは白いＸら。でも安心してラヴィニア、あＸ子達は私がＸ倒を見るわ。
――そんＸ、なＸてこと。なんＸバカなＸＸＸ！　私にＸえば取ってＸＸあげＸのに、自分でＸび込ＸＸなＸて！
――待ＸＸＸい！　Ｘって！　あＸ大学ＸＸ人が来ＸＸ！　ＸＸなこＸをしＸはＸつかＸてＸＸＸわ！　餌Ｘら私Ｘ持ＸＸＸＸＸら！　もＸあなたＸＸ残っＸＸＸＸのよ!!
――ああ。全て終わってしまったわ。

★

――身体を襲っていた苦痛を感じない。
目を開けると、カーテンで切り取られた白い天井が映った。ここは、たぶん保健室だ。聖杯戦争初日にも同じ天井を見た憶えがある。
「――あ、……マスター？」
麗しい声が耳朶を撫でる。顔を横へ向けると、愛らしい容がこちらを覗き込んでいる。
俺がこうして再び目を開けられたということは。どうやら、無事に保健室に辿り着き、治療を受けられたらしい。
「……フォーリナー」
「ええ、おはようマスター。起きられる？　おなかは空いていないかしら？」
「ああ……」
身体を起こす。どれくらい眠っていたか知らないが、地上のように身体が鈍って動かしづらいということはない。
空腹感は……何か食べたいとは思うが、この身は霊子で構成されたアバターだ。生身と違って、飢餓感というレベルの空腹は感じない。
「大丈夫」
「そう、よかった」
ただ――何かが以前とは違う気がする。
違和感、というよりは、そう――達成感、幸福感、あるいは全能感。
より理想的な自分になったという感覚。
この感じの所以に一切の心当たりが無い、と言えば嘘になる。
あの状況で、アリーナから帰還する方法は限られる。
サーヴァントはストレージを持たず、マスターのストレージからアイテムを出すこともできない。だからリターンクリスタルは使えない。

担いで入口まで戻るのも現実的ではない。あの緑のサーヴァントは全力で妨害するだろう。直接攻撃こそしばらくすればＳＥ．ＲＡ．ＰＨが止めるが、トラップの設置に制限は無い。

ならば――〝門〟を使うしかない。

アビーの能力については大凡本人から聞いている。あの門がどこに繋がり、そして徒人がくぐればどうなるのかも。

つまるところ、俺は致命的に歪み、而してそれに耐えきったのだ。

魂は周囲の影響を受けやすく、容易に変質するが、《変化から自分を護る殻》である肉体がそれを防いでいる。魔術師は電子の海に魂だけで潜るが、そこでも肉体の役割は変わらない。

では、《殻》ではどうにもならない程の影響を受けて変質してしまったら？

答えは、「肉体が魂に合わせて変質する」、あるいは「肉体とのリンクが切れる」、だ。

少し事情は異なるが、起源覚醒者などが良い例だろう。仮に〝食べる〟という起源を持つ者が覚醒した場合、人間一人程度なら余裕で平らげられるようになる。その際、胃の容量が有り得ないくらい増えたり、顎や歯も骨を噛み砕く強靱なものに変容したりする。

そうしたことが、魔術師にも起こり得る。

そして、肉体を変化させてもなお対処出来ないほどに、その魂が変質した場合。繋がりが切れ、魂は肉体に戻れなくなる。

魔術師にとって、肉体とは《殻》であり《ホーム》。電脳空間へ魂を送り込む俺たちは、肉体を失っても死にはしない。ただ家に帰れなくなるだけの話だ。ただ、肉体による護りを失う以上、その魂はより変質しやすくなってしまうが。

まあ、要するに。あの門をくぐって生還した以上、魂の方は変質に耐えて〝この世界の生命とは相容れない領域〟に適応している。そして、そんなものはもはや〝こちら側〟の生命の魂とは言えるはずもなく、肉体がそれに耐えられる道理もまた無く。

俺は、人間やめて《領域外の霊子生命》とでも言うべきものに変異してしまった――と、たぶんそんなところだろう。いや、まあ元が

人間である以上、俺自身の認識はいまだに人間ではあるが。
これを喜ばずして何を喜ぶというのだ。
今はまだ、入口に立ったにすぎない。まだ人間の域を逸脱できてはいない。
だが、この道は後戻りができないどころか、一度踏んだ床は崩れ落ちる。先に進むしかない。
いずれは俺の認識さえも人ではなくなる。そのときこのアバターが人型を保っているのか、異形と化すのかはわからないが、些細なことだ。
ああ、ああ。一端に過ぎずとも、俺は今、間違いなく。アビゲイルと同じ世界を見ている。アビーと同じ世界に生きている！
「くく……ふふふ……はハ――はっハはははハハハハハ！」
素晴らしきかな人生！　アーメン、ハレルヤ、ヨーグルトソース！
「マスター？　……大変、やっぱり頭がやられちゃったのかしら」
失敬な。いや、突然笑いだしたらそりゃ気持ち悪いとは思うが。
それにしても、いったいどういうことだろう。あれだけ不安定だったアビーが今はずいぶん落ち着いている。
「ああ、ごめんごめん。
ところでフォーリナー、あの緑のサーヴァントのことだけど」
「ロビンフッドがどうかした？」
そうそう、ロビンフッドだ。あんなことになったせいか頭から真名が吹っ飛んでいた。
「どうやって殺したらいいと思う？」
「そうね……彼は宝具で透明になれるから、宝具を使えない決戦前に殺すか、決戦場で正面から対峙するのならどうにかして居場所を特定しなきゃいけないわ。
それについては少し考えがあるから、私に任せてくださいな」
「わかった、任せる」
「ありがとう。しっかり、念入りに、容赦なく殺すから。安心してねマスター」
……ふむ。やっぱり何かが違う。奴と戦うにあたっての躊躇や戸

惑いが綺麗に吹っ飛んでいる。
　まあ、いいか。吹っ切れたのならそれでよし、そうでなくても戦えるのなら何の問題も無い。むしろ好都合。
「ねえマスター、私決めたわ」
「ん？　何をだい？」
「私は影、偽者よ。けれどあなたは私を本物だと保証してくださるわ。あなたと私の間に限れば、私は正真正銘の本人なの」
「その通りだね」
「だからねマスター。私、敵は殺し尽くすことにしたの。もう誰が相手だって関係無い。
　だってもしあなたが死んでしまったら、私を保証してくれる人は居ないのだもの。私が消えるまでの数瞬であっても、私は偽者として消えてしまうもの。
　そして私が死んでしまったら、マスターは〝本物〟の私のせいで死ぬことになってしまうわ。そんなのダメよ。〝私〟があなたを殺すなんて、そんなことあってはいけないわ。
　だから殺すの。みんなみんな、容赦なく殺すのよ。そうしないと私たちは〝無意味に〟死んでしまうから」
「フォーリナー……」
　そんな……そんなことって……！
　なんてこった！　俺、こんなにも彼女に想われていたなんて！
　いやあ本当に素晴らしいな今日は！　人生最高の日かも知れない！
「フォーリナー。俺さ、キミを召喚した時点で願いが叶っちゃったって言ったじゃん。で、キミとずっと一緒に居るのが願いだって遠坂には答えた」
「そうね、確かに聞きました」
「でさ、俺、良いこと思いついた。願いを叶えた、その後のことだ」
「あら、どんな？」
「せっかくだからこのムーンセルをさ――」
　――俺とキミの楽園に造り替えよう。

★

――第二暗号鍵（セカンダリトリガー）を生成。第二層にて取得されたし。

目覚めた日は念のため静養し、その翌日。暗号鍵取得のため、俺たちはアリーナへと足を向けた。

「そういえばフォーリナー、俺ってどれくらい寝てた？」

「え？　それを今聞くの？

いえまあ、言ってなかった私もどうかしていたとは思うけれど。マスターは二晩寝ていたわ」

「うわマジか。じゃあ今日五日目か」

ずいぶん長い。それだけ毒が強力だったのか、あるいは領域外へ行った精神的負担が大きかったのか。

……まあ、確実に後者だろうな。人間やめるレベルの負担なわけだし。

さて、いよいよアリーナの第二層だ。

アビーの話によると俺が寝ている間にダンが来て、宝具を自ら封じたらしい。正直意味が分からないが、令呪を使ってまで決戦場以外での宝具の使用を禁じたとかで、少なくともアリーナではあの毒を受けることも姿を消して狙撃されることも無い。

いやほんとに、マジで意味が分からないが。ダンに利益がなさ過ぎる。敵に塩を送るどころの話じゃない。

「……あら。マスター、黒騎士様がいらっしゃるわ。どうなさるの？」

「宝具が使えないってんなら好都合。仕掛ける……と言いたいとこだけど、無理に戦うこともない。相手の情報は持ってるし。

とはいえ向こうは仕掛けてくるだろうけどね」

「どうして？　あちらの戦力はガタ落ちよ？」

「そうしなければならないからだよ。

今、向こうに俺たちの情報はほぼ無い。真名はもちろん、その手掛

かりや、あとはこっちの戦い方とかもね。それはダンが積極的に接触してはこなかったからだ。多分もともとこのタイミングで仕掛けるつもりだったんだろう」

暗号鍵を両方取得した段階で仕掛け、万一甚大な損害が出たとしても決戦に備えて一日休息なり準備なりにあてられる。そういう絵を描いていたのだろう。

一戦でも交えれば、真名には至らずとも戦いのクセくらいは見抜ける――そういう自信があるに違いない。

「仕掛けることで受けるかもしれない被害と、情報の無さ。それを考えると今仕掛けるしかない。情報無しで決戦に臨(のぞ)むよりは、しばらくすればSE・RA・PHが強制終了させるアリーナで仕掛けておく方がリスクも低い。

決戦場での宝具開帳は縛ってないあたり真っ向勝負で使う分には認めてるみたいだし、猶予期間(モラトリアム)中の戦闘でも保険くらいには考えてたかも知れないけど……そもそも正面から戦うことにこだわる人だ。宝具を禁じたくらいで仕掛けるのを躊躇ったりはしないだろうな」

「なるほど……あなたって見かけによらずいろいろ考えてるのね」

「失礼な。俺ほど叡智溢(あふ)れる顔つきのイケメン、そうは居ないぜ？惚れてもええんじゃよ？」

「叡智……溢れる……？　イケメン……？」

「傷つくわー。そんなガチ不思議そうな表情(かお)されると傷つくわー」

「うふふ、冗談よ。叡智が溢れるかはともかく、とっても素敵なお顔よ。もう惚れてるもの、すごく魅力的だわ」

「それ、惚れてなかったら魅力の無い顔だってことでは」

なんて会話を繰り広げながらも、足は動かしている。敵性(エネ)プログラム(ミー)を屠りつつ、暗号鍵を探して奥へ奥へ。

そうして、最深部。奥にアイテムフォルダが見える、部屋のようにひらけた場所に。

「旦那、どうします？　目の前に出て来ましたけど」

緑の狩人と、老齢の騎士。アーチャーとダン・ブラックモアが佇(たたず)んでいた。

「よう色男。どっちかってーと出て来たのはお前らだろうに、なに強がってんだ？　今なら見逃してやるぜ、ほら帰んな」
「よく言うぜ、俺の毒で何も出来ずに死にかけたくせによ」
「そりゃ仕方ない。だって俺は人間だったからな」
　まあ、あのあと桜の治療を受けたのを考えると今でも毒は効くだろうけど。そのうち効かなくなったりするんだろうか。
「今日は隠れなくていいのかしらロビンフッド？　それともそちらの騎士様に毒されたの？　憧れのために誇りを棄てて、それで負けてちゃ笑い話にもならないのに」
「ッ……！　それ以上はガキだからって容赦しねえぞ」
　アビーのそれはあからさまな煽りだったが、効果は抜群だったらしい。飄々としていたアーチャーの顔が見る間に紅潮していった。
　それにしてもイイ笑顔だなアビー！
「ふふ、ロビンフッド。おじい様と違ってあなたはわかっているはずだわ。だからこその独断専行でしょう？　おじい様の夢想を――」
「言うなッ!!」
　アーチャーが矢を放つ。それを、低燃費モードを解除したアビーが大鍵で打ち払って、アリーナに警報が鳴り響く。
「あはははははッ！　必死ねロビンフッド！　いいわ、ここで殺してあげる!!　だってあなたは死ななきゃならないもの!!」
　アビーの哄笑。大鍵をふたつに別けて、片方で矢を捌いていく。同時に片方を空間に突き刺し、捻る。
　アーチャーの足元が虹色に泡立つ。彼がそこを飛び退くと、数本の触手が現れてそれを追った。
「っのヤロ……！」
　矢を撃ち込んでみるも、触手はそれを全く意に介していないように突き進んでいく。
「冷静になれアーチャー!!　お前らしくもない!!」
　ダンの一喝。それは今まで声を荒らげることのなかった彼のイメージとはかけ離れた、轟音とさえ言える音量でアリーナの空気を震わせた。

そしてそれは戦場の空気を変え、アーチャーの意識を正常に戻す。
「ッ！　あいあいわかってますけどねぇ！　そもそも正攻法だけで戦えってのが間違ってんだよ！　真正面からなんて慣れてねえんだ、冷静もクソもあるかっつーの！」
アーチャーに到達した触手が蹴り飛ばされる。そうして出来た隙にさらに退がって、ついに触手がこれ以上のびない範囲へ到達する。
アーチャーは矢を撃ってこない。アビーも追撃はしていない。小休止といったところだ。
「そうね、それには同意します。おじい様、彼が誰だか本当にわかっていらっしゃるの？」
「もちろんだとも。彼の技量は狙撃手であった儂が何よりよく知っている。それこそ背筋が寒くなる程にな。
だからこそ信頼している。その弓は正面からでも全てを撃ち貫けるとな」
スッとアビーが目を細める。表情もあのイイ笑顔が急速に引っ込んで、能面のようになる。
これは。怒っている……？
「ロビンフッド。マスターを殺そうとしたあなたを、私は決して許さないわ」
「あ？　何を――」
アーチャーの言葉を遮って、アビーはダンへと言葉を投げる。
「けれどだからこそ、おじい様。あなたがとても愚かで、滑稽で、哀れに見えるの。
そして何より――度し難い！」
――額の鍵穴に収束する極光。
彼女が叫び終わるその瞬間、それは弾けた。人一人軽く呑み込んでしまうような太さの魔力の砲撃――すなわち、ビーム。
それはアーチャーではなく――ダンへ向かって飛んでいく。
「旦那ァ！」
着弾の直前、アーチャーが彼を抱えて転がった。極光の奔流は目標を失い、アリーナの壁にぶつかり無意味に散る。

そこで強制終了が発動した。双方の武装が消滅していく。
「無事か、旦那」
「もちろんだとも」
「そりゃよかった。慣れねえことしてたせいか反応が遅れちまってな、正直ちょっとヒヤッとしたぜ」
「泣き言は禁止だ、アーチャー。儂のサーヴァントである以上、一人の騎士として振る舞ってもらいたい」
「げっ……ホント旦那は暑苦しいんだから。いい加減誰もが自分を誇れるわけじゃねえって理解してくれねえかな。
あはは、つーか意味わかんねえ！　オレから奇襲を取ったら何が残るんだっての！　ハンサム？　この甘いハンサム顔だけっすよ！　効果があるのは町娘だけだっつーの！　向こうのサーヴァント惚れさせろってか!?」
ァ゛ァ゛!?　そんなことになってみろ、俺ァお前を許さねえぞアーチャー。
「ないわー」
アビーから絶対零度の視線と声がアーチャーに飛ぶ。そういうのも素敵だ、ゾクゾクするね！
が、しかし。しかしだ。
「お前ふざけんなよ色男。俺だってそんな視線も声も向けられたことねえんだぞ羨ましいぞお前コラ。ぶっ殺すぞ！」
「急になんだよ！　Mかお前！　だいたい俺ャこんなガキ嫌だっつーの！」
「ンだとテメー！　フォーリナーのどこが不満だってんだ言ってみろゴルァ！」
「めんどくせー！　こいつめんどくせー！」
アビーからあんなご褒美もらっといてめんどくせーとはなんだコノヤロウ。
あと言っとくが俺は変態でもなけりゃMでもないぞ。ただアビーの全てを俺に向けられたいだけだ。変態では！　ないのだ！
「アーチャー。戯れはそこまでにしろ。そして泣き言は禁止だと言っ

たばかりだ」
「へーへー。まったく、手足もがれてるようなもんだぜ。人間には適材適所ってもんがあるんだ、しかも今戦った感じじゃ、あちらさんとは相性が悪い。
　ああだがわかってる、それでも必死こいてやれってんだろ？　手足が無けりゃ歯を使え、目玉で射るのが一流の弓使い、ってか？　いやあロックだねえ！　やるしかねえからやるけどなチクショウ！」
「その意気だ。次の戦いの準備は始まっている。意識を戦場から離すな」
　そして二人は転移して消えた。
　邪魔者は居なくなったことだ。俺たちも暗号鍵を回収して、今日のところは帰るとしよう。
「ごめんなさいマスター。殺し損ねちゃった」
「いいさ。でもフォーリナー、なんか怒ってたみたいだけど。どうかした？」
「それは……」
　言いづらそうに顔を伏せてもじもじしている。かわいい。
　しばらくして意を決したか、彼女はキッと顔を上げて続きを紡ぐ。
「私にとって《ロビンフッド》は特別だわ。今更殺せないとかそういうのではなくて、あのロビンフッドは絶対に惨たらしく殺すけれど、なんというか……《ロビンフッド》という英霊自体には敬意を持っているの。
　だから、マスターを罠にかけたことや殺そうとしたことそれ自体は、憎いし赦せないけれど否定はしないわ。評価してさえいるの。それが彼の持ち味なのだもの」
　けれど――と、彼女は繋ぐ。
「あの老騎士はそうじゃない。自分が何であるかを忘れて、幻想に縋(すが)って、それを《ロビンフッド》に押し付けて。マスターは寝ていたから知らないでしょうけど、《ロビンフッド》を侮辱して。挙げ句、《ロビンフッド》の献身を叱責して。
　そんな彼を、私は赦せないわ。あまつさえ、宝具の封印？　毒の破

却？　何よそれ、バカにするにも限度があると思うの。ロビンフッドだけじゃなく、私たちも貶める行為だわ」
　これまた随分とご立腹らしい。これほど怒りを露わにするのは初めて見る。
「だから私は彼が嫌いよ。騎士たらんとするあまり、周りの全てを蔑ろにする彼が。自覚は無いみたいだけど。
　さ、それはそれとして、はやく暗号鍵を回収しましょう。今日はもう眠りたいの」
　……なんかまためんどくさい方向に拗らせてらっしゃる？
　まあ気にすまい。どうせあの主従とは今回限りだ。俺たちが生きのこるにしろ死ぬにしろ。
　アイテムフォルダを開いて、暗号鍵を手にする。前回のこともあって罠を警戒していたが、特に何事も無く回収することができた。
　そうとなればもはや長居は必要ない。リターンクリスタルで――と思ったが、やめる。
　アビーの〝門〟。あれに慣れるために、彼女に頼んで移動させてもらった。
　今回は特に気を失うとかそういうことはなかった。どころか、特に不調や変化もない。
　喜びのあまりマイルームに着いてすぐにアビーを抱き上げ、くるくると踊ってしまった。怒られたのですぐに降ろしたが。
　アリーナで言っていた通り、彼女はすぐに眠ってしまった。その寝顔を見ながら、考える。
　決戦への切符は手にした。敵の情報は十分すぎるほどある。決戦場では敵の宝具が解禁されてしまうが、アビーには対応策があるという。
　なれば、俺に出来るのはアバターをより良く造り替えて魔力効率を上げることと、決戦でのサポートを万全とすることだ。
　アバターの方はリソースが必要なので、明日もアリーナに潜る必要があるだろう。人間やめたところで魔術師としての腕が上がるわけではない。俺は凡百の魔術師でしかない以上、出来ることは最大限

やっておくべきだ。
そうと決まれば今日はもう寝てしまおう。
アビーの隣に寝転んで、目を閉じる。すると彼女はするりと腕に絡んできた。幸せな感触に腕が包まれる。
眠りに落ちる間際、レオの言葉が蘇った。
――黒騎士は槍を手放しているようだ。いえ、槍で剣を拵(こしら)えたのでしょうか？
彼にはあの時点で、今日アビーが言っていたようなことがわかっていたのだろう。
慢心するわけではない。けれど、俺には確信があった。
きっと、あの老兵は俺には――どころか、慎二にすら届かない。一回戦を勝ち抜けたのが奇跡だったのだ、と。

★

――七日目。
「ようこそ決戦の地へ。身支度は整えたか？
扉はひとつ。再びこの校舎へ戻るのも一組。覚悟を決めたのなら闘技場(コロッセオ)の扉を開こう」
今回もまた、エレベーター前には言峰が立っている。彼は管理ＡＩなのだから、おそらく今後も毎回そうなるのだろう。正直気が滅入るが、諦めるしかなさそうだ。
「ああ、開けてくれ」
「いいだろう、異界の嬰児(みどりご)よ。決戦の扉は今開かれん。
ささやかながら幸運を祈ろう。再び――この校舎に戻れることを」
またしてもこちらの事情は彼に筒抜けのようだ。このあたりももう諦めるしかないのだろう。そうなると俺が排除されない理由がわからないが、そもムーンセルの判断を俺に推し量れるはずもなし。ほっといてくれるんだからそれでいいか。

暗号鍵を扉にセットする。
扉が開き、俺とアビーは暗闇の中へと歩を進める。
扉が閉まると、一回戦同様に暗いまま床が下がり始めた。しばらくして、パッと視界が明るくなる。
半透明の壁を隔てて、ダンとアーチャーがそこに居る。
「……」
慎二と違ってダンは何も語らない。ただ静かにこちらを見据えている。
だが今回はアビーの方が相手に用がある。ならばマスターとして、俺が戦端をひらくべきだろう。
「ダン・ブラックモア。よくもまあ俺たちをバカにしてくれたもんだ。俺は別に構わないが、うちの子はお冠でね。宥(なだ)めるのに苦労しましたよ」
実際は別に宥めたりしていないが。まあ、嘘も方便というやつだ。
「……さて。バカにする、とは何のことやら。儂は君たちとの公正な戦いを望み、真摯に向き合ってきたつもりだが」
「公正――公正ですって？」
怖ろしい程に平坦な声音。それを発したアビーは全く表情の無い顔を、アーチャーには目もくれずダンにだけ向けている。
「それはつまり――私たちなんてアーチャーに全力を出させるまでもないほど格下だということかしら？」
「そうではない。この戦いは軍務ではなく、儂としては初の個人的(プライベート)な戦いだ。だからこそ儂は軍人ではなく騎士として、人道に悖(もと)る戦いはしな――」
「それがバカにしているというのよ、おじい様」
今度は心底からの屈辱と怒りを滲ませて、絞り出すように。
「だいたい、あなたは狙撃手だそうじゃない。誇り誇りと言うけれど、あなたの誇りはどこにあるの？　何に拠(よ)るの？　狙撃手としての誇りは無いの？〝騎士様〟の誇りとやらは、狙撃手の――狩人の誇りよりもそんなに上等なの？」
狙撃手として騎士となったのなら、狙撃手であることを誇るべき

だ。騎士道精神を掲げたいならば、狙撃手として掲げるべきだ。彼の掲げる騎士道には、その拠り所となるべきものが何も無い。
何より。たとえ《ロビンフッド》自身が自らを誇れないのだとしても。仮に騎士として堂々と戦うことに憧憬を抱いていたとしても。それでもその生涯には、技巧には、誇りはあるのだ。
それをあんな風に――と、彼女は憤る。《ロビンフッド》への敬意故に。
「ああ、ああ――私、あなたが大嫌いよ。
何より、彼がマスターを害したことを叱責して宝具を禁じるだなんて。騎士だのなんだの、正々堂々だの、真正面からだのとうるさいくせに、私たちを侮辱しているの？　そういうのはフェアプレーとは言わないわ。見下(くだ)していると言うの。自分の持てる力を最大限に使って戦うのが本当の〝正々堂々〟ではないかしら？」
そも、ロビンフッドの所業を畜生と断じるのなら。それは狙撃手であるダン自身をも畜生と貶めているも同然であり。
ロビンフッドの言う通り、畜生は騎士にはなれない。
「赦せないわ。赦しがたいわ。おじい様のような畜生(ひとでなし)に、彼(か)の狩人が仕えているだなんて。ケイが受けた毒を――ケイの味わった苦しみを否定するだなんて。赦さないわ、赦してはいけないわ。
あなたはあの日、保健室で、私たちにこう言ったのよ。『それ(その)は本来(もの)受(し)けなくてよ(み)かった(は)ものだ(無価値)』って。本当に――反吐が出るわ」
彼女は憎悪する。俺が受けた毒を無価値と断じること――それは、延(ひ)いては俺の戦いを無価値と嘲笑する行いだと。そんな毒(もの)を受けるような者は敵ですらないと蔑視したのだと。
儂の敵はそんなものを受けてはいけない、騎士の敵らしくしろと、お前は傲慢にも言い放ったのだ――と。
「ああ滑稽なドン・キホーテ。騎士の幻想に囚われた哀れな翁(おきな)。他者を貶めなければ誇れない騎士道なんて、本当に騎士道なのかしら？」
「貶めてなど――」
「あなたがどう思っているかは関係ないわ。意識してであれそうでな

かれ、私がそう感じたことに変わりはないもの。謝罪も言い訳も求めていません。そのとき私がそう感じた、それが全て」
だから殺す。お前の都合や思惑など関係ない、私が不快だから潰す。私の都合にお前が合わせろ。
今の俺にはよくわかる。それがどれ程〝向こう側〟らしい発言かが。
「ああ、決戦場ではマスターに攻撃できないのが恨めしいわ。
まあ、彼を殺すのに集中できるからいいけれど。おじい様もそれで死ぬんだし」
「おっと、今度はオレですかい？　だけどなガキんちょ、そうまでマスターをボロクソに言われちゃ流石のオレも黙ってねえぞ？」
「そうでしょうね。あなたはおじい様が大好きだものね」
「なわけあるか！　こんなお堅いマスター、やりづらいったらありゃしねえっつーの！」
「やりづらいのと好き嫌いはイコールではないでしょう？」
ガコン、とエレベーターが揺れた。どうやら決戦場に着いたようだ。
「……発つぞ、アーチャー。戦場に還る時が来たようだ」
「あいあい、せいぜい頑張りますよっと」
「気分が良さそうだね、フォーリナー？」
「ええ、楽しみだわマスター。あの狩人を嬲れるなんて、背徳感でおかしくなってしまいそうよ」

決戦場は一回戦とは微妙に細部が異なっているが、構造自体は酷く似通っていた。海底風の場所で、円形の大きな広場になっている。
「なんやらごちゃごちゃ言われはしたが……旦那、気はしっかりもってくれよ」
「無論。小揺るぎもせぬよ。決めるぞ、アーチャー」
「おうよ！　あの生意気なガキんちょを泣かせて泣かせて、ごめんなさいと言わせてやる！」

それにしてもこの決戦場の仕様、面白いよな。背中合わせでエレベーターを降りたのに決戦場では距離おいて向かい合ってるって。いや、ムーンセルにとって距離どころか時間もたいした問題じゃないのはわかってるんだが。
「ふふ、どうしましょうマスター。私を泣かせるんだって」
お前こないだといい今日といいほんといい加減にしろよコラ。
「そりゃ俺の役目だぶっ殺すぞ緑茶」
「お前ほんと何なの!? つーか緑茶ってなんだ緑茶って！」
「緑色のアーチャーを略して緑茶」
「オーケーわかった、喧嘩売ってんだな？」
緑茶のこめかみがひくついている。へいへい怒ってんのか色男オー？
「マスター、私を泣かせたいの？」
「泣き顔もかわいくて好きだからね。この二回戦の初日のキミはとてもキュートだった。
けどそれがあいつのせいで流した涙だと思うと喜びも半減だ。出来れば手ずから泣かせたい」
「まあ嬉しい。じゃあどうやって泣かせてくれるのか楽しみにしているわ。存分に楽しんでくださいな。
だからマスター、アレを殺すのは私に譲ってくださる？」
「もちろん。キミがそうしたいなら」
そうだった、あの主従を殺したいって彼女は前から言ってたんだった。落ち着くんだ俺、ＫＯＯＬになれ。
「もうホントやだこいつら……」
少し泣きの入ったアーチャーのぼやき。
あまり決戦前の空気ではないが、これはアビーの意向でもある。
決して騎士としての騎士らしい戦いなどさせてやらない、という。
「さあおじい様、ロビンフッド。お待ち兼ねの屠殺（とさつ）の時間よ。
罠にかけて毒を盛り、マスターを苦しめる。《ロビンフッド》を貶め、マスターの戦いを踏み躙（にじ）り、私たちを見下す。そんなことを副王の巫女が、セイレムの魔女が――このアビゲイル・ウィリアムズが赦

すものですか。
誇りある騎士の戦いなどさせはしないわ。あなたたちは人として震えながらですらない、苦痛(Pain)の中で藁(わら)のように死ぬの！　いあ！　いあ！」
「アビゲイル・ウィリアムズ……セイレムの狂気の幕を落とした者、か。
どうにも真名がわからなかったのだが、まさか彼(か)の少女が英霊となっていようとは」
やはり真名の秘匿においてアビーのアドバンテージは絶大なようだ。史実だけならば英霊となるには格が足りないのだからさもありなん。
彼女が宿す力にしたって、手掛かりはアメリカの作家が書いた小説くらいしかない。あれをアビゲイル・ウィリアムズと結びつけるなんてのは無茶が過ぎるし、そもあの老人は小説など読まないだろう。
「おいガキんちょ。俺ャ別に貶められたなんざ思っちゃいねえし、お前に怒ってくれと頼んだ覚えもねえぞ」
「あら、何を聞いていたのロビンフッド。もう一度言うけれど、あなたがどう思うとか関係ないわ。私がどう感じたかが全てよ。
第一、おじい様のことがなくてもあなたは殺すし、あなたが死ねばおじい様も死ぬもの。あなたを殺すのが確定している以上、あなたの生死におじい様は関係ないし、おじい様の生死にあなたは関係ないでしょう？」
「くっそ、会話が通じねえ！　狂ってんのかテメエ、ああ!?」
「狂う？　何を言っているのロビンフッド。そんなもの――」
アビーの姿が変わる。銀髪で、額の鍵穴から〝眼〟がこちらを覗き、露出の多い――宝具を使ったときに見せた、全力の姿。
今回の戦いは彼女にほぼ任せることになっている。俺も詳しい作戦は知らない。だが見る限りにおいては、どうも最初からクライマックスらしい。俺も以前よりは魔力効率が上がっているが、下手を打てばすぐに枯渇してしまう。アイテムの用意をしておこう。
彼女の足元が黒く歪み、そこから太い触手が現れ、うねったそれに

彼女は腰掛けた。
「――狂っているに決まっているわ！
だってあなたを殺すって考えるだけでこんなにも随喜しい！　あなたの殺し方を思索するだけでこんなにも愉悦しい！　あなたの断末魔を想像するだけでこんなにも興奮する！
ああどうしましょう、濡れてしまうわ！　あんなに尊敬し感謝した恩人と同じ人物を手に掛けるなんて、背徳感で絶頂してしまいそう！」
頬を紅潮させ、矮躯を震わせ、汗さえ散らしながら、彼女は両腕を拡げて悦びを露わにする。
「ああロビンさん、サンソンさん。私はいけない子だわ。ロビンフッドを殺すのを夢見てゾクゾクしてしまうの。躰が火照ってしまうの！　官能に身を捩ってしまうの!!
……だけど仕方ないの。仕方ないのよ？
だってあなたは知らないもの。あなたは〝ロビンさん〟じゃないもの。あ　な　たじゃ私をわたしにはできないのだもの。
私はケイの隣でしかわたしになれないの。彼だけが私をわたしにしてくださるの。
だから、ねえ、死んで？　死んでくださいなロビンフッド。あなたが死なないとケイが死んじゃうの。私が死んでしまうの。だから死んで。でないと殺すわ。殺さなきゃ。殺していいのよね。殺すべきよね。
殴って殺すわ。潰して殺すわ。締め上げて殺すわ。引き千切って殺すわ。投げて殺すわ穴だらけにして殺すわ蟲に喰わせて殺すわ。皮膚を剥いで殺すわ杭を打って殺すわ指先から刻んで殺すわ血を抜いて殺すわ肉を挽いて殺すわ骨を砕いて殺すわ捻って殺すわ首を斬って殺すわ脳を啜って殺すわ臓腑を食んで殺すわ――苦痛を、苦痛を苦痛を、苦痛を苦痛を苦痛を！　ねえロビンフッド、死んでくださいなロビンフッド……ロビンフッド!!」
――Ｓｗｏｒｄ，ｏｒ　Ｄｅａｔｈ．
戦いの火蓋を切ったのはアーチャーの方だった。彼は戦闘の解禁

と同時に地を蹴り、距離を――詰めた。
狙撃手であり狩人である彼にしてみれば、中～遠距離が主戦場であることは間違いない。それでも接近したのは、おそらく先日のアリーナでの激突の際にアビーとの相性を理解したからだ。
彼女の能力は飛び道具との相性が頗(すこぶ)る良い。
サーヴァントとして現界した彼女の動体視力は生前と較べてかなり強化されており、元がただの少女であるにも関わらず超人の域に達する。それを以てすれば、矢や弾丸の軌道上に〝門〟を置いたり、触手や大鍵で打ち払ったり等は造作も無い。そして彼女は触手を文字通りどこからでも出現させられるし、なんなら一回戦でやったように敵の撃った矢を死角から返すことだって出来る。
つまり、姿が見えている状態のアーチャーには単純な射撃だけでは有効打が無く、逆にアビーはいくらでも攻撃の手段があることになる。
そして、なにより。
「征(ゆ)けアーチャー。あれが本当にアビゲイル・ウィリアムズならば、格闘は素人のはず」
「あいよ！　まあ俺も達人ってわけじゃねえが、村娘よりゃ心得もあらぁなっと！」
アビー自身が先程明かした真名が、敵の行動を決定づけたと言えるだろう。
だが彼女は聡い女性だ。相手がそう来ることはわかっている。
故に。彼女は開始早々地面に大鍵を突き刺し、捻っている。そして同時に、宝具を開帳している。
「Ｙｇｎａｉｉｈ…　ｙｇｎａｉｉｈ　ｔｈｆｌｔｈｋｈ，　ｎｇｈａ…
息(妖精の子)子よ、門を開け。我等が父を呼び醒ませ。我、その神髄を請け
し御(みこ)子と成らん。
帚星の子よ、星の妖精よ、我が親愛を鍵と成さん――」
アビーの足元――否、地面一面に数多(あまた)の門が開く。そこから触手が這い出てくるのと同時、宝具が解放される。

「――我が親愛なる妖精の御子（ウェイトリー・ザ・ダンウイッチ・ホラー）」
アビーの姿が、消えた。
透明人間にでもなったかのように。否、事実なったのだろう。彼女の姿はスウッと消えてしまった。
一瞬おいて、ロビンフッドの蹴りが空を切る。アビーが座っていた触手には、小さな足跡の形にタール状のものが付着している。どうやらあそこを蹴って離脱したらしい。
「ふふふ、どうかしら？　消えられるのはあなただけじゃないの」
「――そこ！」
アビーの声が聞こえた場所へ、アーチャーが矢を放つ。それは何に当たることも無く決戦場の彼方へ消えていく。
「ざぁんねん。ふふ、ふふふ……！」
今度の声はかつてのアーチャーのそれと同じく、出所がわからなかった。
触手がアーチャーに殺到する。
彼にそれを防ぐ術（すべ）は、おそらく無い。あるいはまだ見ぬ宝具で触手を薙ぎ払うことが可能かも知れないが、彼は幾度も「正面から戦うのは苦手だ」と言っていた。それだけの火力を直接的に出せる宝具は無いと見て良いだろう。
故に必然、彼は回避する。
身軽な動きで触手を躱し、交（か）い潜（くぐ）りながら、彼は、
「チッ……旦那！　使うぞ、いいな！」
ダンの返事を待たず、アーチャーは緑の外套で身体を覆った。
「……」
ダンは沈黙を保ったまま。特に制止はせず、それを肯定と取ったかアーチャーも動きを止めることはない。
「無貌（むぼう）の王、参る……！」
――そして、アーチャーの姿も消え去った。
決戦場に残るは二人のマスターと、アビーが開いた門、そしてそこから這い出す触手。主役たるサーヴァントの姿はどこにも無い。
アーチャーのあの宝具は俺が罠にかかったときのアレだろう。あ

のとき、俺たちには彼の視線と声がどこからのものか全くわからなかった。今回もまた、少なくとも俺にはわからない。
アビーは考えがあると言っていたが――
「ユーゴ、お願いね」
触手が這い出ている門、そのうちのひとつから、小さな影が飛び出した。あれは……なんか顔が黒い渦巻きになってるが、たぶん熊のぬいぐるみか。
浮遊するぬいぐるみ。それは生きているかのように動き、両腕を拡げ――無数の蝶を召喚した。
ぬいぐるみが腕を振るう。それに従うように黒い蝶が動く。やがてそれらは決戦場をほぼ埋め尽くし、
「――みぃーつけたぁ」
背筋がゾクゾクするような、声。
視線を巡らせれば、ある場所に蝶の塊ができている。丁度人間一人分のそれは、おそらく。
「じゃあ、まずは蟲に喰わせて殺すわね」
「ッ！　がッ……ァ゛あ゛あ゛あァ゛ああ゛!!」
アーチャーに群がっている蝶が一斉に動きだす。
アビーの宣告通りアーチャーを喰っているのだろう。蝶の口は「喰う」というには違和感のある形をしているはずだが、まあ、あれが真っ当な蝶とはとても思えない。囓(かじ)るなりなんなりしているのだろう。
アーチャーは身悶え、激しく腕やマントを振り乱しているが、その程度では焼け石に水のようだ。
「――ａｄｄ_ｒｅｇｅｎ（８）」
（自動回復）
ダンがコードキャストを発動した。蝶の群の隙間から緑色の光が漏れる。
あの術式は知っている。俺も良く使う自動回復。
だが、全身を食われるアーチャーにそれを使うのは苦痛を長引かせるだけではないだろうか。
「火力を上げるぞ、ｇａｉｎ_ｓｔｒ（１６）」
（筋力強化）
続けて筋力強化。何をする気かと思ったが、答えはすぐに出た。

「つなクソォォォォォォァ!!」
バサァッ！　と豪快な音をあげて、アーチャーのマントが翻(ひるがえ)される。俺にまで届く程の風が起こり、蝶が吹き飛ばされる。
「ハァッ、ハァッ、ハァッ」
黒い塊の中から現れたアーチャーはボロボロだった。全身傷だらけ、服は破け、血で真っ赤に染まっている。肩で息をする彼は蝶の再来を警戒してかあちこちに視線を飛ばしているが、対して蝶はといえばそこら中を自由に飛び回るだけで襲いかかる様子はない。
「まあロビンフッドったら、素直に死んでくださらないなんて……そんなに私を愉しませたいの？
ならそうね、次は――」
いまだ決戦場のあちこちに開く門、うねる触手。そのうちのロビンフッドに近いものが彼を襲う。
戦闘開始直後には軽快に避けていたそれ。しかし今は違う。
サーヴァントの身体構造は人間と同じだ。内臓もあれば筋肉も骨もある。当然、怪我をすれば人間と同じ影響が出る。筋肉が切れれば動かないし、心臓や脳が潰れれば死ぬ。
満身創痍のアーチャーが無傷のときと同じ動きを出来る道理が無いのだ。自動回復のコードキャストがかけられているとはいえ、全身を嚙られている彼がすぐに全快するわけもない。
当然の帰結として、彼はすぐに触手に捕らえられた。
「――投げて殺します」
そしてすぐに、投げ飛ばされた。
凄まじいスピードで飛んだアーチャーは、地面に激突すると土や石を巻き上げながらなおも進んでいく。その激しさたるや、地面が抉れて溝が出来るほどである。
そのまま数十メートルも溝を掘って、広場の終端の岩に激突しようやく停止した。
さすがに死んだか？　と思ったが、よく見れば自動回復が機能している。まだ生きているようだ。しまった、フラグだったか。以前より使える魔力が増えたとはいえ、そろそろ厳しいので終わって欲しいの

だが。
　いやほんと、マジきっつい。ただでさえ魔力消費が激しい全力モードなのに加えて初手宝具開帳、門の大量展開に蝶の群れだ。ゴリゴリ持ってかれる。コードキャストとか使ってられない。魔力もアイテムもめっちゃ減る。
「ああ、ああ、なんてことかしら！　零落れたなんて言ったのは訂正するわ、あなたは役者さんの鑑よ！　だって私をこんなにも愉しませてくださるのですもの！
　――だから次は締め上げて殺して差し上げるわ」
　アーチャーに触手が絡まっていく。首から下を瞬く間に覆い尽くしたそれは、次には一気に収縮した。
「ぐっ、あ、ぁ〝……！」
　万力の如き、と言うのも生温い膂力で締めつけられたアーチャーが苦悶を漏らす。先の筋力強化は切れているのか、はたまた強化してなお抜け出せないのか、拘束が解ける気配はない。
　が――アーチャーの口が、苦痛とは違う形に動いた。
「森の……恵、み、よ……圧政者へ、の、ど、くとな、れ……」
　彼を締めつける触手が膨れあがり、
「……祈りの……弓！」
　そして爆発四散した。
「ガッハ！　ゲホッ、ゥ〝ェ〝ッホァ〝!!」
　解放されたアーチャーは地に崩れ落ち、空気を求めて咳き込む。さすがに自動回復の効果は切れたらしく、すぐには立ち上がれないようだ。今の締め上げで骨のいくつかはイッているのかも知れない。
　しかし今のは……彼の宝具なのだろうが、あの火力はどういうことだろうか。てっきり毒と透明化が彼の宝具なんだと思っていたが。あんな火力が出せるなら正面から戦うのを嫌がる理由が無い気がする。
　何か条件があるのか？　例えば、そうだな……彼は毒を扱うサーヴァントだから……対象が毒を受けた状態でなければならない、とか？

そうだとすると、あの触手がいつ毒を受けたのかが気になるところだが。絡み付くときに何かされたと考えるのが妥当か。あれだけボロボロの状態でそんな余裕があったとは驚きだ。

「いいわ、いいわロビンフッド、最っ高よ！

次はどうしようかしら……そうねぇ……」

ともあれ、触手の替えはそれこそ無限にある。……俺の魔力がもてば。

そして、アーチャーが立ち上がれないからといってアビーは容赦しない。

彼女は姿を顕さない。例え弱っているとしても、この狩人にはどんな反撃をしてくるかわからない怖さがあるからだ。それは今の触手の爆散が証明している。

「……うん、そろそろ終わりにしましょう。全部することにするわ」

しばらく考え込んでいた彼女が、慈愛すら感じさせる声音でそう言って。

真横から触手が殴りつけた。

飛んだ先にあった触手がのしかかって、俯せに倒れ臥す彼の脚を潰した。

別の触手が巻き付いて、潰れた脚を力任せに引き千切った。

どこからか普通の大きさの鍵が大量に現れ、次々と胴に突き立って穴を開けた。

腕に触手が巻き付いて彼を持ち上げ、重力に従ってあらゆる傷から血が抜けていった。

周囲の触手が群がって、バキボキと骨が折れる鈍い音が奏でられた。

熊のぬいぐるみが寄ってきて、どこからか取り出した杭を心臓に打ちつけた。

――そこで、触手もぬいぐるみも蝶も消え去って。俺とダンの間に赤い壁が聳え立った。

「……」

ダン・ブラックモアは口を開かない。あるいは開けないのか。いつ

の間にか俺の隣に姿を現していたアビーを呆然と見つめている。
「あら、終わっちゃった。まだやってない殺し方があったのに。心臓を刺したくらいで死んでしまうなんて、意外と根性が無いのねロビンフッドったら」
アビーは心(しん)から残念だという風に口を尖らせる。そしてそれ以降は何も言わない。
やがてアーチャーが消え去って、自分の身体も半分以上が分解されてから、ようやくダンは口を開いた。
「……こんなものは、戦いではない。騎士の、戦いでは……ない」
それは。静かではあったが、慟哭だったのだと思う。
そして俺もそう思う。アーチャーのあれは、およそ人間の死に方ではない。
だがそんなものは今更だ。俺たちは――アビーは、最初に言ったはずだ。
「誇りある騎士の戦いなどさせはしないわ。あなたたちは人として震えながらですらない、苦痛(Pain)の中で藁のように死ぬの」
同じ言葉を彼女は繰り返した。聞き分けのない子供に言い聞かせるように。
「そう、言ったはずよ。おじい様」
「儂、は……」
何かを言いかけて、やめる。
かわりに、
「……儂が間違っていたとは思わん。そして儂は君たちを軽蔑する。畜生にも劣る怪物だとな」
「お互い様だジジイ」
「そうね。私たちもあなたを心底軽蔑しているのですもの」
決して分かり合えない。だって彼は人間で、俺たちは異端の化け物だ。異なる感性(ロジック)に基づく生き物だ。
そも、正しいだの間違いだのいう話ではない。彼は彼の考える騎士として戦いたかった。彼女はそれが不快だった。それだけだ。
例えそれがダンを弱くしたのだとしても、彼はそういう信念を持っ

て戦いたかったのだから。
例え誰から見て理不尽だとしても、彼女にとっては筋の通った怒りだったのだから。
「……せめて一度くらい、君に誇れる戦いを……したかったのだがな……アン……ヌ――」
俺たちには何処の誰とも知れぬ女性の名を呟いて。
後悔に塗(まみ)れた表情で、彼は消えていった。
「ああ――スッキリした」
アビーの顔は夏空のように晴れやかだった。

★

決戦場から戻ると、目の前にはくのんが居た。
「おろ？　なんだ、あんたまた殺したのか。てっきり殺されたもんとばかり思ってた」
「……死ぬわけには、いかないもの」
しっかりと俺の目を見てくる彼女の顔は決意に溢れていた。
……いや、俺にそんなもん向けられても困る。そういうのは隣のアビーに……いや、霊体化してるから無理か。
「あの子たちを殺した責任がある。生きたいという願いがある。一回戦を突破した私には、負けることは許されない」
はあ。で？
「今だって殺したくない。二回戦で勝ったことを後悔もしてる。だけどそれを拒んじゃいけない。私は、最後の一人になる」
ああ、そっすか。
「それだけ。……じゃあね。もし当たったら、私が勝つ」
決然たる態度で踵を返し、彼女は去っていった。
なんだかなあ。どういう心境の変化だか知らないが、随分と前向きになったもんだ。ああいうのが物語の主人公になるのかね。

『よかった。白野さん、立ち直ったのね。マスターが滅茶苦茶なこと言うからどうなるかと思ったわ』
「よかったか？　めんどくさい敵が増えただけのような気がするんだけど」
『よかったの！』
「まあ、キミがそう言うんならそれでいいけど。仮に俺たちもあいつも勝ち上がるなら、どっかで俺たちと当たるぜ？」
『そのときは殺せばいいだけだわ。でも、それまでに明るく元気になっちゃいけないなんてことはないし、仲良くしちゃいけないなんてこともないと思うの』
　ああ、まあ、それもそうか。
　アビーがそれでいいなら俺に否やはない。
　だってそもそも俺、あいつにあんまり興味無いしな。この子が二回戦初日みたいにならないなら、あいつがどんな性格になろうが、俺たちとあいつの関係がどうなろうが、何でも良いか。

　マイルームに戻ってきた。今回も祝勝会と称して二人でささやかな御馳走を楽しみ、今は食後のまったりタイムだ。
「そういえばマスター、私を泣かせるという話はどうなったの？」
　とても蠱惑的な表情で、我が膝の上に御座(おわ)すアビーがこちらを見上げてくる。ので、俺は彼女を膝から下ろし、真正直から真っ直ぐ眼を見て、
「実は、……とても残酷なことを報告しなきゃいけないんだ」
「なあに？」
　これを言うのはかなり心苦しい。だが事実は事実であり、どうせしばらくすれば彼女も気付くのだ。ならば俺が告げ、そしてアビーを泣かせ、彼女の泣き顔を堪能しようではないか。彼女も泣かせるのを楽しみにしてるって言ってたしな！
「……緑茶の毒で動けない時間があってわりと忙しかったからさ――パンケーキとマッシュポテトの材料、探せてない」

しばらく彼女は、何を言われたかわからない、という顔をしていた。
たっぷり五分。それだけの間そのまま固まって、それからじわりと涙を浮かべて、
「そ、そう。仕方ない、わよね。だってケイは苦しかったんだもの。意識、なかったん、だもの。仕方ない、仕方、……ないの」
懸命に涙を堪え、しかし抑えきれずに溢してしまいながらも、決して俺を責めはしない。けれど悲しみという感情はどうしようもなく、一度溢れてしまえばもう止まらない。
「ロビンフッドの、バカァァァァァァァァ!!!!!」
結局、泣いた。泣きに泣いた。声をあげて泣いた。そして泣き疲れて、眠った。
彼女が眠るまでの間、俺は彼女の泣き顔を正面からガン見していた。記録できる機材が無いので、〝俺が泣かせたアビーの顔〟を決して一生忘れないよう瞬きすら最小限にしてジッと見続けた。
マジでカメラが欲しいが、無い袖は振れない。今度言峰にでも要望を出してみようか。

幕間／襲撃【・hacker／／R・R・】

――安定のための搾取。
――平穏のための決断。
――その行為は至尊ではあるが、
――栄達することも、またできない。
――深淵でこそ、得るものもあるだろう。

★

突然だが、タイムパラドックスというものを知っているだろうか。

例えば俺が、両親が一二歳の頃へと時間旅行をしたとする。そこで仲の良い幼馴染みである二人をハイエースし、お袋をちょっと全年齢では言えないようなことをしてから飢えた野犬の群れに放り込んだり、親父の手脚を縛って身体に錘（おもり）を括り付けて東京湾に沈めたりしたとしたら。

当然、二人は一二歳で生涯を終える。一三歳のときに西欧財閥の支配域に渡ることはなく、スクールで夫婦だなんだと友人たちにからかわれることもなく、ハイスクール卒業間近に親父が我慢できなくなってお袋を押し倒すも逆に搾り取られるなんてこともなく、大学進学と同時に爛れた同棲生活を始めることもなく、猿のようにヤりまくって俺を身籠もり在学中にデキ婚することもない。

すると当然、俺は生まれない。しかしそうなると過去に渡って両親を殺す者が居なくなり、すると俺は生まれてしまう。となると俺は両親を殺しに行き、結果俺は生まれず――とまあ、そういう矛盾が発生するわけだ。これがいわゆるタイムパラドックスである。

時間旅行なんてものは、西欧財閥があらゆる技術開発を禁じていることもあり、二〇三〇年現在においても実現していない。旧時代の

魔術師(メイガス)が用いた魔術でも同様だ。第五魔法が時間旅行を可能とするものだったという話もあるが、大源が枯渇した現代において魔法使いは姿を消している。

であるから、タイムパラドックスなんてものは思考実験の域を出ない。少なくとも、尋常の手段においては。

俺が急にこんなことを言いだしたのは、別に唐突に思考実験の楽しさに目覚めたとかではない。過去変えてぇーなぁーとか思っているわけでもない。理由はアビーにある。

この聖杯戦争にて呼び出しましたるサーヴァント、《降臨者(フォーリナー)》アビゲイル・ウィリアムズ。彼女の、〝門〟を開く力。

先程俺は、「尋常の手段においては」タイムパラドックスは思考実験に過ぎないと言った。

では、尋常でなければ？

アビーの宿す力は、あらゆる並行世界を含む〝この世界〟の、外側のものだ。この世界の術式で以てサーヴァントとして現界している以上エネルギーとしてこの世界の魔力を消費しはするが、理(ことわり)は徹底的に相容れない。

そんなものが〝尋常〟か？

答えは否だ。異常ですらない。〝異質〟あるいは〝異端〟と言うのが相応(ふさわ)しい。

あらゆる時間・空間と接している場所に繋がる門を開く。それはつまり、好きな場所へ移動できるだけでなく、並行世界への移動や、さらには過去や未来への移動――時間旅行が出来るということに他ならない。

アビーの力を知り、人間やめた今、俺は思ったね。その力で地上とか、聖杯戦争やってない並行世界のＳＥ．ＲＡ．ＰＨとかに行けば、聖杯戦争を勝ち上がらずとも俺の目的は達せられるんじゃねえのってな。

まあ結論を言えば無理らしいのだが。

アビーの力だけで言えば可能だ。が、彼女は聖杯戦争のためにムーンセルが現界させたサーヴァント。当然のように制限が設けられて

いる。具体的には、ＳＥ．ＲＡ．ＰＨから出ることは原則出来ない。
彼女の力で移動するには一度〝領域外〟へ行かなければならないが、それだって領域外に居て良い時間が決まっていたり、領域外に居る間は必ずひとつはＳＥ．ＲＡ．ＰＨに繋がる門が開きっ放しでなければならなかったりと、細かいことがいくつかあるとかなんとか。
こうした制限を取り払いたければ聖杯を勝ち取るしかない。
ただ、〝時間〟を移動する制限は緩いらしく。一回戦を開始した時点へ門を繋げることとかもできるらしい。
そこで問題となってくるのがタイムパラドックスだ。
タイムパラドックスは回避されると仮定した場合、その要因は大きくふたつ考えられる。
ひとつは、並行世界が新たに生まれるというもの。先に挙げた例で言うと、俺が元居た世界とは別に俺が両親を殺した世界が誕生するということだ。未来を変えるのが目的だとしたら、事を成した後は元居た世界へ帰るのではなく誕生した並行世界へ行く必要がある。
もうひとつは、過去への介入は歴史に織り込み済みだった、というもの。またもや先の例で言うならば、俺が殺したのは容姿や境遇や年齢が良く似た別人だったとかそんなんで、両親は無事なので俺は生まれる、と。世界一売れたイギリスのファンタジー児童文学シリーズの三巻を読んだことがあれば、ヒポグリフが助かった一連の流れを思い出してもらえばわかりやすいか。自衛隊が戦国時代にタイムスリップするＳＦ小説を読んだことがあれば、「ノッブ居ねえなって思ってたけど俺がノッブだわこれ」ってなったアレだ。こちらは当人の主観では未来が変わっているパターンもあるが、その実どうあっても変えられない。
さて、では実際時間旅行するとそのあたりどうなるのか？
数多（あまた）の世界や時間を旅してきたアビー曰く。世界ってのはわりと強情なのだとか。
今、俺はその言葉をひしひしと実感している。
俺の視線の先、二階の階段付近からこちらを見る男。彼の心理が俺には手に取るようにわかる。だってほんの少し前に経験したから。

――なんか、俺が居る。
――え、なに、どういう？

★

三回戦の対戦カードの決定が一日遅れるらしい。俺たちだけでなく、参加三二組全員がだ。
「ムーンセルもうんざりしていることだろう。感情など持たないので比喩ではあるがね」
と、イイ笑顔で懇切丁寧に解説してくれやがった言峰曰く。原因は俺たちだそうな。
アビーの力――領域外の力は、彼女が現界してＳＥ・ＲＡ・ＰＨに存在しているだけでもムーンセルに結構な負荷をかけているらしいのだ。
そこに一回戦での宝具使用でさらにドン！　二回戦で俺が人間やめたせいでもひとつドン！　二回戦での宝具使用でダメ押しのドン！　哀れムーンセルはエラーの炎に包まれた！
とまあ、そんなわけで、諸々の修正やアップデートに一日かかるらしい。
他の参加者には詳しい事情は伏せられているそうだが、俺たちにだけは。当事者の！　俺たちに！　だけは！　教えてくれた。もちろん善意からではないだろう。愉悦に歪んだあの顔を見て誰が善意だと思えるのか。
そもそも何故現界させたとか、力にもっと制限かけて現界させるなり何なり手があったんじゃねぇーのとか、ムーンセルへのツッコミ所が無いわけではない。だが俺たちの排除ではなく自己修復と自己強化で対応してくれるのならそれはありがたい。
なので、この降って湧いた一日の休日に文句は無い。
だが――暇だ。

「遠坂お前何かねぇーの？　こう、優雅芸とか」
「ねぇーわよ。つか何よ優雅芸って」
「はぁーっっかえ。俺はともかくフォーリナーを楽しませるくらいしろよなあ？」
「しばくぞ変態」
　公平を期するためということで、アリーナと図書室は立ち入りが禁じられているのだ。
　リソースを集めることも、情報を集めることもできない。出歩けば何かの拍子に自分たちの情報が他のマスターに漏れないとも限らない。
　すると当然の帰結として、マスターの大半がマイルームに引き籠もっており。
　マジでなぁーんにもやることが無くなってしまうのだ。
　あまりに暇を持て余して屋上に足を運んでみれば遠坂が居たので話し相手になってもらおうと思ったのだが、話題も特に無く。
「じゃあはくのんは？　ほら、ハクノ１０００％的な一発芸とか、ひたすら輝く岸波的な一発芸とか」
「しばくぞ変態。私の肌は安くない。あとはくのん言うな」
　ていうか知ってんのかよ。記憶無いんじゃなかったのか。
「そっか……そうだよな、普段から穿いてないもんな。はくのんなのに」
「その口を閉じろ変態。穿いとるわ。めっちゃめちゃせくすぃーなの穿いとるわ。あとはくのん言うな」
　そんな感じで、柵に寄りかかってダラダラしていたところにフラッと現れた岸波を弄ってみるものの、すぐに飽き。
『暇だなぁ……』
　三人揃って空を見上げてぼやくことになるのは時間の問題だったと言える。
「ムーンセルの修復とアップデート、なんて結構な一大事のはずなんだけど……ＳＥ．ＲＡ．ＰＨに居るとこうも暇とはねぇ……」
「ほんとにな……」

「今まで忙しかったぶん慣れないよね……」
　そのまま無言の時間が数秒。
『暇だなぁ……』
　再び異口同音に呟くのだった。これは酷い。
「なあ、そういや運動場とか弓道場とかプールとかって今でも行けんの？」
　ふと目に付いたそれらを見て、なんとなく話題に出した。予選のときは「学校生活」のシミュレーションだったので行けたし利用できたのだが、今はどうなんだかよく知らない。
「また唐突ね……普通に行けるわよ。行っても特別何かあるわけでもないから誰も行かないけど」
「へえ。てっきりただの映像（フレーバー）かと思ってたよ」
　聖杯戦争というタスクにおいては無駄もいいところのそれがきちんと存在しているとは、正直予想外だった。もしかしたら一度作ったものをわざわざ途中で消すよりも、聖杯戦争が終わってからこの校舎やアリーナごと消した方がコストが低いのかも知れない。
『マスター、私行ってみたいわ！』
「お、そうかい？　んじゃ行ってみっか」
　アビーが行きたいのなら是非も無い。どうせ暇だし、散歩も兼ねて行くとしようか。
「あら、フォーリナーが何か言った？」
「応、運動場とか行ってみたいってよ。つーわけで行くわ」
「はいはい行ってらっしゃい」
　シッシッと鬱陶しそうに手を振る遠坂。その横でははくのんが胡散臭げな眼差しをこちらに向けている。
「正直今でも納得いかない。あんないい子のマスターがこんな気狂いの変態だなんて」
「言ってろ」
　いい子なのは全面的に同意するが、こいつはダンとの決戦でのアビーを見ても同じ事が言えるのだろうか。
　アビー至上主義の俺とて、自分の感性があまり一般的でないのは理

解している。俺にとってはあのテンションの彼女も魅力的すぎるいい子に違いないが、おそらくかなり常識的な感性だろうはくのんにとってアレは割と邪悪なんじゃなかろうか。
「あ、そうだ夜ノ森くん。あなた、例の噂知ってる？」
今まさに階段を降りんとした矢先、遠坂がそんな言葉を投げてきた。
「例の噂？　……ああ、放課後のなんとかいうやつか？」
なんつったっけ、殺人鬼？
次の三回戦に残っているマスターは三二人。一回戦には一二八人居たわけだから、実に九六人が既に死んでいる。そのうちの何人か、下手すれば何十人かが、一人のマスターに暗殺されている――とか、なんかそんな噂だったような。
「そ。それなんだけど、どうも単なる与太話ってわけじゃないみたいよ」
「ふーん。まあ、レオが居る時点で予想はしてたよ。予選でそれらしい奴を見たしな」
「なら良いわ。今日なんてホイホイ出歩いてちゃ絶好のカモよ、せいぜい気をつけなさいな」
「そっちもな。決戦の場でもなく、対戦相手ですらない奴に暗殺されるとかお互い死んでも御免だろ」
「違いないわね」
そして今度こそ階段を降りていく。
この校舎の階段は踊り場が各階のロビーを兼ねている。三階のそこに生徒会ＮＰＣの柳洞一成が居るのを横目に見ながら通り過ぎ、二階へ。
二階ロビーに脚を踏み入れた直後、それは起こった。
「――っ!?」
――突然、背筋が総毛立った。
奇妙な悪寒を覚えて身構え、周囲を見回す。
そして、それは、居た。
廊下の奥。マイルームに繋がる扉の前に――俺とアビーが居たの

だ。
（なんか、俺が居る。え、なに、どういう？）
さすがの俺も困惑不可避。なんだあれは、何がどうなって――。
「――っ!?」
そちらに気を取られている間に、事態はマズい方へ動いてしまった。圧倒的な力に引っ張られるように後方へ跳ね飛ばされる。
そして、すわ背後の壁にぶつかるかと感じた瞬間、景色が変わった。そのまま床に、否、この感触からして地面に放り出される。
立ち上がり、頭を振って気を取り直す。
既視感のある場所だ。海底のような、円形の広場。細部（ディテール）は異なっているが、構造（システム）は決戦場のそれのようだ。
それに思い至った瞬間、脳内に警鐘がけたたましく鳴り響く。
だって決戦場だ。誰がどうやって俺をここに連れてきたのかは知らないが、決戦場であるならばつまり、ここには敵が居るはずだ。
まずい。まずい！
どうも俺だけが転移させられたようで、アビーの気配はどこにも無い。
人間やめたとかイキッてみても、まだまだ化け物としてはひよっ子の俺にあるのは魔術師（ウィザード）としての技量だけだ。アビーのような超常の力も無ければ、身体を化け物に変えるとかもできない。俺のスペックはまるっきり〝ちょっとだけ常人より才能があるだけの人間〟でしかない。
サーヴァントどころか敵性プログラム（エネミー）ですら打倒するのは厳しい。だがここは決戦場、敵が居るならば間違いなくサーヴァントだろう。
詰んでいる。詰んでいる詰んでいる詰んでいる――！
「脆弱にも程がある。魔術師とはいえ、ここまで非力では木偶にも劣ろう」
不意に、声。
いつの間にそこに居たのか。突如現れたのか、あるいはテンパった俺が気づいていなかっただけか。いずれかはわからないが、正面、少し離れた位置に男が一人。

彼が見下ろす先には、これまた今になって気づいたが、幾人かの人間が倒れ臥している。おそらく聖杯戦争に参加するマスターだったモノだ。

「鵜を縊(くび)り殺すのも飽きた。多少の手応えが欲しいところだが……」

言って、ようやくこちらへ視線を向けた男は、言うなれば〝死〟そのものだった。

燃えるような衣装に身を包んだ鋭い目つきの偉丈夫が、先のロビンフッドのそれなど比較にもならない程の濃密な殺気を投げてくる。

ダメだ。これは、ダメだ。

勝てるわけがない。俺だけでは、決して。

だが――だが、ダメだ。

それでも死ぬわけにはいかない。少なくとも、一瞬であってもアビーより先に死んではいけない。彼女を〝偽者〟として死なせるなど、《夜ノ森彗》の人生にそれだけはあってはならない――！

「……ほう？」

精一杯の抵抗として男の目を睨み返していると、彼はピクリと眉を動かした。

「なるほど、少しは気骨がある者がおる。

だが気勢だけでは何も出来ぬぞ。小僧、果たして踏みとど――」

――浮遊感。

思わず目の前の〝死〟から目を逸らし、足元を見る。ぽっかりと開いた銀の穴。それが何であるかを認識したときには、俺はその向こうの真っ黒な空間にすっかり落ちきってしまっていた。

そして落下する先にもう一つの穴を認めたときには、心から安堵していた。

そして、落下するままにその穴をくぐる。床へ投げ出されたが、安堵のあまり痛みもあまり気にならない。

立ち上がって周囲を確認すると、マイルームの扉の前だった。階段の方へ目を向けると、三階から俺が降りてくる。

そして俺の頭上の門からアビーが現れ、門が閉じる。同時に、あちらの俺がキョロキョロし始め、俺を見て呆然とする。なるほど、さっ

きのはこれか。
そしてあちらの俺が吹っ飛ばされ、消える。あちらのアビーが実体化し、こちらを見て何かを納得した後、門を開いてその向こうに消えた。
さらにそのすぐ後に、今度は岸波が三階から降りてきた。そして身震いした後、俺と同じように吹っ飛んで消えた。
しかししばらくした後、彼女は元居た場所に再び現れた。
俺はアビーに目を向ける。すると彼女はにっこりと笑ってこちらを見上げてきた。なるほど、キミの仕業(しわざ)か。
「その実力でどうやって逃げ延びた？」
俺たちでも、岸波やキャスターでもない第三者の声がして、俺は意識を階段の方へ戻す。
黒服の男だ。俺たちに背を向ける形で岸波に言葉を投げている。
「ただの雑魚かと思ったが。爪を隠した腕利きだったか？
何にせよ、あの魔拳から生き延びたのだ」
男の纏う気配が変わる。無差別に発散されていた殺気が、怜悧な刃物のように研ぎ澄まされて岸波ただ一人へと向けられる。
「ここで始末するに越したことは――」
「葛木先生、質問があるのですが」
「――っ!?」
奴の言葉を遮ってやると、飛び跳ねるようにして身体ごとこちらを振り返った。
「……貴様。どうやってそこに」
「やだなあ葛木先生、ここはマイルーム前ですよ？」
予選で葛木と名乗っていたこの男。予選中は記憶が無かったこともあって何の違和感も持たなかったが、今となってはこいつが教師など似合わないにも程がある。
「それとも――俺がここに居るのがおかしい理由でも？　なあ、ユリウス・ベルキスク・ハーウェイ？」
この男は西欧財閥(ハーウェイ)の反乱分子対策部隊の隊長だ。
こいつがここに居る理由はレオしかないだろう。

いかにレオが優秀で、そのサーヴァントがハイスペックであっても、物事に絶対は無い。だがハーウェイにとって聖杯を手中とし、場合によっては処分することは現状では最重要課題。だから彼の勝率を少しでも底上げするために何らかの手を打つだろうとは思っていた。

それがユリウスだ。レオを確実に熾天の玉座へ至らせるための、言わば捨て駒。レオが聖杯を手にするのだから、こいつはここに来た時点で必ず死ぬ。つまりこいつは、雇い主から死んで良い奴だと思われているのだ。

「……思い出したぞ。貴様、夜ノ森彗だな。こんなところで何をしている」

「当然、願いを叶えに来た」

「大人しくしていれば捨て置いたものを。まさか自分から死地に飛び込んで来るとはな」

俺のような平凡な魔術師をこの男が知っている理由。それは俺の生い立ちにある。

先述の通り、俺の両親はガキの頃に西欧財閥のお膝元へと移住した。ひい爺さんの代までは魔術師（メイガス）だった両家はその衰退と共に魔術師（ウィザード）へと形を変えており、その霊子ハッカーとしての実力を以て移住先ではそれなりの地位を得ることになる。

外側からは管理社会管理社会と言われるように、実際徹底した管理が敷かれている。が、その実ある程度より上の階級になるとそれほどガチガチではなくなる。それは西欧財閥が〝財閥〟であることからもわかる通りだ。それに両親は共に魔術師（ウィザード）の家系であったことから、二人の恋愛を妨げられることはなかった。理想を言えばそれぞれが別の人と結婚して魔術回路を持つ家系が増えた方が良かったのだろうが、魔術師（ウィザード）の血が絶えないならばそれはそれで問題無かったのだ。

そうして生まれた俺は、当然ながら西欧財閥の治める地で育つことになる。

特に不自由無く育った俺は、一〇歳のときにアビーと出会う。そしてそれからどうにかして彼女と再会しようと、それだけを考えて生き

てきた。
だが西欧財閥の管理の内側に居てはそれは叶わない。
北半球資源機構加盟諸国（NERO）の間で結ばれた、特定の対象物に対するあらゆる接触・調査・分析はもとより発言さえ禁じる《国際協定４０４》――通称《封印指定》。そして世界のあらゆる通信やドキュメントを監視する検閲ネットワーク《ＩＮＱ―ＥＸＩＴ》。
これらがある限り、アビーと会う方法を西欧財閥に目をつけられず探すなど、内側からでは不可能に近い。奴らは検閲を受けない通信行為を超法規的な処罰の対象としているため、下手すれば殺される。
それに、〝外〟の方が霊子ハッカーのレベルが高い。
何しろ西欧財閥は、人類の生存にこれ以上の技術は不要であるとして技術開発を禁じている。技術革新など起こらない。その結果西欧財閥の技術は三〇年もの間停滞している。
その点、〝外〟は違う。
世界の富の六割が西欧財閥の下に集まる現代、その管理下でない国や地域はおよそ全てが荒廃している。無政府状態の地域が多く、略奪や暴行といった犯罪行為は日常茶飯事。数万人を超える人間が一斉に死亡するような大規模なテロや事件も、頻繁ではないまでも珍しくもない。
だがそのかわり、西欧財閥の目が届ききってもいない。内側に居ては調べることさえできないような情報もあれば、違法に研究され独自に発展した技術や文化だってある。
当然、霊子ハッカーだってそうだ。西欧財閥の目を交い潜り、欲望に任せて研鑽を積んでいる。
俺は、それらが欲しかった。
だから――ハイスクールを出てすぐに脱走した。
《西欧財閥》に魔術師（ウィザード）クラスの霊子ハッカーはいない。
そもそも魔術師（メイガス）とは縁の無い組織。そのうえ魔術協会を「危険思想を持った反社会的勢力」として解体し、さらには民衆に技術開発を禁じているのだから当然だ。
それはレオだって、目の前のユリウスだって例外ではない。いや、

レオは特別だから魔術師（ウィザード）である可能性も無くはないが、少なくともユリウスは違うだろう。おそらくハーウェイのスパコンあたりを直結するなりなんなりして補助を受けているはずだ。そうでなければ、魔術師クラスでない彼は月へ物理的に接触しなければムーンセルにアクセスできない。宇宙開発を封じている側の人間がまさか月へ直接出向くわけにもいくまい。

西欧財閥の支配地域に居る魔術師はその全てが利害の一致による〝外部協力〟という形を取っている。そのうえ魔術師（メイガス）のような研鑽や探求は禁じられるのだ。

そういう事情があったから、俺のような平々凡々として何ら秀でたところのない魔術師（ウィザード）でもなんとか脱走できた。システムに介入したことに気付かれるのは避けられないまでも、その対処に出るのは通常のハッカーか、良くて魔術師には至らないレベルの霊子ハッカー。魔術師が出てくるまでにはある程度時間があったし、魔術師とそれ未満では処理速度に差がありすぎる。文字通り桁が違うのだ。

そうして外に出られた俺は二年かけて世界中を渡り歩き、最終的に日本に渡り、聖杯戦争の存在を知って今に至る。

だが西欧財閥は間抜けではない。

魔術師が脱走したとなれば当然警戒する。対テロ部隊等には俺の情報がすぐさま回されただろう。

そして俺もまた、阿呆ではないつもりだ。

当然、調べる。外の世界で起きる暴動やテロを鎮圧しているのはどういう部隊なのか。どこがそういう事件の頻発する地域で、どこに近づいてはいけないのか。西欧財閥から半ば捨て置かれている日本に渡ったのはそのあたりが理由だったりする。

そしてユリウスが率いる部隊を知った。彼は現場にもよく出て来ているようだったから人相はすぐに知れた。

今の彼の口ぶりからして積極的には探されていなかったようだが……警戒してしすぎるということもない。

「敵を援（たす）けるとは気の多い。身体でも使って誑（たら）し込まれたか？」

「阿呆かこのドチビ。こんな女に興味ねぇーよ。気色悪いこと言って

んじゃねえぞチビ。やーいチービチービ。お前のかーちゃんエルシニア・ペスティスぅー」
「貴様……！」
　ユリウスの殺気が膨れ上がる。
　だが温(ぬる)い。こんなもの、さっきのサーヴァントに較べればそよ風のようだ。
「なんだチビ、やんのかチビ。ここでかチビ。チビは脳みそまでチビかチビ。チビペナルティをチビ喰らっちまうぞチビ。任務に支障が出るんじゃねぇーのかチビ。チビチビチービ」
「――ッ！」
「ハッハッハァー！　なんだチビお前その顔！　にーらめっこしーましょってか？　いやーそいつは俺の負けだわ！　あんまり面白い顔なもんで笑いを堪えられねえよ！　さすがハーウェイのお犬様、芸に関しちゃ一級品だなァ！　ハァーッハッハッハ！」
　気色悪いこと言われた仕返しだ、煽りまくって脳みそ沸騰させてやるぜぇー！　ヒャァッハァー!!
　俺の横で実体化したままユリウスを警戒しているアビーから心なしか呆れたような雰囲気が漂っている気配がしないでもない可能性も否定できないと言えなくもないが、気にしたら負けな気がする！
「……夜ノ森君、あなたってたまには真面目にやれないのかしら？」
　さらに言葉を続けようとしたところに邪魔が入った。屋上から来たのだろう遠坂だ。
「失礼な奴だな。俺はいつだって真面目だぞ」
「なおさら悪いわ」
　視線を一切ユリウスから外さないまま俺に呆れの感情を飛ばすという器用なことをする遠坂。
　そして彼女の登場で煽りが途切れたせいで冷静になったか、ユリウスはひとつ深呼吸してから、
「……遠坂凛か」
「あら、私のことはご存知なのね。さすが世界に誇るハーウェイ財団の情報網。

それとも、ちょっと派手にやりすぎたかしら」
「貴様もこの女を援けに来たのか？　味方にでも引き入れるつもりか」
「まさか。そいつは私の仕事とは無関係よ。殺したいなら勝手にすれば？」
「――テロ屋め。その隙に後ろから刺されるのではたまらんな」
ユリウスは油断無く俺と遠坂を視界に入れたまま後退（あとずさ）った。もはや岸波のことは眼中に無いようだ。心なしか遠坂よりも俺の方が熱い視線を向けられている気もする。
奴は廊下の壁に辿り着くと、再び口を開いた。
「夜ノ森彗。どうやったかは知らんが、貴様の警戒度は跳ね上げておこう」
男の姿は壁に染み込むようにして消えていった。
しばらくして、空気が弛緩する。ユリウスの気配は完全に消えたようだ。ようやく警戒を解いたアビーが霊体化して消えていった。
「管理者側（システム）のキャラクタープロフィールをハッキングして好き放題やってた、か。この手の反則（ルールブレイク）を平気でやってくるとなると、校内でも気を抜いてられないわね」
遠坂が独り言のようにそう呟いてこちらに顔を向けた。
そこには先程と同じ、強烈な呆れがあった。
「にしても、あなた何やらかしてあいつに知られてたわけ？　レジスタンス組織はいくつか知ってるけど、あなたの名前は聞いたこと無いわよ」
俺は別に西欧財閥の支配体制に反発しているわけじゃないからな。わざわざ喧嘩売る気もさらさら無い。
まあ方々飛び回ってる間に勧誘されたことはあるが、そんなお遊びに付き合っているほど暇じゃないからな。全部断ったさ。
「ああ、俺、フォーリナーに会いたいあまり脱走したんだよ。西欧財閥の支配地から」
「あなたホントにブレない……いや待って、時系列おかしくない？」
何言ってんだこいつ？　おかしくないだろ。アビーに会ったのが

俺の原点なんだから。
「そういえばあなた、フォーリナーと一緒に居るのが願いだとか言ってたような……けど、その子と会ったのはここが最初のはずでしょう？　ここに来るに至った原動力たる願いは別にあるはず――」
「ああ、まあ、最初はフォーリナーと再会したかったけど、それは願うまでもなくこうして叶っちゃったからな」
「……」
　何やら黙り込んでしまった。
「どういうこと……？　現代の英霊だとでもいうの……？　けど、もう人類に英霊になれる余地なんて……」
　いや、よく聞いたらなんかブツブツ言ってるようだが、残念ながら声が小さすぎて俺には聞き取れない。
　まあ良い、聞かせる気のないことなんだろうから俺が気にしたって仕方ない。
「よくわからんが、俺もう行くぞ。フォーリナーと散歩しに」
「え？　あ、ええ」
　一応義理として声を掛けてから、当初の目的通り普段行かない場所へブラブラ行こうとしたのだが、
「あ、待って！」
　岸波に呼び止められた。今日はよく出端（でばな）を挫かれる日だな。
「何？」
「そ、その。ありがとう夜ノ森。助けてくれて」
　だから昨日のアレといい、なんでそれを俺に言うんだよ。
「礼ならフォーリナーに言ってやってくれ。俺は何も指示しちゃいない。全部この子がしたいからしたことだ」
「……それでも、ありがとう」
　ホント何なんだ気色悪い。さっきまで散々毛嫌いしてたくせに。まあなんだかんだ俺もヒトだから、礼を言われること自体は悪い気はしないが。
「フォーリナーも、ありがとう」
「どういたしまして。白野さんはお友達だもの、助けるのは当然だわ。

私、あなたとは仲良くしたいと思ってるのよ」
再度実体化したアビーが天使のような笑顔でそう言う。
だが――。
「でも――」
服装は変わらないまでも、瞳を朱に染め、額に鍵穴と眼を顕(あらわ)し、無邪気だった笑顔に邪悪を詰め込んで。
「もしも直接戦うときが来たら、私はあなたに一切容赦しないわ。慈悲なんてかけない、めいっぱい残酷に殺すことでしょう。そのときあなたがどんな顔で、どんな声で啼(な)いてくださるのか――今から楽しみで仕方ないわ」
「――ッ!?」
岸波が息を呑む。よく見れば遠坂も絶句しているようだ。
だがそんなことは全く気にしないというように、アビーは元の可憐な姿と笑顔に戻って、
「けれどそれまではお友達でいましょうね。殺伐とした戦争にだって息抜きは必要だもの」
そう言い残して霊体化した。
「じゃあな」
そして今なら呼び止められまいと、俺は少し足早にその場を後にした。

「で、なんで――」
校庭を弓道場へ向かって歩きながらアビーに尋ねようとして、やめた。さっき岸波本人に言っていたのを思い出したからだ。
『なんで、何?』
「いや、いいや。にしても、門を使ってやりゃよかったのに」
『もう、マスター。わかっててそういうこと言うのは感心しないわ。あなたと違って白野さんは変態じゃないんだから、そんなもの使ったら死んでしまうじゃない。
そうしないと死ぬなら賭けてみても良いけれど、今回は様子見して

る間に終わっちゃったし』
　よもやアビーにまで変態呼ばわりされるとは。ありがとうございます！
「でも、だったらどうやったんだ？」
『普通に戦ったわ。ギリギリだったけれど、そうしたら相手が時間切れとか言って退いていったの。けっこう魔力を貰ったのだけど、気付かなかった？』
　気付かなかった。仕方ないじゃないか、あんなのと対峙したせいでいっぱいいっぱいだったんだから。
　にしても、時間切れ、か。反則して無理矢理マスターをアリーナに飛ばすせいだろうな。あまり長時間だとさすがにムーンセルが異常に気付くのだろう。
『ところでマスター。私、人を身長のことでからかうのはどうかと思うの』
「えっ」
『本人にはどうにもならないことでからかうのは卑怯よ』
　……はは―ん？
「さてはフォーリナー……」
『な、何？』
「身長のこと気にしてるのかい？」
『――！　そ、そんなことないわ！　わ、わ、私だって、この身体は一二歳だからこんなだけど、もう少し成長したらシバの女王様みたいなナイスバディだったんですからね！』
　霊体化していても、わかる。めちゃくちゃ慌てている。きっと顔は真っ赤だし、手は上下にブンブン振られているに違いない。
「で、本当は？」
『……全然成長しなかったわ』
　天　は　我　を　救　い　給（たも）　う　た。
「シバの女王様とやらがどんなだか知らないけど、気にしないでいいのに。むしろ成長しない方が良い。そのままのキミでいてくれ」
『うぅ……ケイってときどき度し難い変態だわ……いいけれど……』

二度目の変態頂きましたー！

いやでも、アビーがナイスバディのお姉さんになるとか――悪くはない、か？

待て待て気を確かに持て。仮にそうなっても俺の愛は全く変わらないが、やはり記憶に強く焼き付いている今の姿の方が嬉しい。映画女優で言うとイ○ベル・アジャーニよりもヘザー・○ルークが良いのだ。

「そんなことより、あのドチビのせいで時間食ったからな。焦らずゆっくり急ごうぜ」

せっかくアビーとのんびりできる日が出来たのだ。焦りすぎても勿体ないが、あんちくしょうのせいで時間が減ったのは事実だしな。

『焦らず……ゆっくり……急ぐ……？　それはゆっくりなの？　急ぐの？』

伝わらないかー。